918.6
N659s
S
00257877

漱石全集
第十四卷

詩歌俳句及初期の文章附印譜

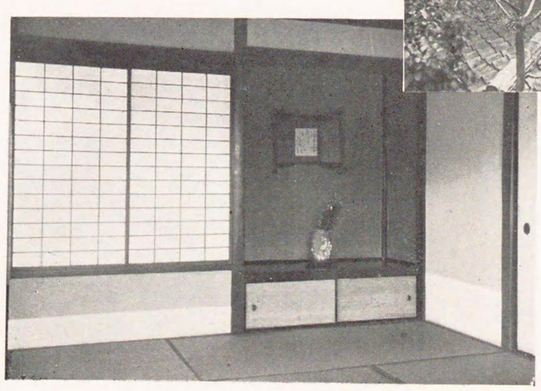
明治二十五年十二月撮影

国立国会
27.2.-5
図書館

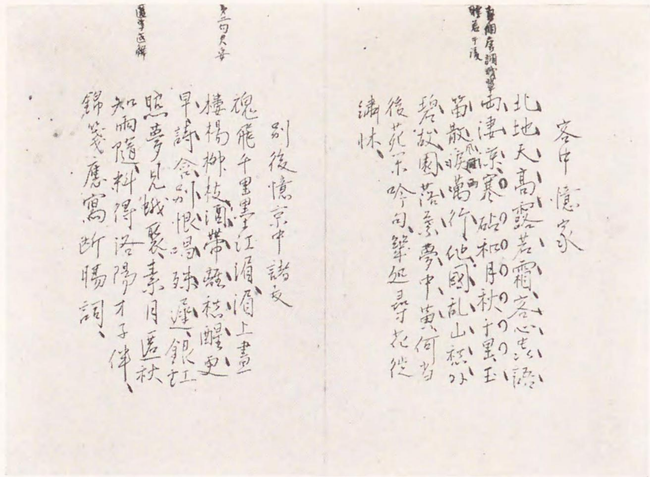
257877

家の町寺琳光市本熊

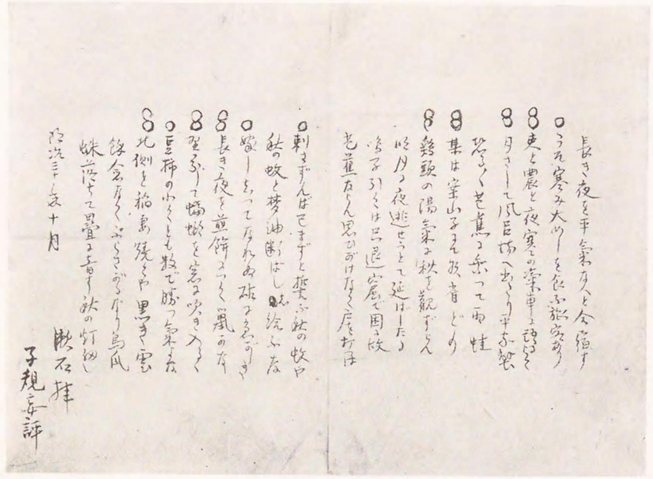
觀外　室居の石漱　町番二市山松



同　內部



「木屑録」原稿の一部



正岡子規へ送りたる句稿の一部

目次

小品

倫敦消息　七
倫敦消息　九
自轉車日記　三九

評論

老子の哲學　六三
文壇に於ける平等主義の代表者「ウオルト、ホイツトマン」Walt Whitman の詩について　七七
一〇三　七九

中學改良策　一二三
英國詩人の天地山川に對する觀念　一六五
『トリストラム、シャンデー』　二〇九
英國の文人と新聞雜誌　二二七
小說「エイルヰン」の批評　二四一
マクベスの幽靈に就て　二六三

雜　篇

愚見數則　二八一
人生　二八三
無題　二九一
不言之言　二九九
祝辭　三〇一
無題　三〇九

作　文

正成論　三一一
觀菊花偶記　三一三
居移氣說　三一五
對月有感　三一六
山路觀楓　三一七
故人到　三一九
故人來　三二一
母の慈　西詩意譯　三二四
二人の武士　西詩意譯　三二六
Japan and England in the Sixteenth Century　三二八
三三〇
三三二

翻譯
催眠術（アーネスト、ハート）　三三五
詩伯「テニソン」（オウガスタス、ウード）　三三七
セルマの歌（オシアン）　三四七
カリックスウラの詩（オシアン）　三六七
A Translation of Hojio=ki　三七一
英詩　三七五
漢詩文　四〇五
七艸集評　四二三
木屑錄　四三五
漢詩　四三九
和歌　四四九
新體詩　五〇三
俳體詩　五〇七
連句　五一九
俳句　五四九
季題別　五五五
印譜　七九一
解說　八七五
八八五

小

品

倫敦消息

一

〈前略〉夫だから今日卽ち四月九日の晩をまる潰しにして何か御報知を仕樣と思ふ。報知し度と思ふ事は澤山あるよ。こちらへ來てからどう云ふものかいやに人間が眞面目になつてね。色々な事を見たり聞たりするにつけて日本の將來と云ふ問題がしきりに頭の中に起る。柄にないといつてひやかし給ふな。僕の樣なものが斯る問題を考へるのは全く天氣のせいや「ビステキ」のせいではない天の然らしむる所だね。此國の文學美術がいかに盛大で、其盛大な文學美術が如何に國民の品性に感化を及ぼしつゝあるか、此國の物質的開化がどの位進歩して其進歩の裏面には如何なる潮流が横はりつゝあるか、英國には武士といふ語はないが紳士と〔いふ〕言があつて、其紳士は如何なる意味を持つて居るか、如何に一般の人間が鷹揚で勤勉であるか、色々目につくと同時に色々癪に障る事が持ち上つて來る。時には英吉利がいやになつて早く日本へ歸り度なる。す

ると又日本の社會の有樣が目に浮んでたのもしくない情けない樣な心持になる。日本の紳士が德育、體育、美育の點に於て非常に缺乏して居るといふ事が氣にかゝる。其紳士が如何に平氣な顏をして得意であるか、彼等が如何に浮華であるか、彼等が如何に空虛であるか、彼等が如何に現在の日本に滿足して己等が一般の國民を墮落の淵に誘ひつゝあるかを知らざる程近視眼であるか抔といふ樣な色々な不平が持ち上つてくる。先達て日本の上流社會の事に關して長い手紙を書いて親戚へやつた。然しこんな事は只英國へ來てから餘慶に感ずる樣になつた迄でちつとも英國と關係のない話しだし、君等に聞せる必要もなし、聞き度事でもなからうから先ぬきとして何か話さう。何がいゝか、話さうとすると出ないものでね、困るな。仕方がないから今日起きてから今手紙をかいて居る迄の出來事を「ほとゝぎす」で募集する日記體でかいて御目にかけ樣。出來事だつて風來山人の生活だから面白可笑い事はない、頗る平凡な物さ。「オキスフオード」で「アン」を見失つたとか、「チエヤリングクロス」で決鬪を見たとか云ふのだと張合があるが、如何にも憫然な生活だからくだらない。然し僕が倫敦に來てどんな事をやつて居るかが一寸分る。僕を知つて居る君等にはそこに少々興味があるだらう。

此前の金曜が「グード、フライデー」で「イースター」の御祭の初日だ。町の店はみんなやすんで買物抔は一切禁制だ。明る土曜は先平常の通りで、次が「イースター、サンデー」又買物を

禁制される。翌日になつてもう大丈夫と思ふと、今度は「イースター、モンデー」だといふので又店をとぢる。火曜になつて漸く故に復する例である。內の夫婦は御祭中田舍の妻君の里へ旅行した。田中君は「シエクスピヤ」の舊跡を探るといふので「ストラトフオドオンアヴオン」と云ふ長い名の所へ行かれた。跡は妻君の妹と下女のペンと吾輩と三人である。

朝目がさめると「シヤツター」の隙間から朝日がさし込んで眩い位である。これは寢過したかと思つて枕の下から例のニツケルの時計を引きずり出して見るとまだ七時二十分だ。まだ第一の銅羅の鳴る時刻でない。起きたつて仕方がないが別にねむくもない。そこでぐるりと壁の方から寢返りをして窓の方を見てやつた。窓の兩側から申譯の爲に金斤(原)だか麻だか得體の分らない窓掛が左右に開かれて居る。其後に「シヤツター」が下りて居て、其一枚／＼のすき間から御天道樣が御光來である。ハヽー愈春めいて來て有難い、こんな天氣は倫敦ぢや拜めなからうと思つて居たが、矢張人間の住んでる所丈あつて日の當る事もあるんだなと一寸悟りを開いた。夫から天井を見た。不相變ひゞが入つて居て不景氣だ。上で何かごと／＼いふ音が聞こえる。下女が四階の室で靴でもはいて居るんだらう。部屋は益あかるくなる。銅羅はまだ鳴りさうな景色がない。今度は天井から眼をおろしてぐる／＼部屋中を檢査した。然し別に見るものも何にもない。まことに御恥しい部屋だ。窓の正面に箪笥がある。箪笥といふのは勿體ない、ペンキ塗の箱だね。上の

引出に股引とカラとカフが這入つて居て、下には燕尾服が這入つて居る。あの燕尾服は安かつたがまだ一度も着た事がない。つまらないものを作つたものだなと考へた。箱の上に尺四方許りの姿見があつて其左りに「カル、ス」泉の瓶が立て居る。其横から茶色のきたない皮の手袋が半分見える。箱の左側の下に靴が二足、赤と黒だ、並んで居る。毎日穿くのは戸の前に下女が磨いて置いて行く。其外に禮服用の光る靴が戸棚に仕舞つてある、靴ばかりは中々大臣だなと少々得意な感じがする。若し此家を引越すとすると此四足の靴をどうして持つて行かうかと思ひ出した。一足は穿く、二足は革鞄につまるだらう、然し餘る一足は手にさげる譯には行かんな、裸で馬車の中へ投り込むか、然し引越す前には一足は慥かに破れるだらう。靴はどうでもいゝが大事の書物が隨分厄介だ。是は大變な荷物だなと思つて板の間に並べてある本と、煖爐の上にある本と、机の上にある本と、書棚にある本を見廻した。先達て「ロツチ」から古本の目錄をよこした「ドツヅレー」の「コレクション」がある。七十圓は高いが欲い。夫に製本が皮だからな。此前買つた「ウアートン」の英詩の歴史は製本が「カルトーバー」で古色蒼然として居て實に安い堀出し物だ。然し爲替が來なくつては本も買へん、少々閉口するな、其内來るだらうから心配する事も入るまい、……ゴン〳〵〳〵そら鳴つた。第一の銅羅だ、此から起きて仕度をすると第二の「ゴング」が鳴る。そこでノソ〳〵下へ降りて行つて朝食を食ふのだよ。起きて股引を穿きながら、

子にふし銅羅に起きはどうだらうと思つて一人でニヤ〳〵と笑つた。夫から寢臺を離れて顔を洗ふ臺の前へ立つた。是から御化粧が始まるのだ。西洋へ來ると猫が顔を洗ふ樣に簡單に行かんのでまことに面倒である。瓶の水をジヤーと金盥の中へあけて其中へ手を入れたがあゝ仕舞つた顔を洗ふ前に毎朝カル、ス鹽を飲まなければならないと氣がついた。入れた手を盥から出した。拭くのが面倒だから壁へむいて二三返手をふつて夫から「カル、ス」鹽の調合にとりかゝつた。飲んだ。其から一寸顔をしめして「シエヴイング、ブラツシ」を攫んで顔中無暗に塗廻す。剃は安全髮剃だから仕まつがいゝ。大工がかんなをかける樣にスー〳〵と髭をそる。いゝ心持だ。夫から頭へ櫛を入れて、顔を拭て、白シヤツを着て、襟をかけて、襟飾をつけて「シヤツター」を捲き上ると、下女がボコンと部屋の前へ靴をたゝきつけて行つた。暫くすると第二のゴン〳〵が鳴る。一寸御誂通りに出來てる。夫から階子段を二つ下りて食堂へ這入る。例の如く「オートミール」を第一に食ふ。是は蘇格土蘭人の常食だ。尤もあつちでは鹽を入れて食ふ、我々は砂糖を入れて食ふ。麥の御粥みた樣なもので我輩は大好だ。「ジョンソン」の字引には「オートミール」……蘇國にては人が食ひ英國にては馬が食ふものなりとある。然し今の英國人としては朝食に之を用いるのが別段例外でもない樣だ。英人が馬に近くなつたんだらう。夫から「ベーコン」が一片に玉子一つ又はベーコン二片と相場がきまつて居る。其外に燒パン二片茶一杯、夫で御仕舞だ。

吾輩が二片の「ベーコン」を五分の四迄食ひ了つた所へ田中君が二階から下りて來た。先生は昨夜遲く旅から歸つて來たのである。尤も先生は毎朝遲刻する人で決して定刻に二階から天下つた事はない。「いや御早ふ」。妻君の妹がGood morningと答へた。吾輩もExcuse meといつて食卓の上にある手紙を開いた。田中君はムシヤ／＼やつて居る。吾輩はGood morning といつた。「エツヂヒル」夫人から此十七日午後三時に緩々御話しを伺ひ度から御出被下間敷やといふ招待狀だ。おや／＼と思つた。吾輩は日本に居つても交際は嫌いだ。まして西洋へ來て無辯舌なる英語でもつて窮窟な交際をやるのは尤も厭ひだ。加之倫敦は廣いから交際抔を始めると無暗に時間をつぶす、御負にきたない「シヤツ」抔は着て行かれず、「ゾボン」の膝が前へせり出して居てはまづいし雨のふる時抔はなさけない金を出して馬車抔を驕らねばならないし、夫は／＼氣骨が折れる、金が入る、時間が費へる、眞平だが仕方がない、たまにはこんな醉興な貴女があるんだから行かなければ義理がわるい、困つたなと思つて居ると、田中君が旅行談を始めた。吾輩に「シエクスピヤ」の石膏製の像と「アルバム」をやらうと云ふから難有ふといつて貰つた。夫から「シエクスピヤ」の墓碑の石摺の寫眞を見せて、こりや何だい君、英語の漢語だね、僕には讀めないといつた。やがて先生は會社へ出て行つた。是から吾輩は例の通り「スタンダード」新聞を讀むのだ。西洋の新聞は實にでがある。始から仕舞まで殘らず讀めば五六時間はかゝるだ

らう。吾輩は先第一に支那事件の處を讀むのだ。今日のには魯國新聞の日本に對する評論がある。若し戰爭をせねばならん時には日本へ攻め寄せるは得策でないから朝鮮で雌雄を決するがよからうといふ主意である。朝鮮こそ善い迷惑だと思つた。其次に「トルストイ」の事が出て居る。「トルストイ」は先日魯西亞の國教を蔑視すると云ふので破門されたのである。天下の「トルストイ」を破門したのだから大騷ぎだ。或る繪畫展覽會に「トルストイ」の肖像が出て居ると其前に花が山をなす、夫から皆が相談して「トルストイ」に何か進物をし樣なんかんて「トルストイ」連は燒氣（やつき）になつて政府に面當をして居るといふ通信だ。面白い。さうかうする內に十時二十分だ。今日は例の如く先生の家へ行かねばならない。先づ便所へ行つて三階の部屋へかけ上つて仕度をして下りて見るとまだ十一時には二十分許り間がある。又新聞を見る。昨日は「イースター、モンデー」なので所々で興行物があつた。其雜報がある。「アクエリアム」で熊使ひが熊を使ふと云ふ事が載つて居る。熊が馬へ乘つて埒の周圍をかけ廻る、棒を飛び超える、輪拔けをすると書いてある。面白さうだ。此度は廣告を見た。「ライシアム」で「アーヴイング」が「シエクスピヤ」の「コリオラナス」をやると出て居る。先達つて「ハー、マジエスチー」座で「トリー」の「トエルフスナイト」を見た。脚本で見るより遙かに面白い。「アーヴイング」のも見たいものだ。十一時五分前になつた。書物を抱へて家を出た。

僕の下宿は東京で云へば先づ深川だね。橋向ふの場末さ。下宿料が安いからかゝる不景氣な處に暫く――ぢやない、つまり在英中は始終蟄息して居るのだ。其代り下町へは滅多に出ない。一週に一二度出る許りだ。出るとなると厄介だ。先づ「ケニントン」と云ふ處迄十五分許り歩行い、て、夫から地下電氣で以て「テームス」川の底を通つて、夫から汽車を乘換えて、所謂「ウエスト、エンド」邊に行くのだ。停車場まで着て十錢拂つて「リフト」へ乘つた。連が三四人ある。驛夫が入口をしめて「リフト」の繩をウンと引くと「リフト」がグーツとさがる、夫で地面の下へ拔け出すといふ趣向さ。せり上る時はセビロの仁木彈正だね。穴の中は電氣燈であかるい。汽車は五分毎に出る。今日はすいて居る、善按排だ。隣りのものも前のものも次の車のものも皆新聞か雜誌を出して讀んで居る。是が一種の習慣なのである。吾輩は穴の中ではどうしても本抔は讀めない。第一空氣が臭い、汽車が搖れる、只でも吐きさうだ。まことに不愉快極まる。停車場を四許りこすと「バンク」だ。こゝで汽車を乘りかへて一の穴から又他の穴へ移るのである。丸でもぐら持ちだね。穴の中を一町許り行くと所謂two pence Tubeさ。是は東「バンク」に始まつて倫敦をズツト西へ横斷して居る新しい地下電氣だ。どこで乘つてもどこで下りても二文卽ち日本の十錢だからかう云ふ名がついて居る。乘つた。ゴーと云つて向ふの穴を反對の方角に列車が出るのを相圖に、此方の列車もゴーと云つて負けない氣で進行し始めた。車掌が next station

Post-office といつてガチヤリと車の戸を閉めた。とまる度につぎの停車場の名を報告するのが此鐵道の特色なのである。向ふの方に若い女と四十恰好の女が差し向いに座を占めて居た。吾輩の右に一間許り隔つて婆さんと娘がベチヤ〳〵話しをして居る。向ふの連中は雜誌を讀みながら「ビスケツト」か何かかぢつて居る。平凡な乘合だ。少しも小說にならない。

もう厭になつたから是で御免蒙る。實は僕の先生の話しをし度のだがね。餘程奇人で面白いのだから。然し少々頭がいたいから是で御勘辨を願はう。四月九日夜。

二

又「ホト、ギス」が屆いたから出直して一席伺はう。我輩の下宿の體裁は前回申し述べた如く頗る憐れつぽい始末だが、そういふ境界に澄まし返つて三十代の顏子然として居られるかと君方は屹度聞くに違ひない。聞かなくつても聞く事にしないと此方が不都合だから先づ聞くと認める。處で我輩が君等に答へるんだ、懸價のない所を答へるんだから、其積りで聞かなくつては行けない。

我輩も時には禪坊主見た樣な變哲學者の樣な悟り濟した事も云つて見るが、矢張大體の處が御存じの如き俗物だからこんな窮屈な暮しをして回や其樂をあらためず賢なるかなと褒められる權

利は毛頭ないのだよ。そんならなぜもつと愉快な所へ移らないかと云ふかも知れないが、其處に大に理由の存するあり焉さ。先聞き給へ。成程留學生の學資は御話しにならない位少ない。倫敦では猶々少ない。少ないが此留學費全體を投じて衣食住の方へ廻せば我輩と雖も最少しは樂な生活が出來るのさ。夫は國に居る時分の體面を保つ事は覺束ないが(國に居れば高等官一等から五つ下へ勘定すれば直ぐ僕の番へ巡はつてくるのだからね。尤も下から勘定すれば四つで來て仕舞うんだから日本でも餘り威張れないが)兎に角是よりも薩張りした家へ這入れる。然るにあらゆる節儉をして斯樣なわびしい住居をして居るのはね、一つは自分が日本に居つた時の自分ではない單に學生であると云ふ感じが強いのと、二つ目には折角西洋へ來たものだから成る事なら一冊でも餘計專門上の書物を買つて歸り度慾があるからさ。そこで家を持つて下婢共を召し使つた事は忘れて、只十年前大學の寄宿舍で雪駄のカヽトの樣な「ビステキ」を食つた昔しを考へては夫よりも少しは結構? 先づ結構だと思つて居るのさ。人は「カムバーウェル」の樣な貧乏町にくすぼつてると云つて笑うかも知れないがそんな事に頓着する必要はない。斯樣な陋巷に居つたつて引張りと近づきになつた事もなし夜鷹と話をした事もない。心の底迄は受合はないが先擧動丈は君子のやるべき事をやつて居るんだ。實に立派なものだと自ら慰めて居る。

然しながら冬の夜のヒュー〳〵風が吹く時にストーヴから烟りが逆戻りをして室の中が眞黑に

一面に燻るときや、窓と戸の障子の隙間から寒い風が遠慮なく這込んで股から腰のあたりがたまらなく冷たい時や、板張の椅子が堅くつて疝氣持の尻の樣に痛くなるときや、自分の着て居る着物が漸々變色して來るにつれて自分が段々下落する樣な情ない心持のする時は、何の爲にこんな切り詰めた生活をするんだらうと思ふ事もある。エー構はない。本も何も買へなくても善いから爲替はみんな下宿料にぶち込んで人間らしい暮しを仕樣といふ氣になる。夫からステツキでも振り回はして其邊を散歩するのである。向へ出て見ると逢ふ奴も〳〵皆んな厭に青いが高い。御負に愛嬌のない顏ばかりだ。こんな國ではちつと人間の脊いに稅をかけたら少しは儉約した小さな動物が出來るだらう抔と考へるが、夫は所謂負惜しみの減らず口と云ふ奴で、公平な處が向ふの方がどうしても立派だ。何となく自分が肩身の狹い心持ちがする。向ふから人間並外れた低い奴が來た。占たと思つてすれ違つて見ると自分より二寸許り高い。此度は向ふから妙な顏色をした一寸法師が來たなと思ふと、是卽ち乃公自身の影が姿見に寫つたのである。不得已苦笑ひをすると向ふでも苦笑ひをする。是は理の當然だ。夫から公園へでも行くと角兵衞獅子に網を被せた樣な女がぞろ〳〵歩行いて居る。其中には男も居る。職人も居る。感心に大概は日本の奏任官以上の服裝をして居る。此國では衣服では人の高下が分らない。牛肉配達抔が日曜になるとシルクハツトでフロツクコート抔を着て澄して居る。然し一般に人氣が善い。我輩抔を捕へて惡口をつい

たり罵つたりするものは一人も居らん。ふり向いても見ない。當地では萬事鷹揚に平氣にして居るのが紳士の資格の一つとなつて居る。無暗に巾着切りの様にこせ〳〵したり物珍らしそうにじろじろ人の顏なんどを見るのは下品となつて居る。殊に婦人抔は後ろを振りかへつて見るのも品が悪いとなつて居る。指で人をさすなんかは失禮の骨頂だ。習慣がこうであるのにさすが倫敦は世界の勸工場だから餘り珍らしそうに外國人を玩弄しない。それから大抵の人間は非常に忙がしい。頭の中が金の事で充滿して居るから日本人抔を冷かして居る暇がないといふ様な譯で、我々黄色人——黄色人とは甘くつけたものだ。全く黄色い。日本に居る時は餘り白い方ではないが先づ一通りの人間色といふ色に近いと心得て居たが、此國では遂に人間を去る三二舍色と言はざるを得ないと悟つた——其黄色人がポク〳〵人込の中を歩行いたり芝居や興行物抔を見に行かれるのである。然し時々は我輩に聞えぬ様に我輩の國元を氣にして評する奴がある。此間或る所の店に立つて見て居たら後ろから二人の女が來て "least poor Chinese" と評して行つた。least poor とは物(原)句い形容詞だ。或る公園で男女二人連があれは支那人だいや日本人だと爭つて居たのを聞た事がある。二三日前去る所へ呼ばれてシルクハットにフロックで出掛けたら、向ふから來た二人の職工みた様な者が a handsome Jap. といつた。難有いんだか失敬なんだか分らない。先達て或芝居へ行つた。大入で這入れないからガレリーで立見をして居ると傍のものが、あすこ

に居る二人は葡萄耳人だらうと評して居た。——こんな事を話す積りではなかつた。話しの筋が分らなくなつた。一寸一服してから出直さう。

先散歩でもして歸ると一寸氣分が變つて來て晴々する。何こんな生活も只二三年の間だ。國へ歸れば普通の人間の着る物を着て普通の人間の食ふ物を食つて普通の人の寢る處へ寢られる。少しの我慢だ、我慢しろ〳〵、と獨り言をいつて寢て仕舞ふ。寢てしまふ時は善いが、寢られないで又考へ出す事がある。元來我慢しろと云ふのは現在に安んぜざる譯だ——段々事件が六づかしくなつて來る——時々やけの氣味になるのは貧苦がつらいのだ。年來自分が考へた又自分が多少實行し來りたる處世の方針は何處へ行つた。前後を切斷せよ、妄りに過去に執着する勿れ、徒らに將來に望を屬する勿れ、滿身の力をこめて現在に働けといふのが乃公の主義なのである。然るに國へ歸れば樂が出來るから夫を樂しみに辛防し様と云ふのは果敢ない考だ。國へ歸れば樂をさせると受合つたものは誰もない。自分がきめて居る許りだ。自分がきめてもいゝから樂が出來なかつた時にすぐ機鋒を轉じて過去の妄想を忘却し得ればいゝが、今の様に未來に御願ひ申して居る様では到底其未來が滿足せられずに過去と變じた時に此過去をさらりと忘れる事は出來まい。のみならず報酬を目的に働らくのは野暮の至りだ。死ねば天堂へ行かれる、未來は雨蛙と一所に蓮の葉に往生が出來るから、此世で善行を仕様といふ下卑た考と一般の論法で、夫よりも猶一層

陋劣な考だ。國を立つ前五六年の間にはこんな下等な考は起さなかつた。只現在に活動し只現在に義務をつぐし現在に悲喜憂苦を感ずるのみで、取越苦勞や世迷言や愚癡は口の先許りでない腹の中にも澤山なかつた。夫で少々得意に成つたので外國へ行つても金が少なくつても一簞の食一瓢の飲然と呑氣に洒落に又沈着に暮されると自負しつゝあつたのだ。自惚々々！こんな事では道を去る事三千里。先明日からは心を入れ換えて勉強專門の事。こう決心して寢て仕舞ふ。

かゝる有樣で此薄暗い汚苦しい有名なカンバーウエルと云ふ貧乏町の隣町に昨年の末から今日迄居つたのである。居つたのみならず此先も留學期限のきれる迄は此處に居つたかも知れぬのである。然るに茲に或る出來事が起つていくら居りたくつても退去せねばならぬ事となつた、といふと何か小說的だが、其譯を聞くと頗る平凡さ。世の中の出來事の大半は皆平凡な物だから仕方がない。此家はもとからの下宿ではない。去年迄は女學校であつたので、こゝの神さんと妹が經驗もなく財產もなく將來の目的もしかと立たないのに自營の道を講ずる爲めに此上品の樣な下等の樣な妙な商買（原）を始めたのである。彼等は固より不正な人間ではない。正道を踏んで働ける丈働いたのだ。然し耶蘇敎の神樣も存外半間なもので、かういふ時に一寸人を助けてやる事を知らない。そこでもつて家賃が滯る——倫敦の家賃は高い——借金が出來る、寄宿生の中に熱病が流行る。一人退校する、二人退校する、仕舞に閉校する。……運命が逆まに回轉するとこう行くもの

だ。可憐なる彼等——可憐は取消さう二人とも可憐といふ柄ではない——エー不憫なる——憫然なる彼等は飽く迄も困難と奮戰し樣といふ決心で遂に下宿を開業した。其開業したての烟の出てゐる處へ我輩は飛び込んだのである。飛び込んでから段々事情を聞いたときに此度こそは此二人の少女、ではない我輩より三寸許り脊いの高い女に成功あらしめ給へと私かに祈念を凝らした。誰れに祈念を凝らしたと聞かれると少々困る。祈るべき神に交際の無い拙者だから、只あてどもなく祈念した。果せる哉一向靈現（原）がない。ちつとも客が來ない。「夏目さん、あなたの御存じの方で入らしつて頂く方はありますまいか」「左樣、實に御氣の毒だから周旋し度のだが、倫敦には別に朋友といふものがないから——」。夫でも先達て迄は日本人が一人居つた。此先生は頗る陽氣な人でこんな家には向かない。我輩がほと〻ぎすを讀んで居るのを見て、君も天智天皇の方はやれるのかいと聽た男だ。其日本人がとう〳〵逃出す。殘るは我輩一人だ。かうなると家を疊むより仕方がない。そこで是から南の方にあたる倫敦の町外れ——町外れと云つても倫敦は廣い、どこ迄廣がるか分らない——其町外れだから餘程邊鄙な處だ。其處に恰好な小奇麗な新宅があるので、そこへ引越さうといふ相談だ。或日亭主と神さんが出て行つて我輩と妹が差し向ひで食事をして居ると陰氣な聲で「あなたも一所に引越して下さいますか」といつた。此「下さいますか」が色氣のある小說的の「下さいますか」ではない。色澤氣拔きの世帶染た「下さいますか」であ

る。我輩が此語を聞いたときは非常にいやな可愛想な氣持ちがした。元來我輩は江戸つ兒だ。然るに朱引内か朱引外か少々曖昧な所で生れた精(原)か知らん今迄江戸つ兒のやる樣な心持ちのいゝ慈善的事業をやつた事がない。今何と答をしたか慥かに覺えて居らん。苟も一遍の義俠心があるならば、うんあなたの移る處ならどこでも移ります、と答へる筈なのだ。さうは答へなかつたらしい。茲にさう答へられない譯がある。成程此妹は極内氣な大人しい而も非常に堅固な宗教家で、我輩は此女と家を共にするのは毫も不愉快を感じないが、姉の方たるや少々御轉だ。此姉の經歷談も聞たが長くなるから拔きにして、一寸小生の氣に入らない點を列擧するならば、第一生意氣だ、第二知つたか振りをする、第三詰らない英語を使つてあなたは此字を知つて御出ですかと聞く事がある。一々勘定すれば際限がない。先達てトンネルと云ふ字を知つて居るかと聞た。夫からstraw卽ち藁といふ字を知つて居るかと聞た。英文學專門の留學生もかうなると怒る張合もない。近頃は少々見當が付たと見えてそんな失敬な事も言はない。又一般の擧動も大に叮嚀になつた。是は漱石が一言の爭もせず冥々の裡に此御轉婆を屈伏せしめたのである。――そんな得意談はどうでも善いとして、此國の女殊に婆さんとくると、所謂老婆親切と云ふ譯かも知れんが、自分の使ふ英語に賴みもせぬ註解を加へたり、此字は分りますか抔といふ事が澤山ある。此間さる處へ呼ばれて其所の奥さんと談しをした。すると其人が大の耶蘇信者だからたまらない。滔々と

神德を述べ立てた。まことに品の善い、しとやかな御婆さんだ。然る處evolutionと云ふ字を御承知ですかと聞かれた。「世の中の事は亂雜で法則がない樣ですがよく御覽になると皆進化の道理に支配されて居ります……進化……分りますか」。丸で赤ん坊に說敎する樣だ。向は親切に言つてくれるんだから、へー〳〵と云つて居るより仕方がない。それは此婆さんの樣にベラ〳〵喨(原)舌る事は出來ない。挨拶抔も只咽喉の處へせり上つて來た字を使つてほつと一息つく位の仕儀なんだから向ふで此方を見くびるのは無理はないが、離れ〴〵の言語の數から云へばあなたよりも我輩の方が餘計知つて居りますよといつてやり度位だ。其れからよく御婆さんを引合に出すが、もう一人御婆さんがある。此御婆さんが先達て手紙をよこして其中にfolkといふ字を使つてゐる。只使つてゐる許なら不思議はないが、其字にfoot noteが付いて居る。是は英國古代の字なりとあつた。「ノート」を自分の手紙へつけるのも面白いが、其ノートの文句が猶更面白い。此御婆さんと船へ合乘をした時に、何か文章を書け、直してやるといふから、日記の一節を出して宜敷御賴(おたの)まうす事にした。すると大變感心したといつて二三所一二字添削して返した。見ると直さなくつても決して差支のない所を直して居る。そして飛でもない間違つた事が例のノート的で書いてある。此御婆さんは決して下等な人でない。相應な身分のある中流の人である。かくの如き人間に邂逅する英國だから、我下宿の妻君が生意氣な事を云ふのも別段相手にする必要はないが、

同じ英國へ來た位なら今少し學問のある話せる人の家に居つて、汚ない狹いは苦にならないから、どうか朝夕交際がして見たい。かう云ふ望があるから、へー行きませうとは答へなかつたが、自分の望み通りの人で下宿人を置く處があるか夫が頗る疑はしい。廣い世界にはあるだらう。けれども夫に逢着するのは難中の難事である。我輩の先生の處が一間あいて居れば置てもらうのだけれども、それは間がないのだから出來ない相談だ。かう云ふ時になると西洋の新聞は便利だ。萬事廣告の世界なのだから下宿の廣告がいくらでもある。我輩が以前下宿をさがす時 Daily Telegraph の下宿の廣告欄を見た事がある。始めから終り迄讀むのに三時間かゝつた事を記憶(原)して居る。今は「テレグラフ」を取つて居らん、「スタンダード」だ。此新聞は上品な新聞だから茲へ出る廣告なら間違はないと思つて四月十七日の分の廣告欄を讀み始めると、存外營業的のが多くつて素人家へ置き度と云ふのが少ない。然し色々のがある。「宿料低廉、風呂付、食物上等」こんなのは普通なのだ。「ハイドパークに面し地下電氣へ三分地下鐵道へ五分、貴女と交際の便利あり」なんと云ふのがある。「球突隨意ピヤノあり、gay society, late dinner」此も珍らしくない。「レートヂンナー」と云ふのは此頃の流行なのだ。我輩抔には至極不便だ。其中で下の樣なのを見出した。「立派なる室を有する寡婦及其妹と共に同宿せんとする餘り派出やかならざる紳士を求む。御望の方は〇〇筆墨店へ御一報を乞ふ」。先づ茲へでも一つ中つて見樣と云ふ氣にな

つたから直ぐ手紙を書いて、宿料其他委細の事を報知して貰ひたい、小生の身分はかく〳〵職業はかく〳〵、可成低廉で可成愉快な處に住みたいと勝手な事をかいてやつた。

其夜の十時頃自分の室で讀書をしてゐると、室の戸をコツ〳〵叩くものがある。"Yes, come in"といつたら宿の亭主がニコ〳〵して這入つて來た。「實はあなたも御承知の通り此度引越す事に極ましたが、どうでせう、向ふはこゝよりも大分奇麗で且器具抔も餘程上等にしますが、來て頂く譯には參りますまいか」「夫は君の方で僕に是非來て呉れと言ふのなら……」「イエ是非といつて御無理を願ふ譯ではありませんが、御都合がよければ——實は御馴染にもなつて居りますし家内や妹も大變夫を希望致しますから」「君の新宅へ下宿人を置き度といふ事は僕も承知して居ますが、あながち僕でなくつても善いだらうと思つてね」と實は是々だと話すと、亭主の顏が少々陰氣になつて來た。我輩も少々手持無沙汰である。「夫ぢやかうし樣、いづれ先方から返事が來る、來れば一先づ行つて室を見て、夫が氣に入らなかつたら君の方へ行くとし樣、外を探す事はやめにして。あの手紙を出す前に君の方の希望がどの位の程度だか分つて居れば、聞き合せる迄もない御望みに應じたのだが、かう成ては仕方がない。先づ先方の返事次第ですね。其代り外は決してさがさない。あれがいけなければ屹度君の方へ行きますよ」。亭主は御邪魔樣といつて下りて行つた。

朝になつて食堂へ行くと誰も居ない。皆んな飯をすました後である。あゝ今日も寢坊して氣の毒だなと思つて「テーブル」の上を見ると、薄紫色の狀袋の四隅を一分許り濃い菫色に染めた封書がある。我輩に來た返事に違ひない。こんな表の狀袋を用る位では少々我輩の手に合はん高等下宿だなと思乍ら「ナイフ」で開封すると、「御問合せの件に付申上候。此家はレデー(此レデーといふ字の下に棒が引いてある)の所有にて室内の裝飾の立派なるは勿論室々は悉く電氣燈を用ひよき召使を雇ひ高尚優雅なる生活に適する樣に意を用ひ候。宿料は一週三十三圓に御座候。或は御氣に召さぬかと存じ候へども、御出被下候へば喜こんで室々御案内可仕候、敬具」。飯を食ひながら呼鈴を押して宿の神さんを呼んだ。「とう／＼あなたの方へ行く事にしましたよ。一週三十三圓の下宿料なんか到底我輩には拂へんから君の方へ行きませうよ」「はあそうですか、どうも難有う、可成氣を付ますからどうぞ左樣願ひたいもので」。細君が出て行つた後から亭主の首が半分戸の間から出た。Thank you, Mr. Natsume, thank you. と言つてニコ／＼笑つた。我輩も少々嬉しい樣な心持ちがした。細君と妹は引越しの荷ごしらへで終日急がしい。七時に茶を飲むときに食堂で逢つた。「今日は飼つて居た鸚鵡を賣りました」と妹がいつた。姉もまけずに「前使つた學校の招牌も賣りました。十圓に買つて行きました」と云つた。

運命の車は容赦なく廻轉しつゝある。我輩の前及彼等二人の前には如何なる出來事が横はりつ

つあるか。我等は三人ながら愚な事をして居るかも知れぬ。愚かも知れぬ、又利口かも知れぬ。只我輩の運命が彼等二人の運命と漸々接近しつゝあるは事實である。後を顧みてかの薄紫の貴女及び其妹の事と其門構付の家を想像し、前を見て此貧困なるしかし正直なる二人の姉妹と其未來の樂園と豫期しつゝある格子戸作りを想像して、兩者の差違を趣味ある樣にも感ずる。又貧富の懸隔は斯樣に色氣なき物かとも感ずる。又ミカウバーと住んで居つたデヴイツド、カツパーフヒールドの樣な感じもする。四月二十日。

三

朋友其朋友と共に我輩が生活を共にする所の朋友姉妹の事に就ては前回少しく述ぶるところあつたが、此外に我輩が尤も敬服し尤も避易する所の朋友がまだ一人ある。姓はペン渾名はbedge pardonなる聖人の事を少しく報道しないでは何だか氣が濟まないから、同君の事を一寸御話して、次回からは方面の變つた目擊談觀察談を御紹介仕らう。抑も此ペン即ち内の下女なるペンに何故我輩が此渾名を呈したかと云ふと、彼は舌が短かすぎるのか長すぎるのか呂律が少々廻り兼ねる善人なる故にI beg your pardonと云ふ代りにいつでもbedge pardonと云ふからである。ベツヂ、パードンは名の如く如何にもベツヂ、パードンである。然し非常な能辯家で、彼の舌の

先から唾液を容赦なく我輩の顏面に吹きかけて話し立てる時抔は滔々滾々として惜い時間を遠慮なく人に潰させて毫も氣の毒だと思はぬ位の善人且雄辯家である。此善人にして雄辯家なるベツヂパードンは倫敦に生れながら丸で倫敦の事を御存じない。田舍は無論御存じない。又御存じなさり度もない樣子だ。朝から晩迄晩から朝迄働き續けに働いて夫から四階のアツチツクへ登つて寢る。翌日日が出ると四階から天降つて又働き始める。息をセツセとはずまして——彼は喘息持である——はたから見るのも氣の毒な位だ。左り乍ら彼は毫も自分に對して氣の毒な感じを持つて居らぬ。Aの字かBの字か見當のつかぬ彼は少しも不自由らしい樣子がない。我輩は朝夕此女聖人に接して敬慕の念に堪えん位の次第であるが、此ペンに捕つて話しかけられた時は幸か不幸か是は他人に判斷して貰ふより仕方がない。日本に居る人は英語なら誰の使ふ英語でも大概似たもんだと思つて居るかも知れないが、矢張日本と同じ事で、國々の方言があり身分の高下があり抔して、夫は／＼千違萬別である。然し教育ある上等社會の言語は大抵通ずるから差支ないが、此倫敦のコツクネーと稱する言語に至つては我輩には到底分らない。是は當地の中流以下の用ふる語ばで字引にない樣な發音をするのみならず、前の言ばと後の言ばの句切りが分らない事程左樣早く饒舌るのである。我輩はコツクネーでは毎度閉口するが、ベツヂパードンのコツクネーに至つては閉口を通り過してもう一遍閉口する迄少々草臥るから開口一番一寸休まなければやり切

れない位のものだ。我輩がこゝに下宿したてには屢ばペンの襲擊を蒙つて恐縮したのである。不得已此旨を神さんに屆け出ると、可愛想にペンは大變御小言を頂戴した。御客樣にそんな無仕付な方(原)があるものか以後はたしなむが善からうと極めつけられた。夫から從順なるペンは決して我輩に口をきかない。但し口をきかないのは妻君の內に居る時に限るので、山の神が外へ出た時には依然として故のペンである。故のペンが無言の業をさせられた口惜しまぎれに折を見て元利共取返さうと云ふ勢でくるからたまらない。一週間無理に斷食をした先生が八日目に御櫃を抱へて奮戰するの慨(原)がある。

例の如くデンマークヒルを散步して歸ると、我輩の爲に戸を開いたるペンは直ちに饒舌り出した。果せるかな家內のものは皆新宅へ荷物を方付に行つて伽藍堂の中に殘るは我輩とペン許りである。彼は立板に水を流すが如く娓々十五分間許りノベツに何か云つてゐるが毫もわからない。能辯なる彼は我輩に一言の質問をも挾さましめざる程の速度を以て辯じかけつゝある。我輩は仕方がないから話しは分らぬものと諦めてペンの顏の造作の吟味にとりかゝつた。溫厚なる二重瞼と先が少々逆戻りをして根に近づいて居る鼻とあくまで紅いに健全なる顏色とそして自由自在に運動を縱まゝにして居る舌と、舌の兩脇に流れてくる白き唾とを暫らくは無心に見詰めて居たが、やがて氣の毒な樣な可愛想の樣な又可笑い樣な五目鮨司の樣な感じが起つて來た。我輩は此感じ

を現はす爲に唇を曲げて少しく微笑を洩らした。無邪氣なるペンは其邊に氣のつく筈はない。自分の噺に身が入つて笑ふのだと我(原)點したと見えて赤い頰に笑靨をこしらへてケタ〳〵笑つた。此頓珍漢なる出來事の爲に我輩は愈變テコな心持になる、ペンは益乘氣になる、始末がつかない。彼の云ふ所をあそこで一言こゝで一句、分つた所丈綜合して見るとかういふのらしい。昨日差配人が談判に來た。内の女連はバツが惡いから留守を使つて追ひ返した。此玄關拂の使命を完ふしたのがペンである。自分は嘘をつくのは嫌だ。神さまに濟まない。然し主命もだし難しで不得已嘘をついた。先大抵こゝら當りだらうと遠くの火事を見る樣に見當をつけて漸く自分の部屋へ引き下つた。我輩のトランクと書籍は今朝三時頃主人が新宅へ運んで仕舞たので、殘るのは身體ばかりだ。何となく寂漠の感がある。夜の八時頃にコツ〳〵戸を叩いて這入つて來た——例のペンが——今日差配人が四度來たといふ注進だ。夫から何かいふが少しも解しかねる。あまり面倒だから善い加減にして追さげる。……十時頃に又ペンが來た。今度差配が來たらどう仕樣といふ。今度は相談の爲だ。心配するには及ばんといつて慰めて引きさがらせる。十時半になるがまだ内のものは歸らない。若しこゝの亭主が詐欺師であつて我輩を置き去りにして荷物丈取つて行つたとすれば我輩はアンポンタンの骨頂で嘸かし人に笑はれるだらうと氣が付いた。やがて門の戸のあく音がする。歸つたらしい。先づアンポンタンにならずに濟んだ。難有いと寢る。

翌日が四月二十五日、九時頃起きて下へ行くと主人夫婦が今朝飯をすました處だ。我輩が食卓に就くのを相圖に昨夜の騷動を御存じですかと神さんが尋ねた。我輩は三階に寢るのである。下でどんな事があつたか少しも知らない。騷動つて何があつたのですと聞くと、例の差配人との問着一件である。昨夜彼等が新宅から歸つて家へ這入る途端門口に待ち設けて居た差配人は、亭主が戸をしめる餘地のない程早く彼等に續いて飛び込んで、何故斷りなしに然も深夜に引越をする夫でも君は紳士かと云ふと、我輩が我輩の荷物をわきへ運ぶに誰に斷はる必要がある、又何時に荷を出さうと此方の勝手ぢやないかと亭主が抗辯する。夫から段々議論に花が咲いて壯語四隣を驚かすと云ふ騷ぎであつたさうな。元來此家は神さんの名前でかりて居る。處が七年前に少々家賃を滯ふらしたのが今日迄祟つて居て出る事が出來ん。然も彼の財産は早晩家賃のかたに取られるといふ始末だ。然し憐れなる姉妹は別段取押へられて困る樣な物も持つて居ない。差配も夫には目をつけて居らん。只此老差配の目ざして居るのは亭主其人の家財にある。亭主も二十世紀の人間だから其邊に拔かりはない。代言人の所へ行つてちやんと相談して居る。日沒後日出前なれば彼の家具を運び出しても差配は指を啣へて見物して居らねばならぬと云ふ事を承知して居る。夫だから朝の三時頃から大八車を僱つて來て一晩寢ずにかゝつて自分の荷を新宅へ運んだのである。彼は頗る尨大なるシマリのない顏をして居る。そこで申譯の爲に少々鼻の下へ髭をはやして

は居るが、中々差配に負けぬ拔目のない男と見える。

我輩は亭主に自分の身體はいつ移れるのかと聞いたら今日でも宜いといふから、午飯の後妻君と共に新宅へ引き移る事にした。

神さんと二人で午飯を食つて居ると亭主が代言人の所から歸つて來て神さんに、御前一つ手紙をかいて差配の所へ郵便でやれ書留にしなくてはいかんといつて又出て行つた。神さんはサラサラ何か書き始める。どんな手紙をかくか少々見度心持でもある。やがて神さんは書き了つて「一寸〇〇さんかういふ手紙なんです聞いて下さい」と高慢な顏をして手紙を讀み始める。「拜啓妾は驚入申候。……どうですもう少し緩くり讀みませうか……妾は驚き入申候。昨日は三度ならず四度迄も留守宅へ御來臨の上下婢に向つて妾等身の上に關する種々なる質問を發せられ、夫のみならず無斷にて人の家を搜索なされ、剩へ下婢に向つて妾はレデーの資格なきものなり抔餘計な事を吹聽せられ候由、元來右は如何なる御主意に御座候や伺度候。此亂暴なる貴下の擧動に對し妾は辯解を求むる權利ありと存候。……かう云ふのです。是がね策なんですよ」と云ふから我輩も少々驚き入申して居る處だが、策つて云ふのはどんな策なんですと聞くと、先生愈得意だ。ようござんすか、御手紙を書いてちやんと此通り控えをとつて置くでせう、先方で若し此事件を裁判沙汰にする日には此が證據になつて差配が亂暴を働いたといふ種になるのですよ。今迄は女二

人だと思つて隨分勝手な事ばかりしたのですが、今ぢや男が付いて居るからさう許り踏みつけられちや居ませんのさ、と間接に亭主の自慢を仰せられた。夫から御待遠樣それでは出掛ませうと云ふから出掛けた。我輩は手提革鞄の中へ雜物を押し込んで頗る重い奴をさげて而も左の手には蝙蝠とステツキを二本携えて居る。レデーは網袋の中へ澁紙包を四つ入れて右の手にさげて居る。此澁紙包の一つには我輩の寢卷とヘコ帶が這入つて居るんだ。左の手には是も我輩のシートを澁紙包にして抱へて居る。兩人とも兩手が塞がつて居る。飛んだ道行だ。角迄出て鐵道馬車に乘る。ケニングトン迄二錢宛だ。レデーは私が拂つて置きますといつて黑い皮の蟇口から一ペ子ー出して切符賣に渡した。乘合は少ない。向側に派出ななりをして居る若い女が乘つて居る。すると我輩の隨行して居るレデーが突然あなたはメリー、コレリのマスタークリスチアンを御讀みなさいましたかと大きな聲で聞た。是は近頃十五萬部賣れたといふ一寸有名な本だ。我輩は書物は持つて居るがまだ讀まないと答へた。「あの本はね、大變善く出來て居るのですがね、どうも作者の宗旨が何だか分らないのですよ。私の知つて居る者なんか皆んなコレリの宗旨は何だらうつて噂して居ますよ」と益向側の婦人に聞えよがしである。自分だつて讀んだ事もないのに鐵道馬車の中なんかでよせば善いと思つたが、仕方がないからウン〳〵と生返事をして居た。やがてケニングトンに着た。茲で馬車を乘り換る。此度は上へ上がらうと云ふから階子を登つてトップへ乘つ

た。「此左りにあるのが有名な孤兒院でスパージョンの紀念の爲に作つたのです。「スパージョン」て云ふのは有名な説教家ですよ」「スパージョン」位講釋しないだつて知つて居ら、腹が立つたから默まつて〻やつた。「段々木が青くなつて好い心持ですね、二週間位前からズツト景色が變つて來ましたね」「左樣、時にあすこに並んで居るのは何んて云ふ樹ですか」「あれ？あれはポプラーでさあね」「へエーあれがポプラーですか、ナール程」と我輩は感嘆の辭を發した。神さんはすぐツケ上る。「ポプラーはよく詩に咏じてありますよ、「テニソン」抔にも出て居ます。どんな風の無い日でも枝が動く。アスペンとも云ひます。是も慥か「テニソン」にあつたと思ひます」と「テニソン」專賣だ。其癖何の詩にあるとも云はない。我輩は面倒臭いといふ風でウンウン云ふのみである。向ふの敷石の上を立派な婦人が裾を長く引いて通る。「家の内での御引きずりには不贊成もありませんが、外であんな長い裾を引きずつて歩行くのはあまり體裁の善いものではありませんね」と裾短かなるレデーは我輩に教ふる處あつた。漸く「ツーチング」といふ處へつく。今度は圓太郎馬車で新宅の横町の前迄來た。「どれが内ですか」と聞いた。向ふに雜な煉瓦造りの長屋が四五軒並んで居る。前には何にもない。砂利を堀つた大きな穴がある。東京の小石川邊の景色だ。長屋の端の一軒丈塞がつて居てあとはみんな貸家の札が張つてある。塞がつて居るのが大家さんの内で其隣が我輩の新下宿、彼等の所謂新パラダイスである。這入らない

先から聞しに劣る殺風景な家だと思つたが、這入つて見ると猶々不風流だ。加之どの室にも荷物が抛り込んであつて丸で類燒後の立退場の樣だ。只我輩の陣取るべき二階の一間丈が少しく方付てオラレブルになつて居る。以前の部屋よりも奇麗だ。裝飾も先づ我慢出來る。やがて亭主が出て來て窓掛をコツ〳〵打ち付る。ストーヴの上へ額をかけるが「ミツスルトー」といふ額は如何です、あれは人によると嫌いますが一寸御覽に入れませうと云て持つて來て見せた。何でもない裸體畫の美人だ。「ハ、ー裸體畫ですな、結構です」と冗談半分にいつたら「へ、、私もちつとも構ひませんがね」とコツ〳〵釘をうつてかける。「どうです是で角度は……もう少し下向に……裸體美人があなたの方を見下す樣に——宜しう御座います」。夫から我輩の書棚を作つてやるといつて壁の寸法と書物の寸法をとつて「グードナイト」といつて出て行つた。

門前を通る車は一臺もない。往來の人聲もしない。頗る寂寥たるものだ。主人夫婦は事件の落着する迄は毎晩舊宅へ歸つて寢なければならぬ。新宅には三階に寢る妹とカーロー君とジャツク君とアチスト君である。カーロー君とジヤツク君は犬の名であつてアーチスト君はこゝの主人の店に使つて居る若き人間の名である。我輩の敬服し且辟易するベツヂパードンは解雇されて仕舞た。我輩は移轉後に此話を聞いて憮然として彼の未來を想像した。

魯西亞と日本は爭はんとしては爭はざらんとしつゝある。支那は天子蒙塵の辱を受けつゝある。

英國はトランスヴァールの金剛石を堀り出して軍費の穴を塡めんとしつゝある。此多事なる世界は日となく夜となく回轉しつゝ波瀾を生じつゝある間に我輩のすむ小天地にも小回轉と小波瀾があつて我下宿の主人公は其尨大なる身體を堵(原)してかの小冠者差配と雌雄を決せんとしつゝある。而して我輩は子規の病氣を慰めんが爲に此日記をかきつゝある。四月二十六日。

――三四、五―六『ホトトギス』――

倫敦消息

――大正四年九月文集『色鳥』に編入するにつき作者自ら筆を加へたるもの――

二

僕の下宿の體裁は前便に申述べた通り頗る憐れつぽいものだが、さういふ心細い所に、三十代の顏子のやうな氣持(きもち)で、能く澄ましてゐられるものだと君は不審を起すかも知れないが、僕とても御存じの如き俗物である以上、斯(こ)んな窮屈な活計(くらし)をして囘や其樂(たのしみ)を改めず賢なるかなと賞(ほ)められやうなどとは無論思つてゐない。たゞ已むを得ないので厭々(いやゝ)ながら辛抱してゐるのだとさへ推察して貰へばそれで澤山だ。

僕だつて留學生の學資全體を衣食住の方へ廻せば、いくら物價の高い倫敦でももう少し樂(らく)な生活は出來るのだが、自分はまた昔通りの書生に立ち返つたのだといふ感じが強く起るのと、折角西洋へ來たものだから成らう事なら一冊でも餘計專門上の書物を買つて歸りたいといふ慾望が僕を高壓的に支配するのとで、少しの不自由は我慢しなければならないといふ氣になるのだと思つ

て呉れ給へ。十年前大學の寄宿舍で雪駄の踵のやうな堅いビステキを食つた經驗のある僕は苦しくなるとあの時分の事を回想して一人で一人を慰めてゐる。

然し冬のヒュー／＼風が吹く晩に煖爐から烟が逆戻りをして室の中が一面眞黑に燻る時や、窓と戸の隙間から其寒い風が遠慮なく這ひ込んで來て、股から腰のあたりを堪らなく冷たくする時や、板張の椅子が堅いので尻が痼氣持見たやうに痛くなる時や、自分の着てゐる着物が漸々變色して來るにつけて、自分が段々下落する樣な情ない心持になる時は、必竟何の爲にこんな切り詰めた生活をするんだらうと自分で自分を疑つて見たくなる事もある。

そんな時は仕方がないから洋杖でも振り廻して氣を紛らす爲に何といふ目的もないのに矢鱈と其所いらを散歩するのである。然し其散歩が又晴々した心持に鬱した自分を變化させて呉れるとは限らないのだから困る。

先づ往來へ出て見ると、會ふものも／＼みんな脊が高くて立派な顏ばかりしてゐる。それで第一に氣が引ける。何となく肩身が狹くなる。稀に向ふから人並外れて低い男が來たと思つて擦り違ふ時に、念のため脊を比較して見ると、先方の方が矢つ張り自分より二寸がた高い。それから今度は變に不愉快な血色をした一寸法師が來たなと思ふと、それは自分の影が店先の姿見に映つたのである。僕は醜い自分の姿を自分の正面に見て何遍苦笑したか分らない。或時は僕と共に苦

笑する自分の影迄見守つてゐた。さうして其たんびに黃色人とは如何にも好く命けた名だと感心しない事はなかつた。

此間ある店先に立つてショーキンドーの中を覗いてゐたら後ろから二人の女が來て least poor Chinese と評して行つた。僕は斯ういふ形容の言葉を怒るよりも甚だ珍らしく聞いた。ある公園では男女の二人連が、あれは支那人だいや日本人だと云ひ爭つてゐるのを見受けた。二三日前は去る所へ呼ばれて絹帽にフロックで出掛けたら、向ふから來た二人の職工見たやうなものが、a handsome Jap と冷嘲して行つた。是は散歩ではないけれども序だから書くが、ある芝居へ行つたら大入で席の賣り切れたため仕方なしにガレリーで立見をしてゐると傍のものが彼所に居るのは葡萄牙人ぢやないかと評してゐた事もあつた。――斯んな譯でたとひ外へ出ても、遠くにゐる者が想像するやうに、決して愉快ではないのである。

僕はかゝる狀態で此薄暗い汚苦しい有名なカンバーヱルといふ貧乏町の隣り町に去年の末から今日迄動かずにゐた。無精な僕の事だからもし何の故障も身邊に起らなかつたなら、恐らく留學期の盡きる迄、同じ所に穴籠りの蛇のやうに蟄居してゐたかも知れない。然しいくら事を好まない僕の生活にも推移と變化が自然の勢で回つて來て、動きたがらない僕の身體を搖振にかゝるのだから、世の中は何處へ行つても多事と云はなければならない。

僕は其出來事を君に話る前に、順序としてまづ今居る家の歴史を少し述べたいと思ふ。

是は元からの下宿屋と違つて、去年までは、市中の方々に散點する一種の私立女學校の一つであつた。財産もなく經驗もなく、又將來の目的もしかと立たないのに、自營の道を講ずる必要上、此所の上さんと妹とが思ひ附いた此商賣は不幸にして成功しなかつた。家賃が滯る、借金が出來る、寄宿生のうちに熱病が流行る。それで一人退校する、二人退校する、最後にとう〳〵閉校する、といふ始末になつてしまつた。

飽く迄も困苦と奮戰する決心の姉妹は、學校を鎖すと同時に今度は下宿を開業した。しかし客といふ客は殆んど誰も來なかつた。

「夏目さん貴方の御存じの方で入らしつて下さる方はありますまいか」

「左樣實に御氣の毒だから周旋して上げたいのだが、倫敦には別に朋友といふものがないんだから……」

僕は彼等の爲に遂に何うして遣る事も出來なかつた。

夫でも先達迄は一人の日本人が同宿してゐた。頗る陽氣な性質で、僕が「ホト、ギス」を讀んでゐると、君も天智天皇の方は遣れるのかい抔と訊いた此男は、自分の性に合はない斯んな陰氣な宅には居堪まれなくなつたと見えて、とう〳〵逃げ出してしまつた。いふ迄もなく後は僕一人

だけなのだから、下宿をやめて家を疊むより外に途はなくなつたのである。

彼等は倫敦の町外れに新らしい家を探し出さなければならなくなつた。丁度小綺麗で恰好な住居が見附つたとかいふので、或日亭主と上さんが出て行つた後、僕は妹と差向ひでたつた二人午飯の食卓に就いた。

「貴方も一所に引越して下さいますか」

妹は陰氣な聲で僕に哀願するやうに賴んだ。僕は可哀想だけれども一種厭な心持がした。然し氣の毒といふ感じは充分あつたので、成らう事なら一所に移つてやらうと思はないでもなかつたが、一方では又さう向ふの云ふ通りにばかりなつては居られない譯も有つてゐた。

此妹は極内氣で大人しくて其上に信心の堅固な女だから、一所に居ても少しの不愉快を感じないが、姉の方になると何うも左右は行かない。生意氣で、知つたか振をして、子供でも心得てゐるやうな易しい英語を捉まへて、貴方は此字を御存じですか抔と訊いたりする。現に先達はトンネルといふ字を知つてゐるかと訊いた。それからストロー(卽ち藁)といふ字を知つてゐるかとも訊いた。僕は英文學專門の留學生だが、斯うなると全く怒る張合もしない。尤も是は此所へ下宿したての話で、昨今では多少樣子も解つて來たものだから、それ程人を馬鹿にしたやうな質問は掛けなくなつたし、それと同時にまた僕に對する一般の擧動も大分丁寧になつて來たのは事實で

あるが、其當座は實際驚くよりも大いに癪に障る位だつた。總じて此國の女、ことにお婆さんは親切かも知れないが、有難くない。此間去る家へ呼ばれて行つたら、其所の奥さんが大の耶蘇信者で、滔々と神德を述べ出した序に、あなたはevolution（進化）といふ字の意味を知つてゐますかと僕に質問をかけた。

「世の中の事は亂雜で法則がないやうですが、みな進化の道理に支配されて居ります。――進化――解りますか」

丸で赤ん坊に説教でもするやうである。まことに品の好い閑雅なお婆さんだが、日本を知らない、日本人を知らない、從つて僕を知らないのだから何うする譯にも行かない。其上下宿の上さんと違つて、たゞ親切づくで云つて呉れるのが目に見えてゐる。僕は先方の好意に免じてたゞへえへえと云つてゐるより外に仕方がなかつた。

よくお婆さんばかり引合に出すやうだが、もう一人お婆さんがある。此お婆さんが先達て寄こした手紙の中にfolkといふ字を使つてゐる。たゞ使つてゐる丈なら不思議はないが、其字にわざわざ脚註を附けて、是は英國古代の字なりと書いてゐる。手紙にノートを附けるのさへ既に變な所へ、こんな文句を書くのだから、全く馬鹿氣たものになつて仕舞ふ。

此お婆さんと船へ合乘をした時に、何か文章を書けば直してやるといふから、日記の一部を出

して、添削を賴んで見たら、直さなくても差支ない所に手を入れてゐるばかりか、飛んでもない間違が例の脚註の體で書き添へてあつた。

相當の身分のある人ですら此通りだから、安下宿の細君が僕に對して生意氣を云ふのも無理はないが、其所が人間の弱點とでも云ふのだらう、何うも好い心持がしない。何うせ英國へ來たからにはもう少し學問のある、もう少し話せる人、と同居して、もう少し深入りをした交際がして見たい。僕の腹には斯ういふ望みがあるので、折角の妹の依賴だが、そんなら一所にあなた方の引越して行く所へ追いて行きませうとは答へなかつたのである。

實をいふと事情を知らない僕は果して自分の望み通りの人で下宿人を置く宅があるか何うか知らないのだ。たゞ世界は廣いから何處かにそんな男がゐるだらう位に思つて、好い加減な想像を逞しくしつゝあつたのだ。然し一方から見れば世界は又非常に狹いものである。ことに倫敦に於ける僕の世界と來たら身動きもならないやうに窮屈に出來上つてゐる。自分の借りた部屋以外に殆んど世界を有つてゐない僕は、何うして適當な下宿を探し出さうと考へた揚句、遂に新聞廣告を利用する事に極めた。

斯ういふ時に重寶な西洋の新聞には下宿の廣告がいくらでも出てゐる。僕が以前宿を探すときデイレー・テレグラフの廣告欄を見て、始めから仕舞迄讀み通すのに、三時間潰した事がある。

今取つてゐるのはスタンダードと云つて、比較的上品な新聞だから、此所へ出る廣告なら間違はあるまいと思つて、四月十七日の分を探して見ると、意外にも營業的のが大多數で、素人家で客を置きたいといふのは極めて少ない。それでも色々なのが出てくる。「宿料低廉、風呂附、食物上等」。「ハイドパークに面し地下電車へ三分、地下鐵道へ五分、貴女と交際の便あり」。斯んなのはまづ普通である。「球突隨意、洋琴の備あり、gay society, late dinner」。是もさう珍らしい方ではない。ことに「レート、ヂナー」などは近頃一般の流行であるが、僕などには至極の不便宜を與へる丈で他に何の效能もない。其他を順々に讀んで行くうちに僕は下の樣なのに眼を着けた。

「立派な部屋を有する寡婦及其妹と同宿せんとする餘り派出やかならざる紳士を求む。御望の方は○○筆墨店へ御一報を乞ふ」

僕は先づこゝへでも一つ中つて見ようといふ氣になつたので、すぐ手紙を書いて、宿料其他委細の事を報知して貰ふ事にした。序に僕の身分やら職業やらを書き添へて、なるべく低廉で、なるべく愉快な所に住みたいのだと勝手な希望迄遠慮なく附け足して遣つた。

僕が其手紙を出した晩の十時頃、自分の室で獨り讀書をしてゐると、外から戸口をコツ／＼叩くものがあるので、僕は Yes, come in. と云つたら、宿の主人がニコ／＼して入つて來た。僕と

主人の間にはすぐ下の談話が交換された。

「實は貴方も御承知の通り此度引越す事に極めましたが、何うでせう、向うは此所よりも大分綺麗ですし、其上御室の調度なども出來るだけ上等にしますから、來て頂けますまいか」

「それは君の方で僕に是非來て吳れといふのなら……」

「いえ是非といつて御無理を願ふ譯ではありませんが、もし御都合が好ければ、――實は御馴染にもなつて居りますし家内や妹もそれを希望致しますから」

「あなたの新宅へ下宿人を置きたいといふ事は僕も承知してゐますが、あながち僕でなくつても好いだらうと思つてね」

僕はそれからとう／＼今下宿を探してゐる最中だといふ事を亭主に話した。彼の顏は少し陰氣になつて來た。僕も幾らか手持無沙汰になつた。

「それぢや斯うしやう、いづれ先方から返事が來るだらうから、さうしたら一先づ行つて室を見た上で、もしそれが氣に入らなかつたら君の方へ行く事にしやう、外を探す事は止めにして。あの手紙を出す前に君の方の希望がどの位の程度だか能く分つてゐれば、無論聞き合せる迄もない、初手から御望に應じたのだが、斯うなつた今ぢや取り返しが附かない、先づ向ふの返事次第で何方かに極めるより外に途はないでせう。その代り他は決して探さないです。彼所が駄目にな

れば、屹度君の方に行きます」

此保證を得た亭主は御邪魔さまでしたと挨拶して下へ降りて行つた。

翌日の朝になつて食堂へ行くと誰もゐない。もうみんな飯を濟ました後である。また寢坊をして氣の毒な事になつたと思ひながら食卓の上を見ると薄紫色の四隅を一分許り濃い紫色に染めた封書がある。僕はすぐそれが自分宛で來た返事に違ひないと察したが、斯んな狀袋を用ひる位では少々僕の手に合はない高等下宿ぢやなからうかといふ懸念を抱いた。僕は食事用のナイフですぐそれを開封した。

「御問合せの件につき申上候。此家はレデー（レデーといふ字の下に棒が引いてある）の所有にて室内の裝飾の立派なるは勿論各室とも電氣燈を用ひ、品よき召使を雇ひ入れ、凡て高尚優雅なる生活に適する樣注意致し居り候。宿料は一週三十三圓に御座候。或は御氣に召さぬかと存じ候へども、御出向下され候へば喜んで各部屋とも御案内可致候敬具」

僕は飯を食ひながら呼鈴を押して上さんを呼んだ。

「とう〳〵貴方の方へ行く事になりましたよ。何しろ一週三十三圓ぢや到底僕にや拂へんからね」

「はあ左右ですか、何うも有難う。可成氣を附けますから、どうぞ左樣願ひたいもので」

細君の出て行つたあとで、亭主の顏が戸の隙間から半分出た。

「Thank you, Mr. Natsume, thank you.」

彼はニコ〳〵笑つた。僕も厭な心持でもなかつた。

細君と妹は引越の荷拵へで終日急がしさうに働いてゐた。茶を飲むときに始めて顏を合せた。

「今日は昨日まで飼つてゐた鸚鵡を賣りました」

「前使つた學校の招牌も賣りました。十圓に買つて行きました」

僕は姉妹から斯んな談話を聞かされた。間斷なく廻轉しつゝある運命の車は僕と彼等の前に如何なる出來事を持ち來すのだらうか。未來は誰にも解らないけれども、僕と彼等とが段々接近して一所に流されて行きさうなのは慥かである。僕は後を顧みてかの薄紫の狀袋を使ふ貴女及び其妹の住んでゐる門構の家を想像する。前を望んで此貧乏で正直な二人の姉妹の暗に夢みつゝある格子戸作りの樂園を想像する。さうして兩者の相違を面白いやうにも思ふ。又貧富の懸隔は斯んなに色氣のないものかとも思ふ。最後に僕自身はミカウバーと住んでゐたデヰツド・カパーフヒールドの樣な氣もする。（四月二十日）

三

僕が是から生活を共にすべく餘儀なくされた姉妹に就いては前回既に述べた通りである。然し僕は此外にまだペンといふ僕の最も敬服し且つ最も辟易する女の友達を一人有つてゐるから、今度は其友達の事を少し紹介しやう。

實をいふと、ペンは僕のゐる宅の下女の名なのである。さうしてベツヂパードンといふ變な諢名をも有つてゐるのである。尤も此の諢名は僕が命けたのだから、他へは全く通じないと思はなくては不可い。彼女の舌は長過ぎると云つても好し、或は短か過ぎると評しても差支はないのだらう、口を利くと少し呂律の廻らない所が出來てきて、I beg your pardon といふ代りに、何時でも bedge pardon と發音する。それが如何にも異樣に響くので、僕は遂にペンの顏さへ見ればすぐ其ベツヂ、パードンを思ひ出さずにはゐられなくなつた結果、自然彼女にそんな諢名を命けて仕舞つたのである。

ペンはベツヂパードンの癖に非常な能辯家である。舌の先から唾液を容赦なく僕の顏に飛沫のやうに吐き懸けて、惜い時間を遠慮なく潰させて少しも氣の毒と思はない。だからペンはたゞの能辯家ではない。能辯家の上に善人である。

此女は倫敦に生れて丸で倫敦の事を知つて居ない。又知りたさうにもしない。朝から晩迄家の中で働くだけである。夜は四階の天井裏へ登つて寢る。翌日になると、又四階から下りて來て昨

日の通り働き始める。彼女は喘息持である。氣息をせつせとはずまして傍から見ると如何にも氣の毒さうであるが、不思議な事に、彼女は自分自身に對して毫も氣の毒の感じを抱いてゐない。Aの字かBの字か見當が附かなくても少しの不自由もないやうに見える。僕は朝晩この聖か愚か區別の付きかねる女の顏を見て喜んでゐる。然し一度此ペンに捉まつて話しかけられたが最後、果してそれが幸福であるか、又飛んだ災難であるか、他人に判斷して貰ふより外に仕方がなくなつてしまふ。

日本にゐる人は英語なら誰の使ふ英語でも大概似たものだ位に思つてゐるかも知れないが、決してそんな單簡なものぢやない。矢張り我々の生れた國と同じ事で、國々の方言があつたり、身分の高下があつたりして、夫は〳〵多趣多樣である。ことに此倫敦のコツクネーといふ言語になると丁度江戸ツ子のベランメーと同じやうなもので、僕などには到底解らない。字引にない變な發音をする上に、前の言葉と後の言葉の句切りが分らない位早く饒舌るので好い加減な日本の英學者はすぐ參つてしまふ。僕などは無論其一人であるが、ことにペンのコツクネーと來ては何うしたつて遣り切れる譯のものではない。

僕は此家に下宿したてに屢此ペンの襲擊を蒙つて、始めは驚ろき、中程は呆れ、後には大いに恐縮した。仕舞に已を得ず其譯を上さんに話すと、ペンは大變叱られた。それ以後愼んで僕には

口を利かなくなつた。然し默つてゐるのは上さんが宅にゐる間だけで、一寸でも外へ出やうものなら、平生の埋合せをするのは此時だと云はぬばかりの勢で僕に立向つて來るから、僕は彼女が叱られない前よりも猶難儀な思ひをしなければならなくなつた。其時のペンの喋舌り方は丁度一週間斷食をしたものが、八日目になつてお櫃へ首を突込むのと同じ事で、猛烈を極めると云つても江河を決すると云つても決して誇張ではない。

僕が例の如くデンマークヒルを散歩して歸ると、僕の爲に戸を開けて呉れた此餓ゑ盡したペンはすぐ口を利き始めた。果して家内には誰もゐなかつた。みんな新宅へ荷物を片附けに行つて、伽藍堂の中に殘つてゐるのはペンと僕ぎりであつた。

彼女は立板に水を流すやうに十五分程何かベラ〳〵喋舌つたが何を言つてゐるのか僕には殆んど解らなかつた。困るのは彼女が僕に質問の餘裕を與へない事であつた。諦らめをつけた僕は仕方なしにたゞペンの顏丈見てゐやうと決心した。

僕は溫厚なる彼女の二重瞼を見た。先の少し反り返つた彼女の鼻を見た。あくまで紅ゐな彼女の顏色を見た。最後に自由自在に運動を貪ぼる其舌と、舌の兩側に流れて來る白い唾液とを暫らく無心に眺めてゐた僕は、やがて氣の毒のやうな、可哀想のやうな、又可笑しいやうな、變に錯雜した感じに打たれた。僕は唇を曲げて少しく微笑を洩らした。無邪氣なペンは自分の噺に身が

入つて僕が微笑したものと早合點したものと見えて、赤い頰に笑靨を湧かした。さうしてゲタゲタ笑ひ出した。僕は何うする事も出來ない。ペンは益乘氣になつた。

彼女のいふ事を彼所で一句、此所で一句、僕に解つた所丈綜合して見ると、何うも斯ういふ意味らしい。——

昨日は差配人が來た。然し内の女連は會ふと跛が惡いので留守を使つて追ひ返して仕舞つた。自分は神樣に濟まないから、嘘を吐くのは嫌だが、主婦の命令であつて見れば已を得ない。玄關先で誰もゐないからと斷つて歸つて貰つた。

僕は朧氣ながらペンの意味を斯う解釋して自分の室へ入つた。昨日迄室の中にあつた僕のトランクと書籍は今朝三時頃主人が新宅の方に運んでしまつたので、殘るものは身體丈である。椅子に腰を掛けてゐても何となく心細い。寂寞の感とは斯んなものだらうと思つた。

夜の八時頃にコツ〳〵戸を叩くものがあるから開けて遣るとペンが入つて來た。

「今日は差配が四遍來ました」

是丈は僕にも解つたが、あとは例の通りベラ〳〵いふ音が聞こえるばかりで少しも呑み込めない。面倒だから好い加減にして追ひ下げてしまつた。

十時頃に又ペンが來た。今度は此次差配が來たら何うしやうといふ相談である。心配するには

及ばないといつて又下へ追ひ返した。

やがて十時半になつた。然し宅のものはまだ歸らない。もし此所の亭主が詐僞師であつて、僕の荷物丈取つて行つて、所有主の僕を置き去りにしたものと假定すれば、隨分な間抜として僕は嘸かし他から嘲笑されるだらうと考へて見たりした。其時門の戸が開いた。彼等は漸く歸つたらしい。僕はやつと安心して寢た。

翌日は九時頃に起きた。下へ行くと主人夫婦が今丁度朝食を濟ませた所であつた。僕が食卓に着くや否や、上さんが僕に昨夜の騷動を御存じですかと訊ねた。三階に寢る僕に一階で何があつたか知れやう筈はなかつた。

「騷動つて何ですか」

僕の反問を促がした事件は矢張りヘンの心配して居た差配人と彼等との關係に外ならなかつた。上さんのいふ所によると、昨夜門口に立つて、彼等の歸るのを待ち受けてゐた差配人は、亭主が戸を締める餘地のない程早く彼等の後に續いて玄關に飛び込んだのである。

「何故斷りなしに、しかも深夜に引越をする。夫でも君は紳士か」

「僕が僕の荷物を運ぶのに一體誰に斷る必要があるのだ」

議論は此所を基點として段々烈しくなつて行つたらしい。元來上さんの名前で借りてゐる此宅

の家賃を七年前に少々滯らしたとかいふのが元で、其祟りの爲めに、彼女はそれを綺麗に片附けなければ外へ引越す譯に行かないのである。七年來借りてるものを未だに返さない所を以て見ると、彼女姉妹の家財は早晩其借越の家賃の代りに奪られるのが當然であつた。けれども二人は別段取り押へられて困るやうな物を一つも持つてゐなかつた。差配も實は其所に眼を附けてゐるのではなかつた。彼の睨んだのは亭主其人の家財であつた。然し亭主も二十世紀の人間だから決して其邊に間隙はなかつた。代言人の所へ行つてちやんと相談してゐた。さうして日沒後日出前ならば何時彼の家具を運び出しても差配に見附かる恐はないといふことも承知してゐた。それで朝の三時頃から大八車を雇つて來て一晩寢ずに掛つて自分の荷物を新宅へ運んでしまつた。彼は見た所頗る尨大で緊りのない顏をしてゐるために、少しでも面積を狹くする料簡か、鼻の下へ申譯らしい髭を薄く蓄へてゐる、ぼて〳〵した男だけれども、斯んな點に掛けると、中々差配に負けない拔目のない人と見える。

僕は亭主に自分の身體はいつ移れるのかと聞いて、今日でも構はないといふ答を得たので、午飯の後細君と共に新宅へ行く事にした。

所が上さんと二人で食事をしてゐると、代言人の所から歸つて來た亭主は上さんに、「お前手紙を書いて差配の所へ郵便で遣れ。書留にしなくてはいかん」と云つて、又出て行つた。上さんは

直さら〳〵と何か書き始めたが、やがてそれを自分の前へ持つて來た。

「一寸夏目さん斯ういふ手紙なんですよ。聽いて下さい」

彼女は高慢な顏をして讀み始めた。

「拜啓妾は驚ろき入申候。――何うですもう少し緩くり讀みませうか。――妾は驚ろき入申候。昨日は三度ならず四度迄留守宅へ御來臨の上、下婢に向つて妾等の一身上に關する御質問を發せられ、それのみならず無斷にて他の家宅搜索を行はれ、剩さへ妾はレデーの資格なき女なりなど餘計の事を下婢に明言なされ候由、元來右は如何なる御主意に御座候や伺度候。此亂暴なる貴下の擧動及び言語に對し、妾は貴下より辯解を求むる權利あるものと信じ候。――斯ういふんです。是がね實を云ふと策なんですよ」

僕は策といふ言葉を聞いて一寸驚ろかされた。同時に策とは如何なる意味の策か訊き返さずにはゐられなくなつた。上さんは愈得意になつた。

「好ござんすか、此手紙を書いてちやんと此通り控へを取つて置くでせう。そこで先方がもし家賃の滯納を裁判沙汰にする日には、此手紙が物を云ふ事になるんです。つまり差配が亂暴を働らいたつて證據にしやうつて譯でさあ。今迄は女二人だと思つて隨分勝手な眞似ばかりしてゐたのですが、今ぢや男が附いてゐるからさう許り踏み附にされちや居ませんのさ」

僕は何と評して好いのか分らないから、たゞ成程々々と云つてゐた。すると上さんは立ち上つた。

「御待遠さま、それぢや出掛ませう」

僕は手提革鞄の中へ雜物を押し込んだ頗る重い奴を右の手に提げて、蝙蝠傘とステツキを二本左の手で持つた。レデーはレデーで網袋の中へ澁紙包を四つ入れたのを容赦なくぶら下げた。その澁紙包の一つの中には僕の寢卷と兵兒帶がちやんと入つてゐるんだから、其分量も大概は察せられるだらう。しかもそれは彼女の右の手だけなのだ。彼女は其上に左の手で僕のシーツを澁紙包にして抱いてゐるのだよ。もし是を道行といふ事が出來るならば、兩人とも兩手の塞がつた、頗る不味い恰好の道行と云はなければなるまい。

僕等は町の角へ出て鐵道馬車に乘つた。ケニントン迄二錢づゝである。レデーは私が拂つて置きますと云つて、黑い皮の纂口から一ペネー出して車掌に渡した。乘合は少なかつた。向側に派出な服裝をした若い女がゐた。すると澁紙包を持つたレデーは突然大きな聲を出して僕に「貴方はメリー・コレリのマスタークリスチアンを讀みなさいましたか」と訊いた。メリー・コレリと云へば通俗小說を書く有名な女流作家で、其近著マスタークリスチアンが十五萬部賣れたとかいふので評判なのである。僕は「書物丈持つてゐるぎりでまだ讀みません」と答へた。

「あの本はね、大變能く書けてゐますがね、何うも作家の宗教觀が曖昧なのですよ。私の知つてるものは皆コレリの宗教は何だらうつて噂をしてゐる位ですがね」

上さんは益向側の婦人に聞えよがしに大きな聲を出した。自分だつて讀んだ事もない本の評などを、鐵道馬車の中で、さう高聲に話す必要が何處にあるかとは思つたが、仕方がないから僕はたゞうん〳〵と生返事をしてゐた。

僕等はケニントンで馬車を乘り換へた。上さんが今度は上へ昇がらうといふから、階子段を上つてトップへ乘つた。

「此左にあるのが有名な孤兒院でスパージョンの紀念のために作つたのです。スパージョンてえのは有名な說教家ですよ」

スパージョン位講釋して貰はないだつて心得てゐる。僕は腹が立つたから默つてゐて遣つた。然し彼女は頓着しなかつた。

「段々樹が青くなつて好い心持ですね、二週間位前からずつと景色が變つて來ましたね」

「左樣、時に彼處に竝んでゐるのは何んて樹ですか」

「あれはポプラーでさあね」

「へえゝ、あれがポプラーですか、なある程」

今迄ポプラーといふ字は何遍となく讀んだが、實物を見るのは是が始めてだつたので、僕は思はず感嘆の聲を發した。すると上さんがすぐ附け上つた。

「ポプラーは能く詩に詠じてありますよ。テニソン抔にも出てゐます。どんな風のない日でも枝が動くんです。アスペンとも云ひます。是もたしかテニソンに出てゐる筈です」

彼女はテニソン專賣であつた。其癖何の詩にあるとも云はないのである。此時向ふの敷石の上で裾を長く引いて通る立派な婦人が上さんの眼に留まつた。

「家の中での御引摺りには不贊成もありませんが、外であんなに長い裾を引き摺つて歩くのは體裁の好いもんぢやありませんね」

ある醫者が試みにさういふ女の裾を調べて見たら、無數の黴菌が附着してゐるのを發見して驚ろいたといふ話も、上さんの薄い唇から事細かに洩らされた。

鐵道馬車は漸くツーチングといふ所へ着いた。僕等はそれから後バスに乘つて新宅の横町の前まで來た。

「どれが宅ですか」

「あれですよ」

見ると向ふに雜な煉瓦造りの長屋が四五軒竝んでゐた。前には何にもなかつた。たゞ砂利を掘

つた大きな穴があつた。ざつと東京の小石川の場末といつた様な所だと思へば間違はない。

僕の眼に入つた長屋は端の一軒丈が塞がつてゐる丈で、あとには皆な貸家札が貼り附けてあつた。此塞がつてゐる分が大家さんので、その隣りが彼等の宅、即ち僕の下宿に外ならなかつた。

僕は先づ其見掛の殺風景なのに落膽した。然し入つて見て更に其無風流なのに驚ろかされた。どの部屋を覗いても、荷物が抛り込んである丈で、丸で類焼後の立退場と同じやうに思はれた。然し流石に是から此處に居て貰はうといふ御客様の僕に宛てがはれた二階の一間だけは多少片附いてゐた。新築丈あつて綺麗な上に飾り附も幾分か前よりは意を用ひてあつた。

僕が自分の部屋の中に入つて少時休んでゐると、亭主が遣つて來た。窓掛をコツ〳〵打ち附けた後で、僕に向つて訊いた。

「煖爐の上へ一つ額を掛ける積ですがミツスルトーといふ奴は何うでせう。あれは人によると嫌ひますが、まあ一寸御覽に入れませう」

彼はやがてミツスルトーといふ題の附いた版畫を額縁に入れたのを下から持つて來て見せた。それは普通の裸體畫ですな、結構です」

「はあ裸體畫ですな、結構です」

「へ、、、、私もちつとも構ひませんがね」

彼はコツ〳〵釘を打ち附けた。

「何うです是で角度は、――もう少し下向に、――へえ、裸體美人が貴方の方を見下すやうに、――宜しう御座います」

彼は夫から僕の書棚を作つてやると云つて壁の寸法と書物の寸法を取つた上、「御休みなさい」と云つて出て行つた。……

門前を通る車は一臺もない。往來を歩く人の聲などは固より聞えない。四邊は寂寥たるものである。主人夫婦は事件の落着する迄毎夜舊宅に歸つて寢なければならないので、今此處にゐるのは三階に寢る妹と、カーロー君と、ジャツク君とそれからアネスト君丈である。然しその内のカーロー君とジャツク君は犬の名だから勘定に入れても仕方がない。アネスト君は亭主が店で使つてゐる若い男の名である。

僕の最も敬服し又最も辟易するベツヂパードンは遂に解雇されて仕舞つた。僕はもう圓滿なる彼女の顏を見る事が出來ない。移轉後になつて始めて此話を聞いた僕は憮然として彼女の未來を想像した。

露西亞と日本は爭はんとしては爭はざらんとしつゝある。支那は天子蒙塵の辱を受けつゝある。英國はトランスヴールの金剛石を掘り出して軍費の穴を塡めんとしつゝある。此多事なる世界が

日となく夜となく廻轉しつゝ、波瀾を生じつゝある間に、僕の住む此の小天地にも小廻轉と小波瀾が續きつゝある、起りつゝある。僕の下宿の主人公は其尨大なる身體を賭して差配と雌雄を決せんとしつゝある。さうして僕は君の病氣を慰めるために此手紙を認めつゝある。

（四月二十六日）

自轉車日記

西暦一千九百二年秋忘月忘日白旗を寢室の窓に翻へして下宿の婆さんに降を乞ふや否や、婆さんは二十貫目の體軀を三階の天邊迄運び上げにかゝる、運び上げるといふべきを上げにかゝると申すは手間のかゝるを形容せん爲なり、階段を上ること無慮四十二級、途中にて休憩する事前後二回、時を費す事三分五セコンドの後此偉大なる婆さんの得意なるべき顏面が苦し氣に戸口にヌツと出現する、あたり近所は狹苦しき許り也、此會見の榮を肩身狹くも雙肩に荷へる余に向つて婆さんは媾和條件の第一款として命令的に左の如く申し渡した、

自轉車に御乘んなさい

嗚呼悲いかな此自轉車事件たるや、余は遂に婆さんの命に從つて自轉車に乘るべく否自轉車より落るべく「ラヱンダー、ヒル」へと參らざるべからざる不運に際會せり、監督兼教師は〇〇氏なり、悄然たる余を從へて自轉車屋へと飛び込みたる彼はまづ女乘の手頃なる奴を撰んで是がよ

からうと云ふ、其理由如何と尋ぬるに初學入門の捷徑は是に限るよと降參人と見て取つていやに輕蔑した文句を竝べる、不肖なりと雖輕少ながら鼻下に髯を蓄へたる男子に女の自轉車で稽古をしろとは情ない、まあ落ちても善いから當り前の奴で遣つて見様と抗議を申し込む、若し採用されなかつたら丈夫玉碎瓦全を恥づとか何とか珍汾漢の氣燄を吐かうと暗に下拵に默つて居る、と夫なら是に仕様と、いとも見苦しかりける男乘をぞ宛てがひける、思へらく能者筆を擇ばず、どうせ落ちるのだから車の美醜抔は構ふものかと、宛てがはれたる車を重さうに引張り出す、不平なるは力を出して上からウンと押して見るとギーと鳴る事なり、伏して惟れば關節が弛んで油氣がなくなつた老朽の自轉車に萬里の波濤を超えて遙々と逢ひに來た様なものである、自轉車屋には恩給年限がないのか知らんと一寸不審を起して見る、思ふに其年限は疾ッくの昔に來て居て今迄物置の隅に閑居靜養を專らにした奴に違ない、計らざりき東洋の孤客に引きずり出され奔命に堪ずして悲鳴を上るに至つては自轉車の末路亦憐むべきものありだがせめては降參の腹癒に此老骨をギューと云はして遣らんものをと乘らぬ先から當人はしきりに乘り氣になる、然るにハンドルなるもの神經過敏にてこちらへ引けば股にぶつかり、向へ押しやると往來の眞中へ馳け出さうとする、乘らぬ内から斯の如く處置に窮する所を以て見れば乘つた後の事は思ひやるだに涙の種と知られける、

「何處へ行つて乘らう」「何處だつて今日初めて乘るのだから成丈人の通らない道の悪くない落ちても人の笑はない様な所に願ひ度」と降參人ながら色々な條件を提出する、仁惠なる監督官は余が衷情を憐んで「クラパム、コンモン」の傍人跡餘り繁からざる大道の横手馬乘場へと余を拉し去る、而して後「さあ茲で乘つて見給へ」といふ、愈降參人の降參人たる本領を發揮せざるを得ざるに至つた、嗚呼悲夫、

乘つて見給へとは既に知己の語にあらず、其昔本國にあつて時めきし時代より天涯萬里孤城落日資金窮乏の今日に至る迄人の乘るのを見た事はあるが自分が乘つて見た覺は毛頭ない、去るを乘つて見給へとは餘り無慈悲なる一言と怒髮鳥打帽を衝て猛然とハンドルを握つた迄は天晴武者振頼母しかつたが愈鞍に跨つて顧盼勇を示す一段になると御誂通りに參らない、いざといふ間際ですどんと落ること妙なり、自轉車は逆立も何もせず至極落付拂つたものだが乘客丈は正に鞍壺にたまらずずんでん堂とこける、嘗て講釋師に聞た通りを目のあたり自ら實行するとは、豈計らんや、

監督官云ふ、「初めから腰を据ゑる様抔といふのが間違つて居る、ペダルに足を掛け様としても駄目だよ、只しがみ付て車が一回轉でもすれば上出來なんだ」、と心細いこと限りなし、吁吾事休矣いくらしがみ付ても車は半輪轉もしない吁吾事休矣と頻りに感投詞を繰り返して暗に助勢を嘆願

する、かくあらんとは兼て期したる監督官なれば、近く進んでさあ、僕がしつかり抑へて居るから乘り給へ、おつとさう眞ともに乘つては顚り返る、そら見給へ、膝を打たらう、今度はそーつと尻を懸けて兩手で此處を握つて、よしか、僕が前へ押し出すから其勢で調子に乘つて馳け出すんだよ、と怖がる者を面白半分前へ突き出す、然るに凡て此等の準備凡て此等の勞力が突き出される瞬間に於て砂地に横面を拋りつける爲の準備にして且勞力ならんとは實に神ならぬ身の誰か知るべき底の驚愕である

ちらほら人が立ち留つて見る、にや〳〵笑つて行くものがある、向ふの樫の木の下に乳母さんが小供をつれてロハ臺に腰を懸てさつきから頻りに感服して見て居る、何を感服して居るのか分らない、大方流汗淋漓大童となつて自轉車と奮鬪しつゝある健氣な樣子に見とれて居るのだらう、天涯此好知己を得る以上は向脛の二三ケ所を擦りむいたつて惜しくはないといふ氣になる、「もう一遍頼むよ、もつと强く押して呉れ給へ、なに復落ちる？落ちたつて僕の身體だよ」と降參人たる資格を忘れて頻りに汗氣燄を吹いて居る、すると出し抜に後ろからOH!と呼んだものがある、はてな滅多な異人に近付はない筈だがと振り返ると、一寸人を狼狽せしむるに足る的の大巡査がヌーツと立つて居る、こちらはこんな人に近付ではないが先方では此ポツト出のチンチクリンの田舍者に近付かざる可らざる理由があつて正に近付いたものと見える、其理由に曰く茲は馬

を乘る所で自轉車に乘る所ではないから自轉車を稽古するなら往來へ出て遣らしやい、オーライ謹んで命を領すと混淆式の答に博學の程度を見せて直樣之を監督官に申出る、と監督官は降參人の今日の凹み加減充分とや思ひけん、もう歸らうぢやないかと云ふ、則ち乘れざる自轉車と手を携へて歸る、どうでしたと婆さんの問に敗餘の意氣をもらすらく車嘶いて白日暮れ耳鳴つて秋氣來るヘン

忘月忘日　例の自轉車を抱いて坂の上に控へたる余は徐ろに眼を放つて遙かあなたの下を見廻す、監督官の相圖を待つて一氣に此坂を馳け下りんとの野心あればなり、坂の長さ二丁餘、傾斜の角度二十度許、路幅十間を超えて人通多からず、左右はゆかしく住みなせる屋敷許なり、東洋の名士が自轉車から落る稽古をすると聞いて英政府が特に土木局に命じて此道路を作らしめたかどうだか其邊は未だに判然しないが、兎に角自轉車用道路として申分のない場所である、余が監督官は巡査の小言に膽を冷したものか乃至は又余の車を前へ突き出す勞力を省く爲か、昨日から人と車を天然自然ところがすべく特に此地を相し得て余を連れだしたのである、

人の通らない馬車のかよはない時機を見計つたる監督官はさあ今だ早く乘り給へといふ、但し此乘るといふ字に註釋が入る、此字は吾等兩人の間には未だ普通の意味に用られて居ない、わが所謂乘るは彼等の所謂乘るにあらざるなり、鞍に尻を卸さゞるなり、ペダルに足を掛けざるなり、

たゞ力學の原理に依頼して毫も人工を弄せざるの意なり、人をもよけず馬をも避けず水火をも辭せず驀地に前進するの義なり、去る程に其格好たるや恰も痴氣持が初出に梯子乘を演ずるが如く、吾ながら乘るといふ字を濫用しては居らぬかと危ぶむ位なものである、去れども乘るは遂に乘るなり、乘らざるにあらざるなり、兎も角も人間が自轉車に附着して居る也、而も一氣呵成に附着して居るなり、此意味に於て乘るべく命ぜられたる余は、疾風の如くに坂の上から轉がり出す、すると不思議やな左の方の屋敷の内から拍手して吾が自轉行を壯にしたいたづらものがある、妙だなと思ふ間もなく車は既に坂の中腹へかゝる、今度は大變な物に出逢つた、女學生が五十人許り行列を整へて向からやつてくる、斯うなつてはいくら女の手前だからと言つて氣取る譯にもどうする譯にも行かん、兩手は塞つて居る、腰は曲つて居る、右の足は空を蹴て居る、下り樣としても車の方で聞かない、絶體絶命仕樣がないから自家獨得の曲乘のまゝで女軍の傍をからくも通り抜ける、ほつと一息つく間もなく車は既に坂を下りて平地にあり、けれども毫も留まる氣色がない、しかのみならず向ふの四ツ角に立て居る巡査の方へ向けてどん〳〵馳けて行く、氣が氣でない、今日も巡査に叱られる事かと思ひながらも矢張曲乘の姿勢をくづす譯に行かない、自轉車は我に無理情死を逼る勢で無暗に人道の方へ猛進する、とう〳〵車道から人道へ乘り上げ夫でも止まらないで板塀へぶつかつて逆戻をする事一間半、危くも巡査を去る三尺の距離でとまつた。

大分御骨が折れましやうと笑ながら査公が申された故、答へて曰くイエス、

忘月忘日　「……御調べになる時はブリチツシュ、ミュジーアムへ御出掛になりますか」「あすこへは餘り參りません、本へ矢鱈にノートを書き付けたり棒を引いたりする癖があるものですから」「左樣、自分の本の方が自由に使へて善ですね、然し私抔は著作を仕樣と思ふとあすこへ出掛ます……」

「夏目さんは大變御勉強ださうですね」と細君が傍から口を開く「餘り勉強もしません、近頃は人から勸められて自轉車を始めたものですから、朝から晩迄夫ばかりやつて居ます」「自轉車は面白う御座んすね、宅ではみんな乘りますよ、あなたも矢張り遠乘をなさいませう」遠乘を以て細君から擬せられた先生は實に普通の意味に於て乘るてふ事の如何なるものなるかをさへ解し得ざる男なり、只一種の曲解せられたる意味を以て坂の上から坂の下まで辛うじて乘り終せる男なり、遠乘の二字を承つて心安からず思ひしが、掛直を云ふことが第二の天性と迄進化せる二十世紀の今日、此點にかけては一人前に通用する人物なれば、如才なく下の如く返答をした「左樣遠乘といふ程の事も未だしませんが、坂の上から下の方へ勢よく乘りおろす時なんか頗る愉快ですね」

今迄沈默を守つて居つた令嬢は此奴少しは乘きるなと痞違をしたものと見えて「いつか夏目さ

んと一所に皆でキンブルドンへでも行つたらどうでせう」と父君と母上に向つて動議を提出する、父君と母上は一齊に余が顏を見る、余是に於てか少々尻こそばゆき狀態に陷るの已を得ざるに至れり、去りながら妙齡なる美人より申し込まれたる此果し狀を眞平御免蒙ると握りつぶす譯には行かない、苟も文明の敎育を受けたる紳士が婦人に對する尊敬を失しては生涯の不面目だし、且や是でもか〳〵と余が咽喉を扼しつゝある二寸五分のハイカラの手前もある事だから、殊更に平氣と愉快を等分に加味した顏をして「それは面白いでせう然し……」「御勉强で御忙しいでせうが今度の土曜位は御閑で居らつしやいませう」と段々切り込んでくる、余が「然し……」の後には必ずしも多忙が來ると限つて居らない、自分ながら何の爲の「然し」だか未だ判然せざるうちに斯う先を越されては愈「然し」の納り場がなくなる、「然し餘り人通りの多い所ではエー……アノーまだ練れませんから」と漸く一方の活路を開くや否や「いへ、あの邊の道路は實に閑靜なものですよ」とすぐ通せん坊をされる、進退維谷るとは啻に自轉車の上のみにてはあらざりけり、と獨りで感心をして居る、感心した許りでは埒があかないから、此際唯一の手段として「然し」をもう一遍繰り返す「然し……今度の土曜は天氣でせうか」旗幟の鮮明ならざること夥しい誰に聞いたつて、そんな事が分るものか、偖も此勝負男の方負とや見たりけん、審判官たる主人は仲裁乎として口を開いて曰く、日はきめんでも何れ其内私が自轉車で御宅へ伺ひませう、そして一

所に散歩でもしませう、――サイクリストに向つて一所に散歩でもしませうとは是如何、彼は余を目してサイクリストたるの資格なきものと認定せるなり

此うつくしき令孃と「キンブルドン」に行かなかつたのは余の幸であるか將不幸であるか、考ふること四十八時間遂に判然しなかつた、日本派の俳諧師之を稱して朦朧體といふ

忘月忘日　數日來の手痛き經驗と精緻なる思索とによつて余は下の結論に到着した

自轉車の鞍とペダルとは何も世間體を繕ふ爲に漫然と附着して居るものではない、鞍は尻を懸る爲めの鞍にしてペダルは足を載せ且つ踏み付けると回轉する爲のペダルなり、ハンドルは尤も危險の道具にして、一度び之を握るときは人目を眩せしむるに足る目勇しき働きをなすものなり

かく漆桶を拔くが如く自轉悟を開きたる余は今例の監督官及び其友なる貴公子某伯爵と共に鑣を連ねて「クラパムコンモン」を横ぎり鐵道馬車の通ふ大通りへ曲らんとするところだと思ひ給へ、余の車は兩君の間に介在して操縱既に自由ならず、只前へ出られる許りと思ひ給へ、然るに出られべき一方口が突然塞つたと思ひ給へ、卽ち横ぎりにかゝる塗炭に右の方より不都合なる一輛の荷車が御免よとも何とも云はず傲然として我前を通つたのさ、今迄の態度を維持すれば衝突する許りだらう、余の主義として衝突はこちらが勝つ場合に附いてのみ敢てするが、其他負色の

見えすいた様な衝突になるといつでも御免蒙るのが吾家傳來の憲法である、去るによつて此尨大なる荷車と老朽悲鳴をあげる程の吾が自轉車との衝突は、おやぢの遺言としても避けねばならぬ、と云つて左右へよけ様とすると御兩君のうち何れへか衝突の尻をもつて行かねばならん、勿體なくも一人は伯爵の若殿様で、一人は吾が恩師である、左様な無禮な事は平民たる我々風情のすまじき事である、のみならず捕虜の分際として推參な所作と思はるべし、孝ならんと欲すれば禮ならず、禮ならんと欲すれば孝ならず、已むなくんば退却か落車の二あるのみと、一寸の間に相場が極つて仕舞つた、此時事に臨んで甞て狼狽したる事なきわれ熟ら思ふ様、出來さへすれば退却も滿更でない、少なくとも落車に優ること萬々なりと雖も、悲夫逆艪の用意未だ調はざる今日の時勢なれば、エー仕方がない思ひ切つて落車にしろ、と兩車の間に堂と落つ、折しも余を去る事二間許の處に退屈さうに立つて居た巡査——自轉車の巡査に於る夫れ猶刺身のツマに於るが如きか、何ぞ夫れ引き合に出るの甚しき——このツマ的巡査が聲を揚げてアハ、アハ、アハ、と三度笑つた。其笑ひ方苦笑にあらず、冷笑にあらず、微笑にあらず、カンラカラ／＼笑にあらず、全くの作り笑なり、人から賴まれてする依托笑なり、此依托笑をする爲に此巡査はシツクスペンスを得たか、ワン、シリングを得たか、遺憾ながら之を考究する暇がなかつた、

へんツマ巡査などが笑つたつてと直樣御兩君の後を慕つて馳け出す、これが巡公でなくつて先

日の御娘さんだつたら矢張り直樣馳け出されるかどうだかの問題はいざとならなければ解釋がつかないから質問しない方がいゝとして先へ進む、偖兩君は此邊の地理不案内なりとの口實を以て覺束なき余に先導たるべしとの嚴命を傳へた、然るに案内には詳しいが自轉車には毫も詳しくないから、行かうと思ふ方へは行かないで曲り角へくると只曲り易い方へ曲つて仕舞ふ、是に於てか同じ所へ何返も出て來る、始めの内は何とかかんとか胡魔化して居たが、さうは持ち切れるものでない、今度は違つた方へ行かうとの御意である、よろしいと口には云つた樣なものゝ、儘にならぬは浮世の習、容易にそつちの方角へ曲らない、道幅三分の二も來た頃、やつとの思でハンドルをギューツと捩つたら、自轉車は九十度の角度を一どきに廻つて仕舞つた、其急廻轉の爲に思ひ掛なき功名を博し得たと云ふ御話しは、明日の前講になかといふ價値もないから、すぐ話して仕舞う、此時迄氣がつかなかつたが此急劇なる方向轉換の刹那に余と同じ方角へ向けて余に尾行して來た一人のサイクリストがあつた、處が此不意擊に驚いて車をかはす暇もなくもろくも余の傍で轉がり落ちた、後で聞けば、四ツ角を曲る時にはベルを鳴すか片手をあげるか一通りの挨拶をするのが禮ださうだが、落天の奇想を好む余は左樣な月並主義を採らない、況んやベルを鳴したり手を擧げたり、そんな面倒な事をする餘裕は此際少しもなきに於てをやだ、是に於てか此ダンマリ轉換を遂行するのも余に取つては萬已を得ざるに出たもので、余のあとに喰付て來た男

が吃驚して落車したのも亦無理のない處である、雙方共無理のない處であるから不思議はない、當前の事であるが、西洋人の論理は此程迄發達して居らんと見えて、彼の落ち人大に逆鱗の體で、チン／＼チャイナマンと余を罵つた、罵られたる余は一矢酬ゆる筈であるが、そこは大悠なる豪傑の本性をあらはして、御氣の毒だねの一言を遺して振り向もせずに曲つて行く、實は振り向かうとするうちに車が通り過ぎたのである、「御氣の毒だね」より外の語が出て來なかつたのである、正直なる余は苟且にも豪傑など云ふ、一種の曲者と間違らるゝを恐れて、茲にゆつくり辯解して置くなり、萬一余を豪傑だなどゝ買被つて失敬な擧動あるに於ては七生迄祟るかも知れない、

忘月忘日　人間萬事漱石の自轉車で、自分が落ちるかと思ふと人を落す事もある、そんなに落膽したものでもないと、今日はズー／＼敷構へて、バタシー公園へと急ぐ、公園は頗る閑靜だが、其手前三丁許りの所が非常の雜沓な通りで、初學者たる余にとつては難透難徹の難關である、今しも余の自轉車は「ラヱンダー」坂を無難に通り抜けて、此四通八達の中央へと乘り出す、向ふに鐵道馬車が一臺こちらを向いて休んで居る、其右側に非常に大なる荷車が向ふむきに休んで居る、其間約四尺許、余は此四尺の間をすり抜ける可く車を走らしたのである、余が車の前輪が馬車馬の前足と竝んだ時、即ち余の身體が鐵道馬車と荷車との間に這入りかけた時、一臺の自轉車が疾風の如く向から割り込んで來た、斯樣な咄嗟の際には命が大事だから退却に仕樣か落車に仕

樣か抔の分別は、さすがの吾輩にも出なかつたと見えて、おやと思つたら身體はもう落ちて居つた、落方が少々まづかつたので、落る時左の手でしたゝか馬の太腹を叩いて、からくも四這の不體裁を免がれた、やれうれしやと思ふ間もなく鐵道馬車は前進し始める、馬は驚ろいて吾輩の自轉車を蹴飛す、相手の自轉車は何喰はぬ顏ですうと拔けて行く、間の拔さ加減は尋常一樣にあらず、此時派出やかなるギグに乘つて後ろから馳け來りたる一個の紳士、策を揚げ樣に余が方を顧みて曰く大丈夫だ安心し給へ、殺しやしないのだからと、余心中ひそかに驚いて云ふ、して見ると時には自轉車に乘せて殺して仕舞のがあるのかしらん英國は險呑な所だと

＊　＊　＊　＊　＊

余が廿貫目の婆さんに降參して自轉車責に遇つてより以來、大落五度小落は其數を知らず、或時は石垣にぶつかつて向脛を擦りむき、或る時は立木に突き當つて生爪を剝がす、其苦戰云ふ許りなし、而して遂に物にならざるなり、元來此二十貫目の婆さんは無暗に人を馬鹿にする婆さんにして、此婆さんが皮肉に人を馬鹿にする時、其妹の十一貫目の婆さんは、瞬きもせず余が黃色な面を打守りて如何なる變化が余の眉目の間に現るゝかを檢査する役目を務める、御役目御苦勞の至りだ、此二婆さんの呵責に逢てより以來、余が猜疑心は益深くなり、余が繼子根性は日に日に增長し、遂には明け放しの門戸を閉鎖して我黃色な顏を愈黃色にするの已を得ざるに至れり、

彼二婆さんは余が黄色の深淺を測つて彼等一日のプログラムを定める、余は實に彼等にとつて黄色な活動晴雨計であつた、會ゞ降參を申し込んで贏し得たる所若干ぞと問へば、貴重な留學時間を浪費して下宿の飯を二人前食ひしに過ぎず、去れば此降參は我に益なくして彼に損ありしものと思惟す、無殘なるかな、

――三六、六、二〇『ホトトギス』――

評論

老子の哲學

——明治二十五年六月十一日稿、文科大學東洋哲學論文——

第一篇　總　論

蓋反其本矣とは孟子が齊宣に說ける言其事好還とは老子が以道佐人主章に述べたる語にて孰れも末を棄て本に復するを希望せるの意を寓す此二子時代に多少の差はあれども等しく爭亂澆季の世に生れ民俗の日々功名利欲の末途に趨くを嘆じ道の源頭より一隻眼を開いて人心の砥柱たるべき根本を敎えんと企てたればこそ其言も斯く符合するなれ去れども孟子の本は老子の本にあらず老子の還亦孟子の還と趣きを異にす孟子は惻隱の心を擴げて仁となし羞惡の心を誘ふて義となしさてこそ仁義は人心に本有なる物にて邪惡は天性我に具はる者にあらずと我原點の行く迄百方掊擊して辯論せる人にて其心には仁義より大なる道なく仁義より深き理なしと思ひ込みしなり成程是は當り障りのなき議論にて之を實行せば治國の上に利益あるは無論の事況して周末汚濁の世には

如何許り要用を有せしや知る可らず然し夫すら攻伐を以て賢とし合從連衡を務めとなす當時には容れられず迂なり迂なりの一語を聞て戰國の諸侯を說きあぐんだる次第なり常識に適ふたる仁義の說だに斯の如くなるに仁義以外に一歩を撒開して當時に迂遠なる儒教より一層迂遠の議論を唱道せんとせる者あり是を誰とか云ふに周國苦縣厲鄉の人姓を李と云ひ名を耳と呼ぶ生れながらにして皓首の異人なり嘗て周に仕へて守藏の史たりしが其衰ふるを見て官を棄てゝ西方に至り關を出んとしたるとき關令尹喜が子將隱矣彊爲我著書と云ふに任せて上下二篇無慮五千餘言を著して去る今に傳る所老子道德經卽ち是なり

偖老子の主義は如何に、儒教より一層高遠にして一層迂濶なりとは如何なる故ぞと云ふに老子は相對を脫却して絕對の見識を立てたればなり捕ふべからず見るべからざる恍惚幽玄なる道を以て其哲學の基としたればなり其論出世間的にして實行すべからず其文怪譎放縱にして解すべからざればなり走者可以爲罔游者可以爲綸飛者可以爲矰至於龍吾不能知其乘風雲而上天吾今見老子其猶龍耶と云へるが如きを以てなり彼れ固より不仁不義をよしとせず去れども仁義も亦左迄有り難き者と思はず三綱を以て民心を繫ぎ五常を立てゝ衆人を導くときは之と同伴して生ずる者は三不綱なり五不常なるべし民を驅つて善に赴かしめんとすれば善の裏には不善あるぞと敎ゆるに同じ故に道の根本は仁の義のと云ふ樣な瑣細な者にあらず無狀の狀無物の象とて在れども無きが如く

存すれども亡するが如く殆んど言語にては形容出來ず玄の一字を下すことすら猶其名に拘泥せんことを恐れてしばらく之を玄之又玄と稱す玄之又玄衆妙之門とは老子が開卷第一に言ひ破りたる言にて道經德經上下二篇八十章を貫く大主意なり

玄とは相對的の眼を以て思議すべからざる者を指すの謂にして必ずしも虛無眞空を言ふにあらず名くべきの名なき故に無と云ふのみ老子の言時に矛盾する所ありと雖ども其全篇を通觀するに嘗て有の眞無より生じたるを說きし點なく from nothing comes nothing と云へる原理に撞着せるを見ず唯第四十章に天地萬物生于有有生于無と云ふ句あれども此無の字とて眞空絕無の謂にはあらで惚兮恍其中有象恍兮惚其中有物と云ふ意味ならん且無名天地之始とあるを見れば天地の剖判萬物の羣生は命名すべからざる一種の物卽ち玄の又玄より發生せるにて眞空より宇宙が出來したりと云ふ意にあらざること明かならん

此玄を視るに二樣あり一は其靜なる所を見一は其動く所を見る固より絕對なれば其中には善惡もなく長短もなく前後もなし難易相成すこともなければ高下相傾くることもなく感情上より云ふも智性上より云ふも一切の性質を有せず去るが故に天地の始め萬物の母にして混々洋々名づくる所以を知らざれば無名と云ふ然し眼睛を一轉して他面より之を親ふときは天地の始め故天地を生じ萬物の母なる故萬物を孕む其一度び分れて相對となるや行に善惡を生じ物に美醜を具へ大小高

下幾多の性質屬性雜然として出現し來る是點より見るときは萬物之母にして有名と云はざる可らず故に其無名の側面を窺はんとならば常無欲にして相對の境を解脫し(能ふべくんば)己を以て玄中に沒却し了らざるべからず又其有名の側面を知らんと思はゞ常有欲を以て夫の大玄より流出して聚散離合する事物の終りを見るべし今此二面を表に示せば左の如くならんか

玄之又玄(絕對)
- 靜…平等故無名…故常無欲觀其妙
- 動…萬物之母故有名…故常有欲觀其繳

此玄を基礎として修身に及ぼし又治國に及ぼす故老子の學は希臘古代の哲學と同じくcosmologyを以て其立脚の地となす者の如し周代煩雜の世に生れて玄の本に反らんとするには先づ自ら反り而る後人を反さゞる可らず自ら反る所は老子の修身となつて見はれ人を反す所は老子が治民上の意見となつて見はる以下篇を分つて之を論ぜんとす

第二篇　老子の修身

修身上の意見は治民上の意見と同じく概ね消極的なり今之を三段に分ち節を追ふて之を敍すべ

し

(一)　老子は學問を以て無用とせり

第二十章に曰く絕學無憂と又四十八章に曰く爲學日益と註に務欲進其所能益其所習とありて學問をなせば巧智愈進んで道の本元を去ること益遠く紛擾爭奪の殃を釀すに至る故に之を無用とせるなり是は「ウオーヅウオース」も屢ば言へる事にて一例を擧ぐればDungeon-Ghyll Forceと云ふ詩中に

A Poet, one who loves the brooks
Far better than the sages' books

とありたも「ウオーヅウオース」は只天然の書を愛して聖人の書を愛せずと云ふ主義なれども老子に至つては天然にあれ人爲にあれ痛く書冊を講修するを惡みしのみならず日常普通の經驗觀察すら毫釐の益なしと思へり去れば四十七章にも不出戶知天下不窺牖見天道とありて天下を知り天道を見るは學問の經驗のと騷ぎ立つるより瞑目潛心して其機を察すれば廓然として大悟するに至るべしと云ふ議論なり故に其出彌遠其知彌少として無形無聲の大道を看破するに形而下の末に拘泥して卑低の處にのみ眼孔を着くれば到底高尙なる世界觀をなす能はずとの考へなり

かく老子は一方にては學問を以て事物を研鑽するを惡み又一方にては經驗を利用して現象を探

究するを無用とし損之又損以至於無爲の域に達せんと力めぬ去れど老子の世界觀は果して外物に待つなかりしか學問もなく經驗もなく宇宙の眞理天下の大道を看破せしか一毫も外界より得たる知識なきも猶能く此の如きの世界觀を構成し其無爲論大玄說冥中より飛び來つて老子の腦中に入るを得べきか、そも世界觀とは其文字通り世界を觀じたる結果に過ぎず假令如何に非凡の人といへど時と處の影響を蒙らざるはなき筈にて一度び目を搖かせば光腦に入り一度び耳を聳つれば音腦に入り一視一聽の間知らず知らず外物の支配を受くること賢愚聖凡の差別はあらじ去るを老子なりとて爭でか此境界を脫するを得ん假令へ獨斷的にせよ經驗的ならざるにせよ一個の世界觀ある以上は外界の助けを得て構成したるに相違なからん今結繩の民は無爲にして化し老子は之に傚はんと欲するが故に無爲を重んじ學問を棄てよ觀察を廢せよと說法したりと見るも矢張り論理上の非難を免かれざるべしそを何故ぞと云ふに自ら知らずして無爲なると之を知つて無爲にならんとするとは同じからず成程古代の民は無爲なりしかは知らざれども自ら無爲をなして自覺せざりしならん（少くとも老子の意見に從へば）今老子は如何老子と同時の民は如何擾々紛々有爲の極に居ると云ふべし老子既に此有爲活潑の世に生れて獨り無爲を說くは是れ無爲に眼の開きたるなり無爲に conscious になりしなり偖其無爲を自知せるは何ぞと尋ぬるに轉捩一番翻然として有爲より悟入したるにあらずや去らば其悟入したる點を擧げて人を導くべきに去はなくして勝頭より

無爲を說き不言を重んず何とて此有情有智、立行橫臥の動物朝夕有爲の衢に奔走する輩を拐し去つて一瞬の際之を寂滅窈冥たる無爲世界に投ずることを得ん余は敢て不言無爲を尊びたる老子が縷々五千言を記述したるを咎むるにあらず無爲不言は目的にして上下八十章は此に達するの方便なるべければなり只其無爲に至るの過程を明示せざるを惜むのみ

(二) 老子は凡百の行爲を非とせり

學問は智なり觀察も智なり老子既に智を破却し進んで情を破却し併せて意思をも破却し遂に凡百の行爲を杜絕し了りぬ

儒家の尤も重んずる所の者は仁義なり老子の一喝して論破せんとする者は仁義なり儒家にては仁を惻隱の心とも云ひ不忍の心とも云ひ朱子は愛之理と說き韓子は博愛之謂と訓ず皆益然たる懇惻の念を指す者にて先天的に我心中に存在する故仁者人也とて人の人たる所以は仁に在りと心得たる者もあり又仁人心也とて心と仁を合一せんと企てたる者もある位にて義禮智の三は皆之より發生するとなす故に程子は專言則包四者と云ひ朱子は仁爲衆善之長雖列於四者之目而四者不能外焉と云へり羞惡の心の萌すも是非辨別の起るも皆仁の生理に徹して喚發せらるゝと思へり然るに老子は全く之と反對にて聖人不仁とも云ひ大道廢有仁義智慧出有大僞とも云ひ絕聖棄智民利百倍絕仁棄義民復孝慈と云へり仁すら斯の如し禮の如きに至つては禮者忠信之薄而亂之首也と誹れり

何故儒家の重んずる仁義をかく迄賤めしかと云ふに

(甲) 其相對的なるが爲にて仁の義のと云へども絶對より見れば小にして殆んど取るに足らざればなり夫れ仁と云へば不仁を含み禮と云へば非禮を含む故に二章にも天下皆知美之爲美斯惡已皆知善之爲善斯不善已と云へり

(乙) 加之仁義禮智は道の本元を失へばなり大道を外れたればなり故曰失道而後德失德而後仁失仁而後義失義而後禮と是仁は末にして禮は益末なるを云ふなり

既に仁義を以て末となす位故肉體上の快樂抔は極力之を攻討せり去れば甚愛必大費多藏必厚亡と云ひ金玉滿堂莫之能守富貴而驕自遺其咎と云ひ五色令人目盲五音令人耳聾五味令人口爽馳騁田獵令人心發狂と云ひ不貴難得之貨使民不爲盗不見可欲使心不亂と云ひ服文綵帶利劍厭飲食財貨有餘是謂盗夸と云ひ凡て慾を斷ち情を攝すべきを說けり

(三) 老子は嬰兒たらんとす

既に情慾を斥け次に學問を斥け最後に仁義禮智を斥け如何なる者にならんとするやと云ふに頑是なき嬰兒と化せんと願へるなり是も「ウオーゾウオース」が

The child is father of the man;

And I could wish my days to be

Bound each to each by natural piety.

と云へるに似て一は務めずして得たる piety を賞し一は智を用ひずして自然に合する嬰兒を愛す故に常德不離復於嬰兒と云ひ、自然の氣に任じ至柔の和を致す嬰兒を愛す故に專氣致柔能嬰兒乎と云ひ、廓然形の名づく可きなく兆の擧ぐべきなき嬰兒を愛す故に我獨泊兮其未兆如嬰兒之未孩と云ひ、求むるなく欲するなく衆物を犯さず又衆物に犯されざる嬰兒を愛す故に含德之厚比於赤子蜂蠆虺蛇不螫猛獸不據攫鳥不搏と云ひ皆嬰兒たるを欲するの意を寓す

然らば老子は嬰兒に復歸して如何なる境界に居らんとするかと云ふに

(甲) 足ることを知るなり故に禍莫大於不知足咎莫大於欲得故知足之足常足矣と云へり

(乙) 柔に居つて爭はず卑に處して人と抗せざるなり故に天下之至柔馳騁天下之至堅と云ひ天下莫柔弱於水而攻堅强者莫之能勝と云ひ强大處下柔弱處上と云ひ聖人……以其不爭故天下莫能與之爭と云ひ善用人者爲之下是謂不爭之德と云へり

(丙) 靜に安んずるなり故に牝常以靜勝牡常以靜爲下と云ひ致虛極守靜篤萬物竝作吾以觀復と云ひ重爲輕根靜爲躁君と云へり

かく修身上に於ては靜を尙び柔を愛し足るを知るを重んぜし故に其所說常に退歩主義にて進取の氣象なく消極にして積極の所寡なし今老子の修身上の意見を表にて示せば左の如くなるべし

- (一) 學問を廢す
  - (甲) 講修學理するを廢す
  - (乙) 致知格物の觀察を廢す
- (二) 行爲を廢す
  - (甲) 道德上
    - 仁
    - 義
    - 禮
    - 智
  - (乙) 美術上…音樂等
  - (丙) 肉體の快樂…衣食の贅澤等
- (三) 多言を廢す（多言數窮又云聖人行不言之敎）
- 修身
  - (ア) 兼爲（消極的）
    - (一) 足ることを知れ
    - (二) 柔を守り物と爭ふなかれ
    - (三) 靜に安んじて下に居れ
  - (イ) 復歸於嬰兒（積極的？）

（茲に積極的と書きたれど其實は學問を取り行爲を取り去れば殘る者は蕩然たる自然の嬰兒たる故あながち之を積極的と云ふにも及ばざれども便宜の爲め斯は名けぬ）

第三篇　老子の治民

修身を擴ぐること一歩にして治他となる老子身を修めて學を廢し德行を廢し多言を廢し自ら嬰

兒の天性に復し能く足ることを知り能く柔を守り能く靜に安んず而る後人をして己れの域に臻らしめんとす故に人を治むるの法を講ず然れども其說く所亦多く退歩主義なりとす今之を數節に分つて述べんとす

(一)　天下は進んで取るべきにあらず退いて之を受くべし自ら故意を用ひて天下を治めんとすれば爭亂相繼で起るべし故に曰將欲取天下而爲之吾見其不得已天下神器不可爲也爲むべからざる者を强て爲めんと欲し固執すべからざる者を固執して之を守らんとすれば必ず之を敗り之を失ふ故に不敢爲天下先と云て之を三寶の一に數へたり

(二)　然らば如何にして可なるやと云ふに只道を守つて超然たるべきのみ（道の事は下に論ず）故に侯王若能守道萬物將自賓と云ひ道常無爲而無不爲侯王若能守萬物將自化と云ひ爲道日損損之又損以至於無爲而無不爲取天下常以無事と云ひ苟しくも無爲に居つて道を守れば天下を取らずとも天下之に歸せんとの意なり

(三)　我れ天下を取るに意なく而して天下我に歸せば我何を以て之に應ずべきかと云ふに只悶々の政を爲して醇々の民を養ひ察々の政を廢して缺々の俗を減するにあるのみ故曰治大國若烹小鮮と治は煩なるべからず小鮮を烹るは撓むべからず煩なれば則ち人勞れ撓れば則魚爛るゝを以てなり

悶々の政をなすに當つて去るべき者三あり

(甲) 一に甲兵を撤すべし故に以正治國以奇用兵以無事取天下と云ひ兵を用ひ正を用ふは未だ以て天下を取るに足らざるを明にす又以道佐人主者不以兵强天下と云ひ兵者不祥之器非君子之器と云て兵の用ふべからざる所以を示す

(乙) 二に刑を去るべし故に曰く民不畏死如何以死懼之と是は政苛察にして刑罰嚴重なる時は民手足を措く所なく從つて死を畏るゝの念も薄らぎ果は恐嚇するに死を以てすと雖も無益なりと云ふ意味なり

(四) 法令を去るべし故に天下多忌諱而民彌貧……法令滋彰盜賊多有と云ふて防禁嚴密なれば一擧手一投足も自由なる能はず民業に安んじ生を樂しむこと能はざるを明にせり

前に述べたる三條は司政の機關を鈍くするなり又教育上に在つては則ち一切の智慧を去り憧々たる愚物を製造せんとす故に古之善爲道者非以明民將以愚之民之難治以其智多故以智治國國之賊不以智治國國之福と云ひ又民多利器國家滋昏人多技巧奇物滋起と云ひて民俗の巧詐詭譎に赴くを畏れたり又不尙賢使民不爭不貴難得之貨使民不爲盜不見可欲使心不亂と云ひて民をして無知無欲にして化せしめんとせり

又政府の取る方針は如何にと云ふに

(甲) 宜しく儉を守るべし故に曰く民之饑以其上食稅之多是以饑と又曰く我有三寶……二曰儉と

(乙) 宜しく人の下に立つべし故に曰く大國以下小國則取小國小國以下大國則取大國又曰く是以聖人欲上民必以言下之欲先民必以身後之と

(丙) 能く柔弱にして卑辱を以て自ら處るべし故に曰く受國之垢是謂社稷主受國之不祥是謂天下王と

(丁) 若し强梁を除き暴亂を去らんとせば當に物の性により之を自滅せしむべし必ずしも法令を用ふるに及ばず刑罰を要せず故曰將欲歙之必固張之將欲弱之必固强之將欲廢之必固興之將欲奪之必固與之と

以上を治民の意見とす之を表に示せば下の如し

- 政治
  - 天下を得る方
    - (一) 不敢爲天下先
    - (二) 能守道
  - (一) 消極的
    - 除刑罰
    - 撤甲兵
    - 廢法令忌諱
    - (不尙賢

- 天下を得たる後…施問々之政
  - 無智
    - 毀利器
    - 已技巧
  - 無欲
    - 不貴難得之財
    - 去耳目之樂
  - (二) 積極的
    - 教育
    - 方針
      - 守儉輕負斂
      - 善下民
      - 柔弱自居
      - 因物性導之

老子道德經中政治に關する章凡そ廿四章程あり是にても老子が功利の末に趨く民を驅つて結繩の昔に歸らしめんとせし意あるを見るに足らん、なれど其方法抔は到底行ふべからざるのみならず其大主意も科學の發達せる今日より見れば論ずるに足る者寡なし今試みに之を評せんに

(一) 其言ふ所は動物進化の原則に反せり抑も人間心身の構造は外界の模樣にて徐々と變化し周圍の景況に應じて有機的の發達をなし其性情機關の如きは子は父より受け父は祖父より襲ぎ祖父は又其先より授かりかくして先祖傳來の遺產冥々の裏に蓄積し生るゝ時既に此遺產を讓り受け加ふるに自己の經驗を附加しつゝ進行する者なれば今更先祖の經驗と自己の智識とを悉皆返上して太古結繩の民とならんこと思ひもよらず人間は左樣自由自在に外界と獨立して勝手次第の變化を

なし得る者にあらず

(二) よし勝手次第の變化をなして結繩の風に復したればとて老子の理想たる無爲の境界に住せんこと中々覺束なしそを如何にとなれば人間は到底相對世界を離るゝ能はず決して相對の觀念を沒却する能はざればなり假令ひ如何に古代の民にあれ如何に蠢愚の者にあれ苟しくも人間たる以上は五官を有せざる可らず五官を有する以上は空間に於て辨別し時間に於て經驗するを免かれざるべし空間に於て辨別する以上は左右をも知るべく大小も知るべく高下も知るべし又時間に於て經驗する以上は前後も知るべく遲速も知るべく過去現在未來も知るべし斯く人間の知識は悉く相對的なり若し此相對的の知識を閑却するときは人間一日も此世界に存在する能はず美醜の念善惡の心を除去するも生存上差支へなからん結繩の民是なり住宅被服なきも或は生存するを得ん穴居の民是なり去ればとて眞の無爲にて生活せんや既に結繩と云ひ穴居と云ふ以上は幾分か智慧の念を含むにあらずや況して甘其食美其服安其居樂其俗者何とて智慧才覺のなかるべき甘と云へば不甘と對し美と呼べば不美と應じ安は不安と與に起り樂は不樂に伴ふ皆相對なり抑も老子の民は自ら甘しとして其甘き所以を知らざるか美として其美なる所以を知らざるか安んじて其安き所以を知らざるか假令ひ之を知らざるにもせよ彼等とても食はざれば饑へん饑は飽の反なり服せざれば凍へん凍は暖の反なり矢張り相對の智識なしとは云ふべからず今此相對世界に生れて絕對を說く

を得るは智の作用推理の能にて想像の辯なり議論上之れ有りと主張するも實際其世界に飛び込む能はず老子の之を知らずして漫に絶對を說きしは前にも云へる如く外界の刺擊に基づきし故にて

(三) 隻眼を以て相對の一方のみを見たる結果と云はざるべからず當時の人君策士皆權謀を以て得意となし詭譎反覆利を見て爲さゞるなく民俗も亦之につれて日に浮薄輕跳に赴き其行は佞媚淟涊其術は怪僻瑣屑功利の末を追ひ智慧の小を玩んで悔ることを知らず天下滔々として澆季に赴く故是では困ると玆に其不平を慰藉する爲め一個の世界觀を構造し已れも此主義にて安心立命の地を得又出來得るならば天下の愚物共をも警醒濟度せんとの考へより遂に無爲の行不言の敎と云ふことを五千言にて後世に遺したるなり老子がかく昏亂世界にあつて高尙なる一個の哲學思想を發揮せるは支那學問の爲め甚だ賀すべき次第なれども其隻眼を開いて相對世界を觀察するに當つてや相對の兩面を比較對照して其得失利害を攻討することなく單に其醜惡なる側面のみを看破し之と兩立し得る善美の側面をも一撞百碎し去らんとせるは甚だ不可なりとす此相對の兩面を混同一視せる事は老子中に對句 (Antithesis) 多きを以ても明瞭にて一寸例を擧ぐれば爲者敗之執者失之と云ひ明道若昧進道若退夷道若纇と云ひ天下之至柔馳騁天下之至堅と云ひ甚愛必大費多藏必厚亡と云ひ大成若缺大盈若冲大直若屈大巧若拙大辯若訥と云へるが如くにて其仁義を不可なりとするは其不仁不義と對するが爲にて其之を小なりと云ふは不仁不義に追陪するが爲と云ふ成程不仁不

義は善くあるまじ去れども之に對する仁義をも同一視せんとするは如何智を用ふること方を得ざれば邪詖狡黠ならん然し善く之を用ひば愚懵を啓發し民福を增加するを得ん去るを智は時として人を戕ふ故其の人を益する時も猶惡と云ふは如何、當時の人は仁義の道をも辨へ先王の道をも心得るに却つて放僻邪惡斯の如くなる故必竟仁義抔を知るのが害になり其反動にて不善に赴く者なれば善を手本とし仁を模型とし早く之に從へと勸むればとて到底益なく反つて其裏を潛つて不善を働くが人情故寧ろ善惡無差別靈無澹々の敎を立つるに若かずと思ひ込みしにや去はれ民をして仁義の本にだに歸らしむること難き世なるに仁義の關所を通り越して無爲の境に移住せよとは猶猶六づ箇敷話しにあらずや六づ箇敷と云はんより何れの世何れの人に施こすも行ひ得べからざる相談と云ふべし又は數學上より割り出したる勘定づくの算用にて一と二の差も一と萬の差も無限より見るときは同樣なると等しく善の惡の美の醜のと噪ぎ立つるも高尙なる玄々世界より見るときは可不可は只一條のみにて毫髮の差を認め得ずとの主意なるか夫にしても相對世界に無限を引き入れ無限の尺度を以て相對の長短を度ることは出來まじ學理上の議論ならば兎に角之を應用して政治上に用ひんとするは驚き入るの外なし

第四篇　老子の道

道と云ふ字は老子の處々に散見し其哲學の骨子なれば特に此篇を設けて之を說明せんとす

(一)　道の範圍、　道と云ふ者が若し玄以外に存し然も天地の始めより在りとすれば老子の哲學は二元論なり若し玄と同一なるか或は玄の一部なるときは一元論なり第一章に曰く無名天地之始

第三十二章に曰く道常無名此を前提とし三段論を組織すれば左の如し

(一)　無名天地之始

(二)　道常無名

(三)　故道天地之始

此式によりて道は天地の始めなりと云ふ命題を得天地の始めとは取も直さず玄の事なれば老子の哲學は一元論にて此道とは玄の一部なるや又は玄と同物なるやの問題に移るを得べし第一章に有名萬物之母とあり此有名とは前に云へる如く玄の一面にて蕩々渾沌たる點より見れば無名なれども其分離(differentiation)の根たる點より見れば有名なり又萬物とは有形無形一切宇宙に存在する者を指したる稱ならん今道を以て玄と同物と見做す時は萬物は皆道の變體と云ふ譯にならん

然るに六十二章には道者萬物之奧とあり蘇子由之を解して凡物之見于外者皆其門堂也道之在物譬如其奧物皆有之而人莫之見耳と云へり去らば道は常に物の中にのみ潛んで外に見はるゝことなき物にや斯く解するときは道は物の中に包含せらるゝ者にて萬物の一部に過ぎず從つて玄の一部としか見做し能はざるが如し然れども子由の意を察するに道は萬物に行き渡れども無形なる故其奧にのみある如くに見ゆと言し迄にて老子の全篇を通觀するも斯く解釋する方至當なる樣に思はるるのみならず廿五章にも周行而不殆とあれば道は宇宙に塡充し萬物に遍滿し至らざるなく在らざるなきを見るべし之を言ひ換ゆれば其範圍至大至廣にして窮極なく天地を包含して餘りあり宇宙に存在する者皆道より成立するの謂なり去らば道は則玄玄は則ち道と解するも妨げなからん又先天地生と云ひ象帝之先と云ひて其初生の期は得て尋ぬ可らず first cause にあらずして而も萬物の原因となる故に其始めを問へば無始なり其終りを問へば無終なり其限界を問へば無限なり吾人の相對世界は此道に包含せらる之を道の範圍となす

(二)　道の體、　次に考ふべきは道は有形なりや無形なりやと云ふ問題なり第四章に道沖而用之或不盈似萬物之宗とあり蓋其體沖然として宇宙に遍からざるなく其無形なるを以て盈たざる者に似たるを云ふが如し又廿五章には有物混成先天地生寂兮寥兮獨立而不改周行而不殆可以爲天下母吾不知其名字之曰道とあり是れ道の湛然として常存し寂として聲なく寥として形なきを云ふなり

去れば五官を以て之を知る能はず故に之を形容して視之不見名曰夷聽之不聞名曰希搏之不得名微とて其色聲摸索の境を離れたるを示し又陰陽を脱し形數を以て推す可らざるが故に其上不皦其下不昧繩々兮不可名復歸于無物とて其捕捉し難きを言ひ其外にも道之出口淡乎其無味視之不足見聽之不足聞とも云ひ道之爲物惟恍惟惚惚兮恍其中有象恍兮惚其中有物窈兮冥其中有精其精甚眞其中有信抔言ひ皆道の實在するに係はらず五官の作用にて知る可らざるを説明せる者なり

余輩は前段の議論より二個の命題を得たり(一)萬物の實體は道なり(二)道は五官にて知る可らず此を前提として結論を作れば「萬物の實體は五官にて知る可らず」と云ふ命題を得然らば吾人が通常見たり聞たり觸れたりする物は實體にあらずして假僞なりと云はざる可らず尤も老子はこゝ迄は明瞭に論ぜざれども道は萬物を塡充(卽ち萬物を組織)し而して無形無聲なりと云ふ前提ある以上は勢ひ此議論を含蓄せざるを得ず故に老子の學は唯道論にて洋人の之を譯して Taouism と云へるは眞に其當を得たりと云ふべし此唯道論は當今の哲學にて形而下の點は何處迄行くも分折(チヴヒギブル)すべき性質を具する故世界の實體は見るべからざる metaphysical points より成ると云ふ議論とよく似通ひて甚だ面白し

(三) 道の用、　此至大無邊にして漠々捕捉すべからざる道は何の用をなすか第三十四章に曰く大道氾兮其可左右萬物恃之以生而不辭功成而不名有愛養萬物而不爲主と(此不辭、不名有、不爲主

とは皆無覺無我なるを云ふのみ) 又五十一章には道生之德蓄之云々とあり孰れも萬物を生ずる力は道にあるを云ふなり、前に云へる如く萬物は道の一部分なり、今又萬物の發生する力も亦道なりと云ふ以上は

(一) 道は他力を藉らず自ら變化し自ら differentiate する者なるや明かなり去れば四十章にも反者道之動弱者道之用と云へり王注に高以下爲基貴以賤爲本有以無爲用此其反也とありて道が一度び動けば相對となることを明言せるが如し而して其變化分離する過程は如何にと云ふに第四十二章にあるが如く道生一、一生二、二生三、三生萬物とあり此一、二、三の數字は何を指すやら抽象的にて合點行かねど「ピサゴラス」の數論に似て面白し「ピサゴラス」の意見に因れば無限の空間が一度び一に感觸するときは二となりて線を生じ此空間二に感觸するときは三となりて面を生じ空間最後に三に感觸するときは四となりて立體を生ず然るに老子は其一、二、三の何たるを言はず從つて其如何なる物たるやを知るに苦しむなり何しろ斯樣な過程にて道より一、一より二、二より三、三より萬物と漸々分離するに當つて一の注意すべきは

(二) 道が自ら發達分離して而も其變化を知覺せざることなり天道無親常與善人と云ひ天網恢々疎而不失と云へば何か道に意思あつて公平の所置をなすが如くに思はるれど其公平なる所反つて其無意識なる所にて一已の blind will を以て自然天然と流行し其際に自ら一定の規律あり無法の

法、理外の理に叶ふ故に道法自然と云ひ無爲而無不爲と云ふ是老子の哲學が「ヘーゲル」と異なる所にして兩者共一元論者なれども一は道に意識なしとなし一は Absolute Idea が發達して最上の位地に到るときは遂に絶對的に意識を有するとす（兩者の差是のみと云ふにあらず「ヘーゲル」の論抔は善くも知らざれども氣の付たこと丈を比較するなり）

(三) 此道を稱して天道と云ひ善く之を體し身を修め治を行ふを聖人の道と云ひ聖人の道に及ばざるを人の道と云ひ其下を不道と云ひ愈下を非道と云ふ七十七章に天道と人道を比較して曰く天之道損有餘而補不足人之道則不然損不足而奉有餘八十一章には天之道と聖人之道を雙提して曰く天之道利而不害聖人之道爲而不爭三十章に不道を誹つて曰く物壯則老是謂不道不道早已五十五章にも同じ事を繰り合せり五十三章には末を飾り本を廢し施設を以て事となす者を誡めて曰く是謂盜夸非道哉又德と云仁と云ひ皆道中に含むを云ふて曰く……故失道而後德失德而後仁失仁而後義失義而後禮と而して道より直接に出る者は一なり故に老子は重を一にをく曰く載營魄抱一能無離曰く昔之得一者天得一以淸地得一以寧神得一以靈谷得一以盈萬物得一以生侯王得一以爲天下正曰

以上を表に示せば左の如し

257877

- 道
  - 絶對の道
    - (一) 範圍
      - 無限
      - 無始
      - 無終
      - 無形
    - (二) 體（無爲）
      - 無聲
      - 無臭
      - 生萬物
    - (三) 用（有爲）
      - 無意識にして法あり
      - 柔にして屈する能はず
  - 相對の道
    - 人之道（損不足奉有餘）
    - 不　道（壯者必老）
    - 非　道（盜夸）

老子道の體に則とるか眞に無爲ならざる可らず其能はざるは前に述べたり老子將た道の用に法らんとするか則ち有爲ならざる可らず相對を棄却する能はず善惡の差別を抹殺する能はず美醜を混合する能はず既に道の體に則とる能はず用に則つて相對を棄てんとす是老子の避くべからざる矛盾なり

文壇に於ける平等主義の代表者「ウオルト、ホイツトマン」Walt Whitman の詩について

革命主義を政治上に實行せんと企てたるは佛人なり之を文學上に發揮したるは英人なり「バーンス」を讀む者は通觀一過して其平等論にかぶれたるを知るべし「シエレー」の如きは多言を須たず"Prometheus Unbound"の一篇之を證して餘りあらん。「バイロン」に至つては滿腔の不平一發して「チヤイルドハロルド」となり再發して「ドンジュアン」となり餘憤怫々然常に其毛孔より溢出すと云ふも可なり沈着にして舊慣を重んずる英國の詩人が從來の面目を一洗して此思想を唱道し中には身を挺んでて此主義の爲に打死せし位なるに不思議なるかな共和の政を實行し四海同胞の訓へを奉ずる亞米利加にては一人の我は共和國の詩人なりと大呼して名乘り出でたる者なし「ロングフエロー」は詩人なるべし去れど其思想は常に中世紀に溯つて亞米利加の新開地

にあらず「アーヴイング」は文章家ならん然し其嗜好は矢張故郷に落付かずして亦歐洲大陸に向へり是等の匹敵を英國に求めばたとひ升を以て量る位は無きにもせよ尋ねて見當たらぬと云ふ程の事はあるまじ其他「ブライアント」にせよ「ホーソーン」にせよ自家一流の特色を具へたるには相違なかるべきも如何せん合衆國といふ前代未聞の共和國を代表するに適したる新詩人は頓と出現せざりしなり然る處天茲に一偉人を下し大に合衆聯邦の爲に氣燄を吐かんとにや此偉人に命じて雄大奔放の詩を作らしめ勢は高原を横行する「バツファロー」の如く聲は洪濤を掠めて遠く大西洋の彼岸に達し說く所の平等主義は「シエレー」「バイロン」をも壓倒せんとしたるは實に近來の一快事と云はざるべからず

此詩人名を「ウオルト、ホイツトマン」と云ひ百姓の子なり千八百十九年「ポーマノツク」に生る幼にして活版屋の小僧となり夫より雜誌の編修人となり廿歳の時「ニューヨーク」に移り千八百五十五年始めて"Leaves of Grass"を著す去れど盲目千人の世の中たる上舊來の詩法に拘泥せざる一種異樣の風調なりしかば之を購讀する者は無論の事其書名をだに知る者なかりしが故出版せる千部の內覆瓿の災を免れたるは僅かなれど其僅かなる中の數冊が古道具屋の雜貨と共に英國に渡り後年「ロゼツチ」の Selected poems by W. Whitman となつて現はれたるは著者の爲め且つ出版者の爲め甚だ賀すべき事と云ふべし、斯く米人は冷淡にもかゝる書には手をだに觸

れざりしが「エマーソン」の慧眼は早くも其眞價を看破し一篇の書翰を送つて大に著者を祝せり其略に曰く……小生は充分貴著の價値を認識する者に御座候才識雙方の點より觀察致候もわが合衆國の書中得易からざるの好著と存候……斯く雄大なる思想を有せらるゝ段欣羨の至りに堪へず……初陣の御手際としては甚だ出來宜しく全く平素御涵養の功只今見はれ候儀と祝着に奉存候云々顧ふに"Leaves of Grass"に先だつこと二十年"Sartor Resartus"の始めて世に出るや滿天下の廣き誰あつて之を理解する者なかりしに獨り「エマーソン」は書を出版者に寄せて頻りに之を賞しかゝる論文を續々公けにせん事を望めりとか朝たには一人を取つて其尤を拔き暮には一人を取つて其尤を拔くとはかゝる人の事なるべし南北戰爭の起るや「ホイツトマン」直ちに起つて軍に從ひ看病卒となつて戎馬の間に往來しけるが櫛風沐雨の苦みを閲し肝腦塗地の慘狀を目擊したる爲にや是より痛く健康を害なひ荏苒歲月を經て遂に不治の症に陷れり集中戰爭を敍したる詩あまたあり顧ふに當時の實況ならん

「ホイツトマン」の詩に關しては世評一ならず或は其詩體の一生面を開いて前人の舊路を踏襲せざるを以て是れ韻文にあらずと謗る者あり或は其肉體の快樂を敍して顧ず時に卑猥に陷り風敎を害するの恐れあるを以て痛く之を排擊し百方之を傷けんとするものあり去れども其詩法に拘泥せざる所劣情を寫して平氣なる所が卽ち「ホイツトマン」の「ホイツトマン」たり共和國の詩人

たり平等主義を代表する所なるべし元來共和國の人民に何が尤も必要なる資格なりやと問はゞ獨立の精神に外ならずと答ふるが適當なるべし獨立の精神なきときは平等の自由のと噪ぎ立つるも必竟机上の空論に流れて之を政治上に運用せん事覺束なく之を社會上に融通せん事益難からん人は如何に云ふとも勝手次第我には吾が信ずる所あれば他人の御世話は一切斷はるなり天上天下我を束縛する者は只一の良心あるのみと澄まし切つて險惡なる世波の中を潛り拔け跳ね廻る是れ共和國民の氣風なるべし其共和國に生れたる「ホイツトマン」が己れの言ひ度き事を己れの書き度き體裁に敍述したるは亞米利加人に恥ぢざる獨立の氣象を示したるものにして天晴れ一個の快男兒とも偉丈夫とも稱してよかるべし蓋し「ホイツトマン」あつて始めて亞米利加を代表し亞米利加あつて始めて「ホイツトマン」を産す蘭は幽谷に生じ劍は烈士に歸し鬼は鐵棒を振り廻すが古來よりの約束ならば「ホイツトマン」の合衆國に出でたるも亦前世の約束なるべし

去らば「ホイツトマン」の平等主義は如何にして其詩中に出現するかといふに第一彼の詩は時間的に平等なり次に空間的に平等なり人間を視ること平等に山河禽獸を遇すること平等なり平等の二字全卷を掩ふて遺す所なし

時間的に平等なりとは古人に於て崇拜する所なく又無上に前代を有難がる癖なきを云ふ其言に曰く古人も人間なり我も人間なり余は古人に就いて學べり恨むらくは古人を九原に呼び起して余

を學ばしむる能はざるを合衆の聯邦豈古代を蔑視せんや其功績を認識するに於ては敢て人に後れざるを期する者なりと暫く眼睛を轉じて他の詩人の思想を窺ひ「ホイツトマン」の此言と比較するときは其差啻に三舍のみにあらざるを見る華麗なる甲冑を着け大なる劍をぶらさげ栗毛の馬に乘つて而して美人の前に試合をせざれば詩中の人物にあらずと思へる「スコツト」は如何小女はnymphと名けざるべからず朝はauroraと呼ばざる可からず晩はhesperと稱へざるべからず原野の景色には必ず羊飼を出し英國は隨分氣候の寒き國柄なれどそこは是非南方大陸を眞似て草頭樹下必ず寒風に吹き曝されて笛を吹かねばならぬと勝手な制限を立てたる「ポープ」一派の詩人は如何、「バイロン」「シエレー」は革命の詩人なり去れども十九世紀を改良し數百年來の舊弊を一掃したる上に希臘古代の分子を注入せざれば其理想を滿足せしむる能はざらん彼等をして「ホイツトマン」を見せしめば亦必ず愕然として其放膽なるを怪しまん蓋し「ホイツトマン」は封建時代の詩人にあらずclassicismの詩人にあらず希臘風を戀ふ詩人にあらず其歌ふ所は過去にあらずして現在にあり是れ過去を賤しむにあらず只之を尊奉せざればなり望を未來に屬する者なり是れ現在に不滿なるにあらず世界の大勢は古今を一貫し前後を通徹して圓滿の域に進行すればなり

Poets to come! orators, singers, musicians to come!
Not to-day is to justify me and answer what I am for,

But you, a new brood, native, athletic, continental, greater than before known,
Arouse! for you must justify me.

此大世界何とて不淨の有らざるべき只此不淨中圓滿の種子を含むとは「ホイツトマン」が"Song of the Universal"中に述べたる言なり此一言にても其の一種の進化論を抱いて科學的の世界觀を有せるを證するに足れど若し其の"With Antecedents"を讀むときは其主義一層明瞭なりとす其詩に曰く我が今日あるは皆祖先の賜過去の報なり埃及印度希臘羅馬皆吾人をして此域に達せしめたる者なり「ケルト」「スカンヂネウビアン」「サクソン」亞拉比亞人皆今日の境界を補益したる者なり航海、法律、工業、戰爭、詩人、卜者、奴隷の賣買、十字軍の遠征、僧侶、舊大陸、列國の興廢、宗教の盛衰皆預かつて力あらざるなし……余は百般の思想を有し百般の事物を信ず唯物論も眞ならん唯心論も僞と云はじ……過去は斯の如くならざる可からざるが故に斯の如し現在も然らざる可からざる理由あつて然り……過去は廣大なり未來も亦廣大ならん奇なるかな此廣大なる過去と未來とは現世一代に蹙まる故に我等何處の果に生息するとも其生息する所卽ち萬民の中心なり百代の中心なりと彼の「サラミス」の巖頭に箕坐して"For Greece a blush—for Greece a tear"と叫び世の味氣なきを嘆じて"Out of the day and night/A joy has taken flight"と悲しんだる詩人等浮世を觀ずること「ホイツトマン」の如き能はず四民同權の

主義實行し難きを憤り一は白眼嫉視の旋毛曲りとなり有らゆる厭世の分子を一身に引き受け「ドンジュアン」を公にして天下を愚弄し餘憤洩らす所なく遂に南歐に客死し一は"Prometheus Unbound"を作つて望を後世に屬したりと雖ども彼れ卅年の生涯を三分して一分は讀書世界に沒し一分は空想世界に住し殘る一分を擧げては醜惡不埒の世界に委ね不幸薄命を悲しんで客土に溺れぬ此二人說く所の主義「ホイツトマン」を去ること遠からず而るに其世界觀何とて斯の如く異なるや居氣を移すが爲か養體を移すが爲か抑も天稟の氣質に强弱あるが爲か時の先後人心に感ずること此の如く甚しきか余は只「バイロン」の厭世主義を悲しんで「ホイツトマン」の樂天教を壯とするのみ又其の「ヘーゲル」を讀んで

Roaming in thought over the Universe, I saw the little that is Good steadily
hastening towards immortality,
And the vast all that is call'd Evil I saw hastening to merge itself and become
lost and dead.

と咏じ出せるを嘉みする者なり

空間的に平等なりとは場所に因つて好惡を異にすることなく亞弗利加の砂漠も倫敦の繁華も皆同等の權利を有して其詩中に出現し來るを云ふ勿論「ホイツトマン」は頻りに自國を稱揚し合衆

共和國の文字常に其唇頭を離れざるが如くなれどもこは頑陋なる文盲漢の無暗に己れに誇つて非を顧ざる執拗心と同一視すべきにあらず亞米利加の四字絶えず詩上に入り來るも其故郷なるが爲にあらず財源富贍舊大陸の向ふを張るが爲にあらず殖産の利興業の隆宇内を壓するが爲にあらず只建國の風其奉ずる所の主義と相近く制度文物亦其理想に遠からざればなり但し近しと云ひ遠からずと云ふは未だ全く其理想を滿足せしめざるの謂にして詩人自らも嘗て紐育の紅塵中を徘徊して人間の下等なるに驚きし位なれど熟ら觀ずれば無限の歳月は無限の歳月を迎へて世事流水の如く逝く者は復還らず來る者は暫らくも留まらず轉變無常の理を示す中に自ら一定不變の規律ありて世界の大勢は日に〳〵惡より善に移り醜より美に趨き壓制主義より自由主義に徙るを看破せし途端自國の政體を觀れば共和なり其制度を見れば平等なりしかば是こそ今後福德圓滿の極境に達すべき世界の通路ならんと自信し乃ち亞米利加といふ四字の咒文を唱へて一世を切り靡けんと欲したるなり

I heard that you ask'd for something to prove this puzzle the New World,
And to define America, her athletic Democracy,
Therefore I send you my poems that you behold in them what you wanted.

と云ふが精神なれば決して他國を度外視したるにあらず獨佛伊西は愚か遠く海山を隔てたる支那

にせよ日本にせよ我が亞米利加人の如く親愛すべき人物は幾多もあらん此人々と同胞の交りを締して互に往來するを得ば其幸如何ぞやと自ら其詩中に明言せしを見ても其意は瞭然たらんさるにても「ドクインセー」が "Confession" 中にわれ若し已むを得ざる事の爲に故郷なる英國を棄て支那又は支那風の生活をなす處に移住する段にならば嫌惡の餘り必ず發狂すべしと記し置けるは何たる狹量ぞや此男をして一介の詩人ながら歌ふ所は "World Democratic" なり "the world en-masse" なりと名乘り出でたる「ホイツトマン」に見へしめざりしこそ殘念の至りなれ

「ホイツトマン」は共和國の詩人なり共和國に門閥なく上下なく華士族新平民の區別なし貧富何者ぞと問はば是れ accident のみと答へん黄白の礦塊或る機會に因り彼を去つて此に附着したるのみと云はん地位何者ぞと問はば一片の肩書甲より飛び來つて乙に落ちたるのみと云はん縉紳は虎皮に坐し匹夫は敝袍を纏ふも虎皮を取り上げて敝袍を脱ぎ替へさへすれば兩者の地を易ふる事朝夕を待たざるべし大統領に面會するに非禮の擧動あるべからずとすれば丐者に對しても相當の挨拶なかるべからず人間と云ふ點より觀察すれば金殿玉樓の客屠肆鼓刀の人と我に於て何ぞ擇ばん凡て形體上の懸隔に因つて人間の取扱に階級を設くるは「ホイツトマン」の大に不埒とする所なり去ればとて横目竪鼻の動物なれば悉く一様なりと云ふにあらず只其差違は身外を圍繞する所有物にあらずして他人の奪ふべからざる身體なり精神なりに存すと云ふのみ長幹綠髯之を有す

る者が土方にせよ學者にせよ「ホイツトマン」の之を嘆賞するは一なり明眸皓齒之を美なりとせば閨人にあつても美なり青衣にあつても等しく美なり智は不智に優り德は不德に勝る「ホイツトマン」は明らかに之を認識するものなり之を認識すると同時に表面上の尺度を撤去せんと欲する者なり族籍に貴賤なく貧富に貴賤なく之れ有らば只人間たるの點に於て存す是れ「ホイツトマン」の主義なり

空言は實行に若かず"How beggarly appear arguments before a defiant deed!"家庭は大道に若かず一家に戀々たる者は田螺のわび住居を悅ぶが如く蝸牛の宅を負ふてのたり〳〵たるが如く牡蠣の口堅く銷して生涯蒼海を知らざるが如し此世界は競爭の世界なり安逸して人に後るる勿れ、起て、起つて働け、斃るゝ迄働け、旅に病まば夢に枯野を馳け回れ、勝利を說くなかれ、一戰纔かに已むは大戰將に來らんとするの徵なり錢なきを恨むな衣食足らざるを嘆くな大敵と見て恐るゝな味方寡なしとて危ぶむな智を磨くは學校なり之を試みんとならば大道に出でよ吾れ無形の智者を證する能はざるも智自ら之を證せん思を哲理に潛め深く宗教を究め講堂に立つて其の眞理なるを說くとも何の益あらん白雲の下激湍の傍無邊の天然界に跳り出でて其の眞なるを證明せよ

Have the elder races halted?

Do they droop and end their lesson, wearied over there beyond the seas?
We take up the task eternal and the burden and the lesson,
Pioneers! O pioneers!

「ホイツトマン」の處世の方法概ね斯の如し此方法に從つて生活を送る者は「ホイツトマン」の氣に入るものなり必ずしも長幼の序を論ぜず男女の性を問はず斯く其愛に偏する所なく其情に傾く所なければ一種の人物を描出して之を崇拜する抔とは彼の夢にだも見ざる所なり故に其詩を讀めば種々雜多の人間簇然として入り來り忽然として謝し去ること恰も走馬燈の廻轉して瞬時も止まざるが如し稠人を一幅中に收め其中只眞中の一人に金色の毫光を着くるが畫家の慣手段なれど余は無數の頭を描いて有らゆる善男善女より永代不滅の毫光を放たしめんとすと云ひしは自己れを譬へて甚だ巧みなる者と云ふべし去れば其"A Song of Joys"を見ても先づ土木家の快樂を敍し次に馬乘りの快樂に移り轉じて消防夫の樂しみとなり劍術使ひの樂しみとなり捕鯨者の樂しみとなり坑夫兵卒豪飲健啖の樂しみより進んで至大なる精神の快樂に入り終りに死亡の樂しみを敍べ The beautiful touch of Death と稱して遂に其局を結べり固より雅俗高下の差別はなく見る者聞く者悉く其詩料に生擒らるゝ次第なれば漢人の所謂風流邦人の唱ふる都雅の思想抔は一棒に抹殺して顧慮する所なく教育を受けたる上等社會にのみ行はるゝ「テニソン」抔の詩と比

較するときは實に天地の差といふべし斯く平等の取扱をなすこと人間に限るかと思へば左にあらず人外の事物も亦一樣の權利を以て其詩中を往來す入り替り立ち替り、故に今水禽の虛空に飛翔する樣を敍するかと思へば忽ち蒼穹水に映ずる景色となり列邦の旗旌晩風に翻つて落日に輝く抔と唐詩めきたる言を發する其次に製造所の烟突より石炭の烟が黑々と立ち登る抔と我朝の思想には俗氣鼻を衝く程のことを事もなげに言ひ放つは奇といふの外なし詩人自らも之を詠じて曰くわが詩を見よ輪船あつて詩中を横行し一方に東海あり一方に西海ありて潮流わが詩上に進退し家あり舟あり村落あつて余が詩面を點綴す其他牧場あり森林あり都會あり此都會には鐵製の家もあり石造の屋もあり貿易は不斷に繁昌し車馬は日夜に絡繹たり加之蒸氣活版所あり電信機あり鐵道は氣笛を鳴らして走り坑夫は金を掘り百姓は畠を耕し職人は「ベンチ」に腰を掛けて家業に暇なし此半天社會より裁判官出で哲學者出で大統領出づと恰も手術使ひの口上の如し

「ホイツトマン」は「テニソン」の如く義理の精神を鼓舞し自重克己の風を養つて社會の秩序を保たんと欲する者にあらず又「ウオーヅウオース」の如く退いて生を山林に寄せ瞑目潛心して天地の靈氣と冥合し以て天賦の德性を涵養せんとする者にあらず中古任俠の風を寫し然諾を重んずるの氣象を奬勵して世道を維持せんと欲する事「スコツト」に及ばず忠臣孝子節婦義僕を寫して一世を感泣せしむる事日本支那の詩人に及ばず然らば彼れ何を以て此個々獨立の人を連合し各

自不羈の民を聯結して衝突の憂を絶たんとするぞと問はば已れ「ホイツトマン」に代つて答へん別に手數のかゝる道具を用ふるに及ばず只"manly love of comrades"あれば足れりと蓋し西洋にて愛の字の普通なる事は已が和歌俳諧にて物の憐れとか情けとか云ふと同じく詩人中一人として此字を使はざる者はあるまじく就中「テニソン」の如きは"In Memoriam"の冒頭に

Strong son of God, immortal Love,
Whom we, that have not seen thy face,
By faith, and faith alone, embrace,
Believing where we cannot prove;

と云ひ「コレリツジ」は

All thoughts, all passions, all delights,
Whatever stirs this mortal frame,
All are but ministers of Love,
And feed his sacred flame.

と云ひたる位なれば今「ホイツトマン」が愛の字を用ひたりとてあながち怪しむに足らねどmanly love of comradesといふ斬新なる言を使ひたるは詩人あつてより以來始めてなるべく只此一

新熟語を敷衍すれば“Calamus”の全篇を掩ふに足り而して“Calamus”を敷衍すれば又全集を掩ふに足る位なる故此一語中々輕卒に看過すべからず元とcalamusとは亞米利加に産する草の名なるが「ホイツトマン」之を取つて友愛の徽章となし愛に關する數十首を收めて一篇となし冠らすに此草名を以てしたるなり此篇を通觀するときは洵に作者の愛情の純潔にして寸毫も脂粉の態なく實にmanlyの名に背かざるを見る蓋し「ホイツトマン」は社會的の人物なり(俗物の謂にあらず)自ら社會の一分子となり天下の公衆を助け又天下の公衆に助けられん事を冀ふ者なり故に其の尤も意を傾くる所の者は山水花鳥にあらず紅燈綠酒にあらず蟋蟀の音十五夜の月にあらずして矢張り已れと同類の人間にあり去れば此篇にては第一に人間交際の精神上に必要なるを說き次に凡て哲學の基礎は此種の愛に外ならざるを論じて曰く余は希臘獨乙等古今の哲學を講究せり「カント」「フイヒテ」「シエリング」「ヘーゲル」を讀み「プレートー」に入り「プレートー」より大なる「ソクラチス」をも究め「ソクラチス」より大なる「クライスト」をも研鑽せり然し「ソクラチス」の裏「クライスト」の中に伏する者は人と人との愛友と友との愛夫と婦との愛親と子との愛市と市との愛國と國との愛にすぎずと、愛には相手なかるべからず相手なきの愛は軟風徐ろに吹いて春風の應ぜざるが如し故に曰く嘗て「ルイシヤナ」を通りしに野中に一本の樫あり其古幹天を掠めて恣まゝに蟠屈するを見て坐ろにわが身の上に擬へしが苔の着きたる枝を動かして只獨り風に吟ずる樣の左も心地よげなるに氣が付けば不審の念やみ難し熟ら考ふれば知己なく朋友なきに已れ獨り愉快の聲を擧げん事余に在つては思ひも寄らずと、かゝる人の親友を求むるに切なるは云ふ迄もなし「名四海に震ひ功一世を蓋ふと云ふ英雄も羨ましからず大統領の榮譽も綺樓傑閣の富も羨ましからず羨ましきは締契の士危難艱苦を經て交りも變ぜず少より壯に至り壯より老に至り老より死に至つて信義に渝る所なきにありかゝる人を見もし聞きもする時は嫉妬の念禁じ難し」と嘆じ又「筆を執つて何事をか書かん眞帆に風を孕んで沿海を走る軍艦を咏ぜんか古代隆盛の樣を寫さんか今夜の光景にせんかはた余が周圍を包む大都の繁華を敍せんか已むべし已むべし只已まんと欲して已む能はざるは今日群集の中にて觀たる二客の訣別なり別るゝ時送る者は行人の肩に倚つて之に接吻し行く者は手を伸べて留まる人を擁せり」と賞せりかく譯し出だせば彼も是も譯し度くなれど左樣は行かねば終りに原詩一首を載せて餘は預かり置くなり原詩に曰く

O you whom I often and silently come where you are that I may be with you,
As I walk by your side or sit near, or remain in the same room with you,
Little you know the subtle electric fire that for your sake is playing within me.

此境界を知らぬ者は「ホイツトマン」の詩を理解する能はざる者なり序でに云はん此原作は敢て

女性に關して咏出せる者にあらず女を戀ふて男を愛せず抔と云ふは「ホイツトマン」の主義に反するものなり

人は愛情を待つて結合し之を待つて進化し之を待つて圓滿の境界に臻るとは「ホイツトマン」の持説なり然らば其愛情の發する所はと云ふと全く靈魂の作用なり余は何が故に憐愛の情を起すや人間わが傍らにある時は血脈何が故に勃張し彼等の去る時は又何が故に悄然自失するが如くなるやと自問を提出して自答を得んと欲するは全く靈氣の坌涌して溢出するに異ならず故に愛情の羈絆能く不羈の民を制し鞭撻して之を疾驅せざるも自ら天下の大勢に從つて善美の方向に進行するなり去れば宇宙の歴史は全く靈魂の歴史なり但靈魂に形なし故に形體を有せる事物を借つて世界に出現す「ホイツトマン」は靈魂説を説く者なり靈魂に形なし故に形體を有せる事物を借つて之を詩に咏ず其言に曰く

I will make the poems of materials, for I think they are to be the most spiritual poems,
And I will make the poems of my body and of mortality,
For I think I shall then supply myself with the poems of my soul and of immortality.

靈魂の進行するや宗教も之を避け技藝も之を避け政府も之を避く他物の進行は皆眞似事なり記號のみ獨り靈魂は進んで止まる所を知らず常在にして滅する事なし其の之くや何處に之くを知らず最善に向つて行くのみこれを「ホイツトマン」の靈魂説となす故に「ホイツトマン」は形質上の開化を喜んで精神上の發達に無頓着なるものにあらず肉體のみを知つて恣に劣情を寫す者にあらず既に死を以て快樂の一に數へ魂は冥漠に歸し屍は化して永く下界の用をなさんと云ひ又 How the floridness of the materials of cities shrivels before a man's or woman's look! と云へる位なれど猶下に譯出する一篇を讀まば其愛益明らかならん其詩に曰く（但し譯は詩にあらず以上悉く然り）「通邑大都とは如何なる所ぞ埠頭長く突出して船渠深く製造盛んにして百貨輻湊するの地か大廈高樓甍を竝べ五洲の物産悉く聚まるの地か藏書棟に充ち庠序の教行き渡るの地か是等のもの未だ大都をなすに足らず大都とは壯快なる辯士と雄大なる詩人の生息する所なり此辯士と詩人とは廣く公衆を愛し公衆は又彼等を敬愛し彼等を理解する所なり個人の爲に記念碑を建てず之を建つれば必ず公共の事業と公共の文字を鐫す是れ大都のある所なり人は經濟に長じ先見の明あつて無謀の行を愼む是れ大都のある所なり市に奴隷なく奴隷あれども之れを使役する者なく男女重きを法律に置かず是れ大都のある所なり其の他の要件を擧ぐれば公民は常に首たり市長役人は單に傭人たるの所なり外部の制裁良心の制裁に先つて來ることなき所なり公平の實行せらる

る所なり靈魂上の研究を奬勵する所なり女子は行列を組んで市中を練り行く事男子の如くせざる可からざるの所なり女子も公會に出入し男子と共に列坐せざる可からざる所なり朋友は信義を重んじ男女に醜行なく父は丈夫に母は健康なる所なり」是れ蓋し「ホイツトマン」が理想上の國ならん此條件中には一千年來儒教の空氣を呼吸して生活したる我々より見れば少しも感心し難き點もあり殊に女子の行列云々に至つては聞くも可笑しき話ながら國體の異なる亞米利加に生長した詩人故自然其理想の或點に於ては東洋主義と衝突するを免かれざらん兎に角其形質上の進歩よりも精神の進歩を重んじたるは歴然として疑ふべくもあらず

余は以上に述べたるところを以て滿足なりとする者にあらず「ホイツトマン」の精神を發揮して餘蘊なしと云ふ者にあらざれど其懷抱せる主義の大體を解剖したるに於ては敢て誤謬なきを信ずる者なり蓋し其博愛說は之を基督に得靈魂進化の說は之を「ヘーゲル」に得たるに似たり因果の大法を信じ共和を以て最良の政體となすに至つては別に科學的の眼光あり尋常一般の mystic にあらざるを見る其の知らんと欲する所は人と人との關係なり人と物との關係なり向後科學益開けて人を觀物を察するの方向一變して未聞の新思想現はるゝに至らば詩人の歌ふ處亦必ず一變せん是「ホイツトマン」が "After the chemist, geologist, ethnologist, finally shall come the poet worthy of that name; the true son of God shall come singing his song" と云へる

所以なり

「レスリー、スチーヴン」嘗て「ウオーヅウオース」の道德を論じて思らく詩人は哲學者なり哲學者に在つて考ふる所のものは詩人之を感じ哲學者に在つて論ずる所のものは詩人之を悟る一は論理に因つて系統を立て一は記號を用ひて世界を說明す歸着する所は同じくして採る所の法は異なり鴻天首に飛ぶ越人は以て鳧となし楚人は以て鴉となす詩人は越人にして哲學者は楚人なるべし廬山の形右より觀れば峯となり左より觀れば巒となる詩人は右より望む者哲學者は左より眺むる者ならんと兩者の關係果して斯の如くなるか余は此疑案を斷定せんとするものにあらず又斷定せんと欲して能はざるものながら其說を取つて「マコーレー」の詩論と比較するときは高尙なる事蓋し數等の上にあらん今假りに「スチーヴン」的の讀詩眼を以て "Leaves of Grass" を通讀するときは作者は是れ宛然たる一個の好詩人なるべし蓋し其文學史上に占むべき地位に至つては百世の後自ら定論あり余の如き外國人が入らざる品評を試むるの要なきなり但茲に述べたるは其詩上に出現せる主義人となり他の詩人と異なる所以等に過ぎず夫すら品評の月旦のといふ譯にあらず大雜ばいに之を解剖して排列して見たと云ふ位な事なり序に記す此篇は固より倉卒の際になりし者故無論諸家を商量するの暇はなかりしかど舶載の書に乏しきを以て參考せんと欲して參考する能はざりし者も亦尠からず "Specimen Days and Collect" の如き「ロゼツチ」の詩選の

如き「バック」の傳の如き皆讀まんと欲して手に入らざりし者なり幸に「グウデン」の論文を覽ることを得て稿を草するの際裨益を受けたること多し

――二五、一〇、五『哲學雜誌』――

中學改良策

――明治二十五年十二月稿、文科大學教育學論文――

第一編　序　論

尊王攘夷の徒海港封鎖の說を豹變して貳千五百年の靈境を開き所謂碧眼兒の渡來を許したるは既に廿五年の昔しなり指を屈すれば昔しなれども成就したる事業の數發生したる事件の繁きに比ぶれば白駒隙を過ぐる事倏かにして廿五年の歲月は轉た其短かきに堪へず外交の約一たび成つてより日本は無事の日本にあらず競爭の世界に自立して列邦の間に連鑣馳騁せんには其丈の用意なかるべからず國防も嚴にせざれば城下の盟に末代の恥を貽す事あるべし工業も興さゞれば財庫空ふして國其弊に堪へざらん運輸も便にせざれば有無を交換するに由なく政令遲滯して治民の術擧らざるべし萬事萬物悉く舊を捨て新を採らざれば泰西諸國と併立して押も押れもせぬ地位を得る事難からん去れば天下の人々狂奔喧走して彼も此もと輸入したる結果如何にと見てあれば先祖傳

來の元氣漸く沮喪して見掛許りは驚山なる不具者となりぬ

人の人たる所以は服裝の美車馬のうつくしきにあらず巧に翠黛を描けども氣息の奄々たる小女如何許りの事をか爲し得ん邦人現今の有樣此小女に似たるものあり憐むべきの至りと云ふべし日本を維持せんとならば日本固有の美德を利用して之を粧ふに文明の利器を以てすべし優孟の衣冠は君子の愧る所にして而も日本の君子は之を學んで得々たり今にして之を救濟せずんば金甌無缺の天下も百年を出づして猛獸の餌食たらん

去れども塗り盆に水は浸み込まず腐つた魚は潑溂するの期なし天下有爲の士奮つて春日を未落に挽回せんとするは甚だ結構なれども骨折り甲斐に現は見えまじ夫よりも望を將來に抱いて方今幾萬の子弟を敎育し之に日本人固有の資格を與ふる方手緩るき樣にて實際は救治の最捷徑なるべし日本未來の運命は實に此子弟の掌中にあり萬代一系の美國を左右する人物を製造して之を後世に讓らん事之に過ぎたる偉功はあらじ況して目下の弊之を捨てゝ他に國運を挽回するの策なきに於てをや志あるものども宜しく國家の爲めに身を挺し全力を擧げて敎育に從事すべき秋なり

固より國家の爲めに人間を敎育するといふ事は理窟上感心すべき議論にあらず既に「國家の爲めに」といふ目的ある以上は金を得る爲めにと云ふも名譽を買ふ爲にと言ふも或は慾を遂げ情を恣まにする爲に敎育すといふも高下の差別こそあれ其の敎育外に目的を有するに至つては毫も異

なる所なし理論上より言へば敎育は只敎育を受くる當人の爲めにするのみにて其固有の才力を啓發し其天賦の德性を涵養するに過ぎずつまり人間として當人の資格を上等にしてやるに過ぎず若し是より以外に目的ありと云はゞ其目的の斷滅する時敎育も亦斷滅の運に到着するものなりかくては人は活き民は存すれども敎育を施こすに及ばず抔と云ふ時期來らんも知るべからず國家主義の敎育も之と同樣にて國家と云ふ條件が滅却するときは國家的敎育も純然たる一個の廢物と化し去らざるを得ず試みに今の列邦が合一して地球上に只一の大國を現出したりと思へ然る時は其住民に彼我の別なく其政府に自他の差なきに至らん其時人の心に對外と云ふ精神は消滅すべし是は我國の爲故斯く敎育すべし我國の爲めなる故かく訓練すべし抔といふ一切の條件は盡く無用とならん是等の條件無用となるも敎育の猶忽かせにすべからざるは言を待たざるなり勿論かゝる境界は實際あるまじけれど理窟上より云へばなしと斷言する事もならず迂濶の說にせよ本源に溯つて考ふれば當然の論と思はる但し目下の形況にては中々にかゝる心配は無益の業にて列國の中に立つて彼我對等の地位を保つ以上は國家は何處迄も萬代不朽なるを冀はざるべからず之を冀ふと同時に其子弟を驅つて國の爲になる樣獨立の維持のつく樣にと鞭撻訓練せん事當局者の責任にして而も子弟たるものゝ喜んで應ずべき義務なりとす故に世界の有樣が今のまゝで續かん限りは國家主義の敎育は斷然廢すべからず況して吾邦の如き憐れなる境界に居る國に取つては益此主義を擴

張すべし之を擴張して尤も功驗あるは中學校に若くなし

抑も中學校は中等社會の子弟の聚まる所にして中等社會は一國元氣のある所未來日本の日本たる資格を代表するものは實に此子弟に外ならざれば此子弟等が悉く有爲有德の人物にして國家の支柱となる以上は夫こそ日本は磐石の安に居るといふも不可なからん又二つには此等の子弟が中學に遊ぶ時間は丁度小兒より大人に移る極めて大切なる時にて未來の目的生涯の性質智德多くは此時に土臺を据ゆる者故教育して教育甲斐あるは此時期に若くなからん日本を代表すべき少年を其尤も發達し易き時期に於て教育す何物の愉快か之に若かん

然れども現時の有樣にて放拋(原)せんには到底充分の美果を獲べからず此目的を達せんには豫め方案を設けて鋭意之を實行するに若くなし余は學生の身分にて此件につき未だ叮嚀に調査を遂げたる事なく且つ年來の宿論も有せず一度も實地に臨んだる事なき故精確の議論は迚も出來ざれど聊か取り調べたる沿革を本として改良の卑見を述べ一覽を煩はさんとす

第二編　維新以來中學校の沿革

案ずるに明治以后中學の名稱廣く行はるゝに至りしは明治五年全國を分つて大學區中學區小學

區の三とし學制を頒布して大に教育上の體面を改めたる時にありとす該學制中第廿九章に曰く中學ハ小學ヲ經タル生徒ニ普通ノ學科ヲ教フル所トス分ツテ上下二等トス二等ノ外工業學校商業學校通辯學校農業學校諸民學校アリ此外廢人學校アルベシと然らば各種の實業學校は皆中學校に隷屬せしめたるが如し而して中學の課程は如何にと云ふに同章に

下等中學科

一國語　二數學　三習字　四地學　五史學　六外國語學　七理學　八畫學　九古言學　十幾何學　十一記簿學　十二博物學　十三化學　十四修身學　十五測量學　十六奏學當分缺

上等中學科

一國語　二數學　三習字　四外國語學　五理學　六罫畫　七古言學　八幾何學　九記簿　十化學　十一修身　十二測量　十三經濟　十四重學　十五動、植、地質礦山學

故に初等上等を通じて學ぶものは數學（算術？）習字、國語、外國語、記簿、修身、測量、等にして下等中學は十四より十六迄上等中學は十七より十九迄とあれば兩者を通じて六年の割なり此六年間如何なる時間割にて如何なる程度迄に教授せしや解し難けれど兎角記簿の如き簡單なる技術を初等上等兩科に通じて設け且つ算術をも兩科にて學ばしむるを見ても其不完全なるは知るべし加之體育上必要なる體操の科なきは甚だ惜むべしとす維新以后學を督する者急劇に書生の精神を

使用して毫も健康に注意せざりし爲め大に肺病患者の數を增加せしめたるは掩ふべからざるの事實なるが如し統計上の比例は知らねども今の書生と十年以前の書生と比較せば當今の方必ず丈夫なるべし無論創立の際は鋭意學問の普及を力めて其他を顧みず其弊拯ふべからざるに至つて始めて氣がつく者なればあながち當時の立案者を尤むべきにあらず手始めの課目表としては隨分出來のよき方ならん但し一週の授業時間及び各科目の程度を知る能はざるは殘念の至りなれども此課目は只に表面上の發布にとゞまりて實際施行せられたりとも覺えず其證據には同學制第三十章に當今中學の書器未だ備はらず此際在來の書によりて之を教ふる者或は學業の順序を踏まずして洋語を教へ又は醫術を教る者通じて變則中學となすべしとあり又同三十一章に當今外國人を以て教師とする學校に於ては大學教科にあらざる以下は通じて之を中學と稱すとありて實際上文の課程を踏まざる書生も矢張り中學生徒たりしなり而して明治六年分の文部省年報を覽るに全國中中學の數僅かに廿にして其十七は私立にかゝり其三のみが公立なれば上の規則を履行せる學校は全國中三所に過ぎずと云ふも不可なきが如し然れども學制頒布以來中學の數は漸く增加し明治七年には三十二となり八年には百十六となり九年には二百一となれり尤も此二百一の內公立は十八にて又其中の八十三は東京にあれば不規則千萬なる私立中學ですら地方には皆無の姿なりしなり明治十年に至つて校數の增加殆んど二倍し公私合して三百八十九となる又私立中學生徒の數男女を合

して千七百人の上に上れり是れ高等の普通科を修めんと希望するもの增加せしにも係はらず公立の學校は卅一に過ぎざりしかば餘儀なく私立中學の生徒となるに至れるなり當時公立中學の年期は便宜に任せて一定せず或は五年或は四年最も短かきは二年半なり學科も所により異同なきにあらねど大抵は左の如し

習字、文法、畫學、語學、外國語學、地理、歷史、數學（算術の事？）、代數、幾何、物理、化學、星學、地質、博物、生理、農業、重學、商業、記簿、統計、心理、修身、經濟法律、體操

之を明治五年の科程表と比較するときは表面上は大に高尙に赴けりと云ふべし且つ體操の一科を加へたるは教育上の一大進步と言はざるべからず但し私立は各自撰定の教則を用ひ一に地方官の認可に任せしを以て定めて不都合のものも多かりしならん、かく諸中學の教則公私の差に因つて非常の徑庭ありしは時勢の已を得ざる所とは言ひながら一は中學を以て大學の豫備と認めず單に高等の普通科を修めしむる積りなりしかば大學の程度に應じて是に入學すべき一定の下地を作る事を務めざりしに外ならず當今高等中學と尋常中學の聯絡全からざるは既に此時に胚胎するものなり（現に東京府の中學校抔にては正則變則の二科ありて正則は邦語にて普通科を教授し變則は大學豫備門に入る便宜の爲め其楷梯（原）を教授せり）

明治十二年教育令を發し其第四條に於て中學校の資格を定め次で十四年に至り中學校則の大綱を頒布す大綱は十三條よりなり中學沿革史上頗る緊要の者なれば之を左に掲載せんとす

第一條　中學校ハ高等ノ普通學科ヲ授クル所ニシテ中人以上ノ業務ニ就カンガ爲メ又ハ高等ノ學校ニ入ルガ爲メ必須ノ學科ヲ授クル所トス（中學教育の目的に二ある事は全く此時より生ずといふべし）

第二條　中學校ヲ分ツテ初等高等ノ二等トス

第三條　初等中學校ハ修身、和漢文、英語、算術、代數、幾何、地理、歴史、生理、動物、植物、物理、化學、經濟、記簿、習字、圖畫及ビ唱歌體操トス　但シ唱歌ハ教授法整フヲ待ツテ之ヲ設クベシ

第四條　高等中學科ハ初等中學科ノ修身、和漢文、英語、記簿、圖畫、體操ノ續、三角法、金石、本邦法令ヲ加ヘ又更ニ物理化學ヲ授クル者トス

第五條　中學校ニ於テハ土地ノ情況ニ因リ高等中學科ノ外若クハ高等中學科ヲ置カズ普通文科、普通理科ヲ置キ又農業、工業、商業等ノ專修科ヲ置クコトヲ得

第六條　普通文科ハ高等中學科中ノ三角法、金石、物理、化學、圖畫等ノ某科ヲ除キ或ハ其程度ヲ減ジ修身、和漢文、英語、本邦法令等ノ某科ヲ增シ又歴史、經濟、論理、心理等ノ某科

ヲ加フル者トス

第七條　初等中學科卒業ノ者ハ高等中學科ハ勿論普通文科、普通理科其他師範學科諸專門ノ學科ヲ修ムルヲ得ベシ

第八條

第九條　高等中學科卒業ノ者ハ大學科、高等專門學科等ヲ修ムルヲ得ベシ但大學科ヲ修メントスル者ハ當分ノ内尚必須ノ外國語學ヲ修メンコトヲ要ス

第十條　初等中學科ヲ修メントスル生徒ハ小學中學科卒業以上ノ學力アルモノトス

第十一條　中學校ノ修業年限ハ初等ヲ四年トシ高等ヲ二年トシ通ジテ六年トス　但此修業年限ヲ伸縮シ得ベシト雖ドモ一年ヲ過グベカラズ

第十二條　中學校ニ於テハ一年三十二週以上授業ス

第十三條　中學校授業ノ時間ハ初等科ハ一週廿八時間高等科ハ一週廿六時間ヲ以テ度トス但此時間ヲ伸縮スルヲ得ベシト雖一週二十二時ヲ下ルベカラズ

先づ此教則を明治五年の中學制と比較し何れの點に於て改良せしやを考ふる事必要なり

第一の差は此教則にて中學大學の聯絡をつけたる事なり卽ち中學を卒業したる者は豫備門に入り專修科を經て直ちに大學に入るを得るの制規にて明治五年の學制には頓とかゝる注意はなかり

しなり

第二　高等中學科の外若しくは高等中學科を置かずして普通文化、普通理科或は農業、工業、商業等の專修科を置く事を得るの制規を設けたるは現今の高等中學本科に一部二部三部の別を立てゝ普通科の中にても稍高尙なる學科を敎ると同一の制度にて當時旣に現制の種子を卸したりと云ふべし然るに明治五年の學制に在つては唯各種の實業學校を以て中學に隷屬せしめたるに過ぎざるのみ

第三　修業の年期は兩制共六年なれども只前者は上下二等を三年宛に分ち後者は初等科を四年高等科を二年に分ちたるの差あり

第四　學科の差を表にて比較すれば左の如し

	下等科	初等科
國語	國語	和漢文
數學	算術 幾何 測量	算術 代數 幾何
習字	習字	習字
地理	地學	地理
歷史	史學	歷史
外國語	外國語	英語
科學	物理 化學	物理 化學 經濟 生理
畫學	畫學	圖畫
記簿	記簿	記簿
博物	博物	動物 植物
修身	修身	修身
唱歌	奏樂	唱歌
	古言學	體操

	上等科	高等科
國語	國語	和漢文
數學	算術 幾何 代數 測量	三角法
習字	習字	○
外國語	外國語	英語
科學	經濟 理學 重學 地質礦物學	物理 化學
畫學	畫	圖畫
記簿	記簿	記簿
修身	修身	修身
博物	動物 植物	○
法律	○	本邦法令
古言學	古言學	○

○標は一方に存して一方に存せざる者を示す但中學全體に通じて考ふるときは明治五年の制に存して十四年制になき科目を重學、地質礦物、測量及び古言學の五とし又十四年制に存して五年になきものを生理、三角術、本邦法令及び體操の四科とす但し重學、測量の如きは普通科に必須なる課にあらざれば之を省きたるはよけれど地質礦物は何故に取り除きしや之を解すべからず但し上表は單簡に過ぎて各科目の時間及び委細の題目は知るに由なけれども表面上は左したる變化なきが如し然れども明治五年の學令は單に虛文に過ぎざりしを此時に至つて始めて實行に着手せる故此學制は敎育上に大影響ありと知るべし

其影響果して如何にと云ふに

第一　此教則にて中學の資格を確定したる爲め從來不則律なる私立學校は頓に減少し之と同時に公共學校は漸次增加せり明治十三年の統計を覽るに中學校の數百八十七にて其中公立百三十七此を前年に比すれば公立は卅を增し私立は六百廿七を減ず（明かに明治十二年發布の教育令第四條の結果と見るを得べし）

第二　高等中學科卒業のものも初等中學科卒業のものも等しく大學豫備門に入り夫より大學に入るの制を定めしより生徒は初等科を卒業するや否や直ちに去つて豫備門に來學し爲めに高等中學課は一向振作の機に會せず是は無理ならぬ譯にて將來大學にでも入りて一修業せんとする程の者は一日も早く都下に遊學し完全なる學校に入り又高等なる教師の薫陶を受けんと願ふべければ高等中學科に入りて而る後東京に來るの癖を學ぶものなく遂に此設立をして空しく自滅に歸せしむるに至りぬ

第三　當時各府縣中學校維持の狀を通觀するに其大約は府縣會又は區町村會の供資に賴るを以て其議場の狀況により動もすれば學校の規模を縮少し經費を抑損する事ありかゝる故に地方により同じ中學校に高下の程度を生じ或る者は餘程發達せるにも關せず或る者は餘程下等の地位を占むるに至れり（現時地方の尋常中學より高等中學に生徒を送るに或る中學は特

待を得て其卒業生を頗る上級に編入する事を得又或る中學は假令校長の證明書あるも其卒業生をして左程の高級に編入せしむる事能はざるは大に此事情の影響に原く所ありといふべし）

兎に角此教則にて漸次改良の緒に就き府縣立は着々大綱に準じて改正し教員には大學の出身者又は中學師範學科卒業生を聘するに至れり（但し町村立のものは經費乏しくして大概は不完全に又初等科のみにて高等科の設けなく或は間々舊則に據るものもありしと知るべし）

明治十七年に至り又中學校通則なるものを頒布して中學の資格益嚴重となる此通則は敢て從來の課程を變更せずと雖ども其改良の點を擧ぐれば第一教員の資格第二圖書器械の備具第三教場の建築にありとす

通則第四條に曰く中學校ハ教員少クトモ三人ハ中學師範學科ノ卒業證書又ハ大學科ノ卒業證書ヲ有スル者ヲ以テ之ニ充ツベキモノトス（但シ本文ノ證書ヲ有セズト雖ドモ府知事縣令ニ於テ相當ノ資格アリト認ムル者ハ文部卿ノ許可ヲ經テ之ニ代フルコトヲ得且高等中學科ヲ置カズシテ農業、工業、商業等ノ專修科ヲ置キ又ハ初等中學科ノミヲ置クモノハ文部卿ノ許可ヲ經テ本文ノ制限ヲ斟酌スルヲ得）とありて多少教員の資格に制限を立てたるものなり又第五條に中學校ハ修身其他諸科ノ教授上必須ノ圖書及博物、物理、化學等ノ器械、標本類ヲ備フベキモノトスとあるは明かに器具書籍の點に於て完美を求めたるものなり次に第六條に中學校ハ生徒ヲ教授スルニ足ル

ベキ教場、物理、化學等ノ試驗室體操場及ビ生徒ノ控所職員詰所等ヲ設クベキ者トスとあるは其建築上に注意を加へたるものにして之が爲め經費に乏しく右の資格に應ずる能はざるものは自滅するに至るは必然の結果なり是は明治十七年の學校表を覽れば著るしく分る事にて町村費維持の中學は前年に比すれば三十七を減じて僅かに五十四となり又私立の如きに至つては全國中唯二所あるのみ

偖是等の中學生が如何なる有樣なるかを尋ぬるに初等科卒業後直ちに進んで高等科に入るものは十ノ一二に過ぎず餘は概ね都下に出で大學豫備門又は他の高等學校に入り若くは其豫備をなすが如く或は轉じて師範學校に入り若くは小學教員となる者あれども出でゝ實業につき中人以上の業務をとるものは甚だ少なしとす高等科の振はざるは明治十九年の卒業生僅かに廿三名なりしを以て之を知るべし（但し同年中學生徒の數總計壹萬四千〇八十四人となす）

斯く高等中學科はあれどもなきが如き有樣なる故文部省は茲に一策を案じ中學を分つて二個の特別なる學校となし之を名けて高等中學校及び尋常中學となし高等中學を卒業するものは豫備門抔に入らず直ちに大學々生となるの資格を與へ同時に大學豫備門を廢せり其實は豫備門を變じて第一高等中學となし東京外國語學校の佛獨兩學科及び東京法學校の豫科を轉屬せしめたるに過ぎず但し文部省の意は全國を五區に分ち一區毎に高等中學一個を置き其管轄區内の尋常中學卒業生

を入學せしむるにあり高等中學設置の地方は仙臺（第二）京都（第三）金澤（第四）熊本（第五）とす別に鹿兒島及び山口に私立高等中學を設くる事を準可す而して高等中學の目的は二個にして一は大學に入るの豫備をなし一は卒業後直ちに社會にて業務を執らんとするものゝ修學する所とす其詳細の變革は同年發布の中學校令に明かなるを以て之を左に掲ぐ

中學校令

第一條　中學校ハ實業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ學校ニ入ラント欲スル者ニ須要ナル教育ヲ爲ス所トス

第二條　中學校ヲ分ツテ高等尋常ノ二等トス高等中學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條　高等中學校ハ法科、醫科、工科、文科、理科、農科、商業等ノ分科ヲ設クルヲ得

第四條　高等中學校ハ全國ヲ五區ニ分畫シ每區ニ一箇所ヲ設置ス其區域ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第五條　高等中學校ノ經費ハ國庫ヨリ之ヲ支辨シ又ハ國庫ト該學校設置區域内ニ在ル府縣ノ地方稅トニヨリ之ヲ支辨スルコトアルベシ但此場合ニ於テハ其管理及經費分擔ノ方法等ハ別ニ之ヲ定ムベシ

（案ずるに明治廿一年八月文部省の布達に高等中學校費ヲ地方稅ニテ分擔スル儀ハ來ル

二十二年度以降當分之ヲ止ムル旨府縣知事ヘ訓令スとあれば現今は高等中學校費は全く國庫より支出するものなり）

第六條　尋常中學校ハ各府縣ニ於テ便宜之ヲ設置スルコトヲ得但其地方稅ノ支辨又ハ補助ニ係ル者ハ各府縣一所ニ限ル

第七條　中學校ノ學科及ビ其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニヨル

第八條　中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタル者ニ限ルベシ

第九條　尋常中學校ハ區町村費ヲ以テ設置スルコトヲ得ズ

又尋常中學校ノ課程ハ左ノ如シ

	第一年	第二年	第三年	第四年	第五年
倫理	一	一	一	一	一
國語漢文	五	五	五	三	二
第一外國語	六	六	七	五	五
第二外國語若クハ農業				四	三
地理	一	二	二	一	
歷史	一	一	二	一	二
數學	四	四	四	四	三
博物	一		二		三
物理化學	一			二	三
習字	二	一			
圖畫	二	二			
唱歌	二	二	二	二	一
體操	三	三	三	五	五

明治十九年大學豫備を廢して高等中學となすや各分科大學の初年を繰り下げ之に豫備門從來の修學年期四年を合し併せて五年となし之を分つて本科二年豫科三年の二となし本科を法醫工文理の五に分ち各科適宜の課程を設けしが明治廿一年に至り本科を一部（法文）二部（工理）三部（醫）の三となせしが翌年又不都合を感じたる爲め法文工理共各自特別の科目を修するに至れり是高等中學校設立以來現時に至る沿革の概略となす豫科は前に述べたる如く三年にして其學課に至つては表面上明治十九年の文部省令に從ひ尋常中學校の第三年級以上の學科及び程度と異なる所なければ省きつ只其間多少の變革なきにあらず明治廿二年に豫科二級の第二外國語を廢し第一外國語の時間を增し三級二級共に十時間となせるが如き又國語漢文の時間を增して三級には五時二級一級

には四時宛とせるが如し（前には三級に五時、二級に三時、一級に一時間なり）されど大體上別に大差なしといふも可ならんか、又本科現在の課程表及び從來科目の沿革もなきにあらねども之を述ぶるは餘り冗長にして反つて明瞭を缺くの恐れあるを以て之を略す（委細は高等中學一覽に詳なり）且つ前に述べたる高等中學の沿革は第一高等中學一覽に基づくに過ぎずと雖ども他地方の高等中學は固と文部省令に據るもの故其組織は第一と異なる所なしとす但第一及び山口高等中學を除きては豫科の下に補充科ありて豫科に入るべき生徒を二年間養成す

愚見によれば五個の高等中學を一時に日本に設立せるは大に不得策なりとす日本の教育はかく驚原山なる事業を爲すには機運未だ熟せざるものなり假令ひ教育の普及を計るを以て國家只一の長計となすも日本の經濟及び他の條件は未だ是等諸校の設立を許さざるが如く且同時に五個を起すの必要なきなり第一生徒の方より見るも實際高等中學に入る者は必ず大學に來るの有樣なり既に大學に來るものとすれば相當の資産あるものなり是等の輩其地方にて高等中學に入るも東京に來て東京の高等中學校に入るも別に經濟上の不都合を感ぜざるべし第二には一時に斯く幾個の學校を起す時は無論教育費を諸校に分散せざるを得ず從つて器械書籍等完全を望む事難し假令ひ是等の點に於て不都合なきにもせよ現時日本にて高等中學の教師に適したる人物を一時に招聘せん事甚だ困難なり是等の不都合を顧ずして設置したる暁に生

徒がなければ何の益にも立たぬなり然るに日本にて大學に入る學生は十ノ一にも足らぬ有樣なれば尋常中學を卒業して高等中學に入るものは矢張り十分の一に過ぎざるべし其少數の生徒を五個の高等中學二個の私立高等中學にて不完全に教育するは如何に考ふるも經濟上且訓練上の策を得たるものにあらず勿論文部省の意見は強ちに大學入校者を製造するにあらざれば學問の普及を計りて東京以外に高等中學を設くるは惡き事にあらざれど漸を以て改良せずして短兵急の策に出でたるは惜しむべき限りにこそ余が意見によれば東京に一高等中學を置き關西に一高等中學を設け（京都は不可なり風俗地位共に國家の支柱たるべき人物を養成するに適せず）東北の書生は皆東京に聚まり西南の學士は皆關西に集まる樣にしたらば善かりしならんと考ふ斯くする事數年の後高等なる普通科を修めんと欲するもの多くなりて迚も二個の高等中學では間に合はず且つ相應なる教員のあきが出來たる時に始めてぽつ〳〵他の高等中學を作るべきなり當時の文部大臣が尋常中學の程度を高むる方に盡力せずして徒らに高等中學校設置に配意し東京地方にて落第したる餘りの書生等を養成して得々たりしは余の解するに苦しむ所なり

右は不完全ながら明治以降今日に至る迄の中學校沿革梗概なり是より進んで少しく其改良策を述べんとす

第三編　中學改良策

第一　大中小學校の聯絡

高等中學はもと大學豫備門の變化したるものなり文部省令に從へば中學校は大學に入るの楷梯をも教へ又中人以上の業務を執るに必要なる高等普通學を授くる所なりと雖ども前に述べたるが如く現今の有樣にては高等中學を卒業して直ちに社會に出づる者とては少なく十の八九は皆大學に入るものゝみなれば專門なる大學豫備校と云ふも不可なしかく大學と高等中學は密接の關係を有するものから其程度學科も大學に準じて都合よき位の組織なりとす然るに尋常中學校は其設置高等中學に比すれば餘程古く且つ始めより高等中學に入るの生徒を養成するの目的にあらざりしを以て其程度に懸隔ありて尋常中學卒業生は直ちに高等中學に入學するを得ず不得已兩三年は豫科に止まつて修業せざるを得ず是青年子弟の爲に大に憂ふべき事とす翻つて小學及び中學の關係を見るに亦之に似たるものあり小學を卒業したりとて試驗を經ざれば中學に入る能はず然るに地方によりては高等小學卒業時期と尋常中學入學試驗期と落ち合ふを以て小學を卒業したる頃は既

に中學の試驗期は過ぎ去つて入學相當の學力あるものも見すゝ日月を浪費し少なくとも一年は無爲に經過せざるべからずたとへ東京の如く私立中學ありて公立中學と聯絡を有する所は此私立校より轉じて公立の相當級に編入するを得べしと雖ども兎かく妄りに學校を改むるは少年者教育の法を得たる者にあらず況して私立中學の設けなくして無爲に有爲の日月を消費せざる可らざるの地方に於ては父兄の配慮は格別なるべし加之地方によりては尋常中學と高等小學の懸隔甚しく假令ひ試驗の時日に右の不都合なきも實際及第し難き所あり是等の地方に生れたる少年は高等小學卒業後又一年許りを費やして漸く尋常中學に徙るを得るなり故に現今吾邦教育上の系統によれば大學と高等中學は聯絡よけれども高等中學と尋常中學は甚しき懸隔あり又尋常中學と高等小學も亦多少不都合の關係を有す是教育上の大缺點なれば是非共改良の法を案じて此阻礙を取り除けざるべからず學齡兒童先づ六歳より就學して八年を小學に費やすとすれば卒業は十四歳なり而して運よき者は直ちに中學校に入れども不幸なるものは十五歳又は十六歳に至らざれば尋常中學に入るを得ず此處にて五年を費やせば年齡早く既に廿歳前後となる是より都合好く行けば高等中學の豫科一級に入り惡ければ三級に入り五年乃至三年の日月を經過して始めて大學に入り又三年を費やして學士となる計算すれば學士となるには少なくとも廿六歳の順なり當今の如き粗末なる學士を製造するに日本の青年をして前後二十餘年を費やさしむ寔に浩嘆の至りなり且日本

人は西洋人に比すれば早く老い込む者故六十、七十に至つては元氣漸く沮喪して事業心に任せず去らば教育を受けたる人士が社會の上流に立て一と角の事をなすは僅々廿年許りに過ぎず夫も學士が完全なる立派なる人なればまだ好けれども只大學を卒業したと云ふのみにては事業をなすには經驗なく學者となるには知識足らず其下地の爲に少なくとも五六年を費やすとせば眞正なる有爲の時限は僅かに十四五年に過ぎず此多事の時に當つて吾人が國家民人に盡す義務頭割にすれば幾何もなし況んや大學出身の士は毎年通計三百人を出でず之を四千萬の人口に比較するに實に其僅少なるに驚かざるべからず學士の少なきは國庫財乏しくして貧生を補助する道なく人民又餘裕なくして子弟を大學に入るゝの策なきに因り其他惣じて吾邦の經濟之を許さゞるに基づくものなれば詮方なしと雖ども大中小學の連絡を圓滑にして一日も早く子弟の時間を徒費せしめざる事今日の急務と云ふべし

之を爲すに二法あり一は大學と高等中學の程度を引き下げて尋常中學と連續せしめ又尋常中學を引き下げて高等小學と聯絡せしむるにあり一は高等小學より尋常中學の程度を順繰りに繰り上げて高等中學の豫科を全廢し豫定の如く廿四歳にして大學を卒業するの組織となすにあり前者は行ひ易けれども教育上損あり後者は行ひ難けれど國の爲に利あり難くして國家の爲に利ある後策を採るに若かず然らば此繰り上げ策の方法如何にと云ふに課程表より云へば高等小學を卒業したるものは直ちに尋常中學に入り尋常中學を卒業したるものは直ちに高等中學本科に入學するを得るの組織なるに實際左様に行かぬは教授の不完全なる爲と言はざるべからず教授の不完全なるは教師其責に任ぜざるべからず方今中學校改良案中第一着に手を下すべきは教〔師〕の淘汰選擇是なり

第二　教師の改良

教員の資格、　當今尋常中學校の教師には何處にて修業したるや性の知れぬ者多く僅かの學士及び高等師範學校卒業生を除けば餘は學識淺薄なる流浪者多し是等の輩に托するに後來日本元氣の中心ともなるべき少年を以てするは害あつて益なし假令ひ益あるも五年の稽古は十年にして漸くなり十年の業は十五年にして始めて成就せん加之學士にして中等教員たるものは學あれども教授法に稽はず高等師範學校卒業生は授業法には精しけれども學識に乏し元來學士及び此種の卒業生は實に僅々に過ぎずして其僅々たる者亦完全の良教師といふべからず今日の急務は可成理科文科出身の學士をして少なくとも半年間教授及び訓練の方法を講究せしめたる上又半年間實地見習ひとして地方の中學校に準教師となり然る後之を中學教員に採用するか或は高等師範學校の程度を高めて充分學識ある卒業生を養成し之に中學教育の事を托すべし明治廿三年の統計を覽るに公

立中學の數四十四にして教員の數五百八十人なり故に一校につき殆んど十四人程の割なりとす之を生徒の數に配すれば一人の教師が十六人の生徒を養成する勘定なり今文科理科大學の卒業生及び高等師範學校の卒業生中後來中學校の教師たるもの年々平均四十人と見積れば十年にして四百人を得べし今生徒の數を壹萬人と豫定すれば一人の教師が廿五人の生徒を受持つ割なり去れば若し此方にして行はれんか十年にして全國の中學に良教師を得て性の知れぬ曖昧者を教育場裏より驅逐するを得べし是は百難を排しても實行すべき事と思はる余が目擊せる或る地方の英語教授法の如きは實に驚くべき有樣にて之が教師たるものは單に胡魔化しを事とし生徒も亦之を鎗込る事のみを考へ居るが如し殊に目立ちて見ゆるは讀方の亂暴なる事にてかゝる有樣ならんには到底何年間英語を修業するも成熟の見込なしと思へり勿論外國語を教ふるは易きが如くにして至極六づかしきには相違なけれど若し中學を以て大學の豫備となし大學の下地を作る目的を兼有するものとせば外國語の知識は非常に必要故餘程良き教師を選んで之に教授を囑托せざるべからず若し現時の如き外國語の教育を受けたる中學生が將來高等中學の本科に入り二年にして大學に來るとせば學問の蘊奥を究むるに必要なる外國語の不出來なる爲め當人は無論苦痛を感ずべく從つて大學卒業生の價値を下落せしむる事必定なり

教員道德上の資格、　次に憂ふべきは教員道德上の資格なりとす其缺點に二種あり第一には個

人として道德高からざる事第二には中學教員として德義完からざる事なり第一の缺點は特に中學教員のみに向つて責むべからず滿天下の人皆其責を負はざる可らざれど殊に少年を支配する任に當る身に取つては道德は知識よりも遙かに尊きものなれば是非共此點を考察せざるべからず元來吾々當時の青年は破壞時代に生れたる上好加減の教育を生嚙みにして只今迄經歷したる者共なれば智育德育共に充分ならず殊に德育抔といふ事は近來始めて八釜敷なりたるに過ぎざれば今迄校課の授業上自己の德性を發揮したりと思ふ事なし只幸ひにして封建の餘習を受け貳三冊の漢書を讀みたると又智育上より得たる結果とを利用して己れの道德となすに過ぎず故に之を幕府時代の士氣と比較するときは堅軟剛柔の度に於て甚しき相違を見るべし而して當時中學の教授を掌どる者は大概吾人と同樣なる教育を受けたる輩なれば節操の堅固ならず志氣の高尚ならざるものも甚だ多からん是尤も匡さゞる可らざるの缺點とす苟もかゝる人間を師長とする以上は之が業を受くる者にして若し見識あらんには頭から其教師を輕蔑し又見識なきものは何時しか其氣風に感染し何れにしても美しき結果は望むべからず教育の大任を負ふからには能々茲に注意して自ら率ふるに高尚なる德行を以てし以て衆生の模範たらざるべからず大學の教授及び高等師範學校の教授等は深く茲に鑑みて道德高き教員を製出する事に盡力すべし又第二の缺點を言へば今の中學教師たるものは大抵自ら好んで其職に就きたるにあらず糊口に差し支へたる溢れ者か左なくば一時の足

掛臺として少らく茲に腰を据ゆるに過ぎず學識狹薄なる無能漢すら亦教員を以て高尚なる職業と思はず況んや大學を卒業して學士の肩書を有する者をや彼等が一日も早く好地位を得て他に轉職せんと企つるは珍らしからぬ事なり教師既に安んじて其職に居らず授業の親切なるを望むも得べからざるなり生徒の利害を考へん事を求むるも得べからざるなりかゝる次第なれば學識あるものも其全力を擧げて其校の爲に盡さんとはせず大概は其職に居りながら其任を重ぜず實に不都合の至りといふべし今之を改良せんには不德の人を變じて有德の君子となすか輕薄の黠兒を逐ふて着實の大人を迎ふるにあり此二策を實行せんには金額を愛惜せずして中學の用度を辨ずるにあり方今高等中學は國庫の支辨を受く而して國會之を削減せんとし尋常中學校は地方稅之を維持す而して府縣會之を縮小せんとす之を削減し之を縮小すると同時に其影響は忽ち教師の財布に響いて時ならぬ不都合を感ず中學の教師たるものは假令ひ其職を盡すも又其職を盡さゞるも兩つながら危き地位に立つ者なり危き地位を去りたきは人情なり既に之を去らんとせば身は現在の職に在るも心は常に未來の好位にあり之を如何んぞ生徒に不親切にして教授に不熱心ならざらん明治廿三年尋常中學の歲費は廿九萬七千四百五十八圓許なり之を校數四十四にて除すれば一校の經費は六千七百六十三圓なり其内半分を學校維持費とし殘りを教師の年俸として之を算するときは一人前殆んど三百圓の割なり貴重なる中學教員に僅三百圓位の年給を與へ而も除さへあらば之を削減せん

としながら其學問の淺薄其德行の不修且其教務の擧らざるを責む實に無理なりといふべし能ある者爭でか甘んじて此微祿を屑しとせん學あるもの焉んぞ聘に應じて其力を教育に致さん日本の教育の爲めに計るに一方にては教員の資格を嚴にして無賴の徒を退去せしめ一方にては之が俸給を增加して且つ終身官たらしめ安んじて力を教育に盡さしむべし若し金額の出處なしといはば改良の策なしといはんのみ今のまゝにて進行し無能大言の輩天下に充滿し輕卒無賴の徒日本の中等社會を組織し天下の萬事休むに至つて始めて教育改良に着手すべし夫れ人間を造るは飴細工にて人形を造るよりも六づかし、六づかしきが故に費用も之に順じて嵩むなり、父母子を生む、生れたる子は人間にあらずして人形なり四肢を搖かし頭顱を肩上に据ゆるも教育を受ざる内は完全なる人間の名を下し難し軍艦も作れ鐵道も作れ何も作れ彼も作れと說きながら未來國家の支柱たるべき人間の製造に至つては毫も心をとゞめず徒らに因循姑媳(原)の策に安んじて一錢の費用だも給せざらんとす是等の輩眞に吝嗇の極なり

教師に對する改良案は大抵右の如し是より生徒に關する改良案を述べんとす

第三　生徒の改良

生徒德育の改良、　方今の少年子弟を見て驚くは其德義心に乏しき事なり余は現に或る地方に

遊んで其所の少年氣風卑野なるを見始めて大學の有り難さを知れりそれ迄は大學の學生を以て半分以上箸にも棒にもかゝらぬいたづら者とのみ思ひしが世の中にはまだ〳〵甚しき難物あるを見出し大に教育の大切なるを覺れり尤も余輩時代の書生は幾分か漢學を專修したるもの故知らず知らずの間に支那風又は武士風の氣象が少しは殘れども現今の中學生徒抔は其教育系統の情況にて所謂漢書講讀時期なるものを有せざるが如し從つて德義上の根本は甚だ覺束なからんと推察せらる吾輩時代すら既に道德壞亂の萌芽を發生せる位なるに今後の少年が一層甚しくなりては日本の運命も其限りなり人間といふものはたとひ一定の主義ありて守る所ありてすら時には一朝の感情に支配せられて圖らざる過ちをなす位なるに無主義無作法の連中が勝手次第の我儘を仕盡したらんには實に寒心すべき禍害を釀すに至るべし先年木下廣次氏始めて第一高等中學教頭となりし時生徒を聚めて一場の演舌に其風儀の亂れたるを慨し諸君が教師を尊敬するは眞に教師を尊敬するにあらずして點數の爲に之を尊敬するに過ぎずと云はれたるは生徒の惡風を穿てるの言なり例を擧ぐれば數々あれど其中にも尤も著るしかりしは佐々木政吉氏生徒の爲めに冷水浴の功能を述べたしとて態々生徒を集めて親切に演舌せら〔れ〕し事あり元來なれば醫學博士とも言はるべき人が吾輩書生の健康を氣遣ひ餘計な時間を潰しての演舌なれば謹んで聽聞する筈なるに其時多數の生徒は聲を揚げて教授の吶辯を嗤笑せり是は實に心ある人をして嘔吐をも催さしむべき非禮の振舞

にて第一高等中學の生徒にあるまじき淺墓なる者どもかなと思へりかゝる生徒が大學に入ればこそ喫烟室の設けあるにも係らず妄りに廊下にて烟草を燻らし或は木履のまゝ教場に闖入し吾は學校の規則を犯す丈の勇氣ありと云はぬ許りの得色あるに至るなり堂々たる大學の學生も素が素なれば其粗野なる事斯の如し見識の高きはよけれど見識が高ければとて不禮の振舞をなして揚々たるは片腹痛し小人を見て之を賤しむは好し之に接する時は矢張り人間に對するの禮なかるべからず無理なる校則は廢すべし之を犯すは不可なり況んや長者に對してをや遵ふべきの教則に於てをやかほどの事に氣のつかぬ學士の出來するは矢張り中學の教育其當を得ざるが爲のみ第一高等中學の生徒は風儀が惡けれど見識あり(少なくとも余が居りし頃は)地方の尋常中學抔にては見識もなき癖に一層生意氣なる處もある樣なり現に余が旅行せる某地の如きは其適例にて其生徒は只教師を意地め困らせるを考ふるの外他に一個の美德を有せずと云ふも可なり但し是等の弊は良教師を得ると同時に漸々消滅するものなれど左に聊か匡濟の方法を述んとす

一　年輩德識共に高き人を聘して每週一回倫理上の講筵を開く事

(a)　此講筵に於て講師は主として愛國主義を說き次に吾邦の他邦と異なる國體を審になし次に師弟長幼朋友等各人相互の關係に及ぶべし

(b)　尤も尋常中學に在つては多く東西古人の言行を引證して感情的に生徒を動かすべし、

高等中學に在ては右の諸條を貫くに一線の元理を以てし可成生徒の智性に訴へて之を實行する様にすべし（余が高等中學にありし頃此法行はれ今に至つても猶存するが如し然し當時の講師は徒らに經中の一言を敷衍して獨斷的の結論をなし知識の發達せる高等中學生には何等の效驗もなかりしやに覺ゆ他人は知らず余は德性上一の啓發を受けたる事なし是全く講師其人を得ざるが爲といはざるべからず當今此任に當るものは全國中にも甚だ稀なるべけれども可成碩學高德の人に依賴せば告朔の餼羊に優る事遠し）

(c) 校長職員等は此講師に對し尊敬を加へ生徒をして可成其言辭に耳を傾くる様に注意すべし

(d) 講師出入の際は嚴肅を守り愼んで喧擾を避くべし且つ受持時間なき教師は必ず出席して之を聽聞すべし（是も高等中學にて行ひし法にて幾分か形體上の規律を正ふするの功ありと信ず）

(e) 講堂は清潔にするは勿論其粧飾も可成壯嚴を保ち之に入るときは恭愼の情油然として發するが如くならしむべし（壁間に古人の言を鐫し案上に聖賢の像を安置する抔妙なり畫もよけれど拙劣なるときは紙鳶屋の招牌の如き感を起して切角の注意を無にするなり）

一 漢文國語及び日本支那歴史は日本人の道德を堅固にするに必要なれば教師は其邊に注意して授業の際其科目の智識を擴ぐると同時に生徒の道德心を鼓舞する様注意し兼て興味を加へて生徒に自修の念を起さしむべし

憾む所のものは日本に國民を代表すべき程の文學なきにあれど或る點に於ては却つて西洋の文字よりも人間を高尚優美にする者なきにあらず且つ俳諧の如き日本只一の文字にして而も平民的の文學なれば是非共生徒をして其一斑を窺はしむべし其調は和歌より平易にして其意は和歌よりも廣く且つ高し

一 教師授業の際は勿論平生と雖ども言行を愼しみ自重の風を示すべし且つ教場内にあつて氣の付きたる事は親切に忠告すべし我は學問の教師なり道德は我が關する所にあらずと澄して居るべからず然るにこゝに注意せざるは或は自ら疚しき所あるか又性來不親切千萬なる人なりかゝる教師は一日も早く其職を免ずべし

（今より考ふればわが高等中學に居りし頃は隨分よろしからぬ不作法の振舞もありたる様なれども一人も之を譴責したる教師はなし但一遍教場にて欠伸をしたる時大森俊次氏に叱られたる事あるのみ夫れ教師を輕蔑するものは教師より見識あるものなり又教師を尊敬するものは萬事教師に矜式するものなり教師より見識ある程のものならば醇々として己れの失行を責められたらんには何とて反省する事のあらざるべき又教師に矜式するものゝ如きは一言にて

も教師の言を容るべし右何れよりいふも教師が生徒の品行に無頓着なるはよろしからず)

一　一級又は一年を通じて茶話會を組織し講學の餘相會して互に所思を述べ以て名節を砥勵(原)するの具とすべし但し注意して才辯を弄するの討論會となり又は健啖を旨とする飲食會に化せざる樣にすべし

此會には教員も可成出席し談笑の際自然と生徒を善に誘導すべしかくするときは教場内にて知りにくき生徒の性質及び其意思のある所を審かにするを得て授業上甚だ便利なるのみならず互に親愛の念を生じて生徒は教師を慕ひ教師は生徒の爲を計るに至るべし

毎年一回或は二回此小茶話會の大會を開き全校一致の實を擧ぐべし各小會をして互に相競いて德義を研究せしむべし但し教師は注意して其間に葛藤の生ぜざる樣又上級生の下級生に對して誘掖の勞をとる樣に導くべし

一　教場は必ず一級に一室を與ふべし教師に一室を與へて生徒をして順次轉席せしむるときは同級の生徒互に相親交するの機を失して何事も和合しがたく且つ同輩の善に倣ひ又其惡を正すの途を茅塞するの恐れあり

(是は余が高等中學より大學に徙りて大に感じたる事なり大學に在つては恰も野蠻人が水草を逐ふて轉居するが如く常に教師の跡を慕ふて轉室する故交友の間自ら冷淡に流れ易し高等

中學にありし頃は己れの室は己れの家の如く同級生は恰も一家族の如き思ひありしなり是は余が親しく經驗する所なれば教育者はよろしく注意ありたきものなり)

智育上の改良

(一)　屢ば述べたるが如く高等中學は實際大學の豫備校なればしばらくおき尋常中學に至つては明かに二種の人物を養成するものなり卽ち文部省令に云へるが如く一は普通教育を受けたる中人以上の業務を執る者を製造し一は將來高等の學科を修むべきものゝ下地を造る此二種の目的を兼有するが爲め學科上大に不都合を感ずるに至る將來大學にでも入らんとするものは是非共力を外國語及び數學に用ひざるべからず又かゝる遠大の目的なきものか、あれども修業しがたきものは以上の科目に左迄力を用ふるに及ばず從つて教授上少しは斟酌せざるを得ず然るに今の組織は兩者に對し毫も區別する所なし此點に就ては教育者中種々議論のある話にて或は中學教育の方針を中途より分岐し將來高等中學に入るものと實業につくものとを區別すべしと云ひ(明治廿二年十一月發兌大日本教育會雜誌阪本龍氏論文參照)或は地方の情勢により斷然孰れか其一を擇んで實業學校にするか又は高等中學豫備校にすべしといひ(同年十二月同雜誌和田豐氏論文參照)未だ何とも方付かざれども早晩何とか處置せざればある生徒は他の生徒の犧牲に供せらるゝに至るべし管見によれば今の尋常中學の下三年は一樣に之を教授し四年目より實業的と豫備的の二に分ちた

らば如何ならんと思はる但し豫備的のものは從來の學科を用ひて不都合なかるべく實業的の課目は經驗なき余の妄撰するを欲せざる所なれども英語とか數學とかの時間を減少して必用の課目を入れたらばよからん

(二) 外國語の教授には尤も意を用ひざるべからず元來西洋諸國は同一の宗教を有し同一の衣食同一の風俗を保ち其國語の組織も大抵似よりたる故己れの國語より他の國語に移るは東京人が薩摩語を修するよりも容易なる事なれど日本と西洋とは風俗習慣より其言語の構造に至つて截然として別物なる故吾人が西洋語を學ぶには非常の困難を感ずるなり然るに此外國語の智識は學問を修するに當つて只一の器械なれば是非共是に通曉せざるべからず從つて西洋人の力を用ふるに及ばざる點に於て人の知らぬ困難を犯し又馬鹿〳〵しと思ふ程の時間を費やすの已を得ざるに至る現に大學の文科などにても羅甸語の爲め獨逸語の爲め或は佛語の爲めに大切の時間を奪はれ專心其專門を修むる能はざるの憾ある位なれば中學校抔にて當の目的に緣なき語學の爲に苦しめらるるは仕方なき次第なり去りながら只仕方なしと許りにて一向之に頓着せざるときは其困難何れの日にか除去するを得ん力を教育に用ふるものはよろしく此點に注意すべきなり先づ是を改良するに二法あり一は良教師を得る事二は其教授法を改むる事なり教師を得るの法は前篇教師の資格と云へる處にて既に之を述べしが如く文科大學卒業生か(純正文學專門のもの尤もよし)或は今の高

等師範學校生徒の外國語の智識を一層高めたる上之を中學に赴任せしむべし尤も外國語の六づかしきは前に述べたる通りなればかくの如く格別の目的を以て製造したる教師と雖ども決して完全の良教師と云ふべからず現に吾知友中英語を正しく發音し得るもの甚だ寡なし余の如きは英文學を以て專門となすものながら將來英語の教師たるに適せる學力なきは常に慨嘆する所なりこは無論吾才識の陋劣なるにもよるべけれども一は外國語の非常に困難なるを證するに足るべし故に假令ひ余が注文通りの教師を中學に派遣するも充分なる教授は覺束なけれども是を現時の亂暴なる先生方に比すれば其優れる事幾倍なるや知るべからず漢學の日本に入るや久し其尤も盛なる時に於て猶且西土を壓倒するに足らず況んや歐語の吾朝に來る廿五年を出でず其造詣の差決して漢籍の比にあらざるに於てをや故に現今の教師に完全ならん事を望むは恰も赤子をして飛脚屋たらしめんとするが如し先づ〳〵前述位の改良にて當分は辛防すべし又所在の宣教師を聘して其地方中學の教師となし會話作文誦讀等の諸科を擔當せしむるも可ならん右等の諸科は到底日本人には充分の教授をなす事六づかしければなり就中作文の科の如きは本朝人の氣の付かぬ處に誤謬の存するものにて中々生徒の文章を改竄する抔といふ手際は望むべき事ならず是余が豫備門入校以來親しく經驗する所なれば是非共中學に一人位は洋人を傭ひおくべし學者でなくとも普通の讀み書きが出來て品行方正なるものならば差支へなかるべし明治廿三年の統計を覽るに全國中學の數四十

四にして外國人の教師たるもの廿八人あり故に今十六人を傭へば丁度一校に一人宛の割となる此位の改良は差したる困難にあらずと思はる

第二の改良案は授業法に關す之を數節に分ち左に愚見を述べんとす

(一) 用書の事、 用書は可成卑近のものを擇んで高尚に失せざる樣心掛くべし生徒といふものは隨分虚榮を喜び易き者故少しにても六づかしき書物に手を着けたがる故教師も不得已自己の力にてさへ覺束なき者を無理に講讀するに至る是目今私立學校の通弊なりとす官立學校にあつては此害稍少なしと雖ども之が教師たるものは常住生徒に此傾きあるを承知せざれば規則のみ立派にて實力は少しも進歩せざるべし

(a) 西洋と日本とは道德上の觀念非常の差あり假令語學の稽古なりとて日本從來の德義と衝突する樣な本を講讀して平氣なるときは生徒は何時しか書中の思想に感化せられ遂には日本人の胴に西洋人の首がつきたる如き化物を養成するに至るべし是は深く注意すべき事にて元來中學生徒などは外國語を修むるに當り此は向來高尚なる學問をなすの方便故不得已入らざる時間を捧げて之を修むる者ぞといふ事に氣がつかず只其課目時間の他よりも多きを見且世間にて洋語の持て囃さるゝを聞く故此課目自身がかく迄に大切なる者と心得果は書中に如何なる事柄あるも之を貴重するの念を起すに至るなり故に教科書は尤も選擇せざるべからず

余嘗てある私立學校に出席して英詩を講讀せしに詩中には日本人として云ふに忍びざるの言辭を翻譯せねばならぬ場合ありて獨り赤面せる事あり大體かゝる傾きを有する書は講ぜざるを可とす又正面より見れば道德上に益あるも或點に於て不都合の箇處あらば日本西洋風俗の差を指摘し生徒をしてかゝる思想に浸染せられざる樣心掛くべし是教師たるものゝ見識のある處なり

(b) 日本人は中年より西洋語を學ぶものなり西洋人は幼時より其國語を學ぶものなり故に人間發育の時期既に異なり去れば用書中にある事柄も夫に準じて異ならざるべからず「猿が手を持つ」抔といふ言は六歳前後の小兒には多少の興味あるにもせよ十四五歳の學童には面白き筈なく且つ人物養成の點に於て一毫の裨益なきなり故に中學にて用ふる讀本には可成注意して生徒の學齡に應じたる丈の道德的智識的に有益なる事柄を記載せるものを擇むべし若し適當の書籍なきときは本邦在留の外人に囑して之を作らしむべし尤も文部省にて出版せる讀本中洋語にて日本支那の事を綴れる者ある樣なれど語學なればとて只文字上の學のみならず其國語中に出て來る器物の名、人名、地名、家屋道路の景況等も知らざれば其國語より出來る丈の利益を收めたりと云ふべからず故に編中の事柄は西洋にして其思想は邦人の陋習を打破るか或は本來の美德を誘導するものを選ぶべし（自助論の如きは其適例なりとす）

(c) 方今の生徒が洋語を學ぶに當つて第一に不都合を感ずるは其教授組織の亂雜にして入らざる處に骨を折り費やさずとも濟む時間を費やさしむるにありわが高等中學にありし頃二三年間獨逸語を學びたりと雖ども何事も覺えたる事とてはなし大學に來りて始めて最初からやり返したるに過ぎず尤も是は余輩が不勉強なる事大原因なれども一は教へ方の苦しき許りにて少しも面白からざりしが爲のみ假令ひ余等が獨逸語に於る如き不都合なきにせよかゝる有樣にて今の少年が尋常中學にて五年間英語を修めたりとて其得る所果して幾何ぞや故に現今第一着手に改良すべきは外國語教授の系統を正ふして嚴重に之を生徒に課するにあり嚴重に之を課するは只教師の心得次第にて出來る事なれど如何にして教授上の系統を立るかと云ふに先づ日本語を洋語と比較對照し其似たる處と其異なる所を審にして文法兼會話書ともいふべき書物を作るにあり始めは極單簡なる文章より進んで稍高尙なる構造法に徒り之を終れば洋語の組織瞭然たるが如くにすべし（文部省は一日も早くかゝる書の編纂に從事すべし「コンフォート」の獨逸語案内は好例なり好材料なり）

(二) 譯讀法

(a) 譯讀は力めて直譯を避け意義をとる樣にすべし「ザツト」の「イツト」で押して行く時は讀のに骨が折れて時間上餘程の損害を招く

(b) 但し一字一字の譯は可成明瞭に說き明すべし初學者は常に一定の譯字を得ん事を願ふものなり是は不適當なる譯字にても之を聞くときは胸中に瞭然たる印象を生ずれども十數言を以て一字を說明するときは腦中混亂して其意義を捕捉し難きによる然れども一度び不適當の譯字を胸中に藏むるときは其害容易にぬけず故に廻りくどくとも長々しき說明をなしたる上若し會し難き場合あらば不穩にても譯字を用ふべし

(c) 熟字に遇ふ毎に之を書取り且つ諳誦せしむべし

(三) 讀方

(a) 讀方は譯讀を付けたる場所に限るべしかくすれば「リーデング」と共に意義を解する習慣を生じ後來涉獵の際其便鮮からず

(b) 上級にあつては未だ譯讀を濟さゞる場所にても容易なる部分は之を讀み翻譯の手數を費やさずして直ちに洋書を理解する力を養ふべし

(c) 教師は譯讀の濟んだる部を徐々と朗讀し生徒をして之を日本文に書き直さしむべし

(四) 作文

(a) 作文に先つて文法と書き取りに熟練せしむべし稍熟したる頃に毎時熟字十數を與へて之を暗記せしめ次回には其一を擇んで其作文中に插入せしむ但し作文は極めて簡單なるべし

(b) 教師は生徒をして順次黑板に其作文をかゝしめ全級の面前にて之を正すべし是全級生をして屢ば同一の誤りをなさしめざる好方便とす

(c) 漸々上達するに及んで問題を與へ短文を作らしむべし但し思想の順序を正ふすべし

(d) 時々譯讀書を朗讀し生徒をして其義を文章に綴らしむべし(洋語にて)、初めは既に譯讀を了へたる處を朗讀し後には未だ知らざる所を朗讀す

(e) 時々日本支那の文章を取り之を翻譯せしむべし

(三) 他の諸科學の教授に就ては可成教科書を用ふるを可とす毎時日課を與へて之を暗誦せしめ其餘りに諸書を參考して有益の「ヒント」を與ふべしかくすれば(一)生徒の記憶力を練習し(二)且試驗前になり急に勉强するの風を匡正するに足る

動植物等の教授は決して數級を合併せしむべからず是等の諸科は大概實地の標本を覽ざれば何の益にも立たぬ者なり余が高等中學に在りし頃植物學の教場にて顯微鏡を使用したる事あれども多人數の爲め遂に之を窺ひたることなし又地質礦物抔の教場にても混雜の餘り一回も標本を熟視せる事なかりしが故得る處は極めて少なかりし

生理抔は假令ひ教科書を用ふるとも可成文字の解釋に止まらぬ樣生徒の腑に落る樣教授すべし昔し尋常中學校にて生理の教授を受けし時は只日課を暗誦するのみにて字面を記憶せしと雖ども

實際身體の構造は茫乎たる處多かりしが如し

教科書は可成原書を用ふべし是は語學を上達せしむるの最方便なるのみならず科學上有益なる言語を覺えて將來の利益となる事多し加之大概の譯書は文字艱澁にして理義辨じがたき個所多きものなり

體育上の改良

(一) 今の體操は身體を練習するによきのみならず規律ある風習を養成するに必要なり且つ國家萬一の時に當り平素の訓練を應用するを得るが故可成嚴重に之を行ふべし(溫厚は美德なりといへども柔弱なるは甚だ害あり活潑は嘉みすべしと雖ども粗暴は甚だ賤むべし今の學校にて運動家と云はるゝ者多くは粗暴なり又遊び嫌ひは大概柔弱なり願くば心を體育に止むるもの生徒の活潑にして而も溫厚に粗暴柔弱の弊風に陷らざる樣注意あらん事を)

(二) 體操は一週數時に過ぎざれば之を以て身體は充分に發育せらるべきにあらず且つ鐵砲を取り扱ひて兵隊の如く規律に束縛せらるゝは當人の身にとりては餘り愉快を感ぜぬ故課業外に運動會を設けて興味ある遊戲に自然と身體を發育せしむべし擊劍、柔術、舟漕、「テニス」皆便宜に從つて之を設くべし但し運動會の主意は本と身體を練磨するにあれば此目的を忘れぬ樣にするが必要なり紳士貴女を招待して勝者に賞品を與ふるが如きは一方より見れば奬勵の具たるが如くなれ

ども一方より見れば勝を制して褒美を受る爲に運動會に入る抔といふ卑劣者を生ずるの恐れあり能々注〔意〕すべし

(三) 運動は極めて普通ならん事を要す之をして普及せしむるは教師卒先して生徒と共に遊戯を試むべしかゝれば一校擧つて運動好になり身體上精神上共に活潑なる結果を生ずべし且つ教師と生徒の間を圓滑ならしめ互の親密を増すに至る

右は中學に對する改良案と云ふものゝ中には單に教授上の意見にとゞまるものあり又は獨り中學のみに適用せずとも可なるものあり要するに思ひ付きたる事は大概書き連ねたる教育上の一意見書に過ぎざるなり

英國詩人の天地山川に對する觀念

本篇は稿者が去る一月文學談話會席上にて講述せる一場の談話に過ぎざれど、哲學會書記諸君の勸めに因り之を本紙に轉載する事とはなしぬ。大方の士其誤謬を指摘して稿者の蒙を啓かば幸甚。

單に英國詩人と云へばとて、上「アングロ、サクソン」時代より、下「ヴイクトリヤ」朝に至る迄、古今千有餘年の作家を網羅せんとの野心にあらず。かゝる大袈裟なる問題は頃刻の談話に述べ切れる譯のものにあらず。よし述べ切れたりとて、不才余の如きもの固より之を試むるの勇なし。茲に所謂英國詩人とは、十八世紀の末より十九世紀の始めへ掛けて、英國に現れ出でたる新詩人にして、夫の自然主義(naturalism)と申す運動を鼓舞せる面々を指す。偖此主義如何にして文界に出現し、如何にして發達し、如何にして變遷推移せしか。「クーパー」の自然主義は濁

世に身を處し難きが爲に起り、「ゴールドスミス」の自然主義は賦性の恬淡なるに基づき、「バーンス」の自然主義は天稟の至情に根し、「ウオーヅウオース」の自然主義は一隻の哲理的眼孔を具したるに因る。抔と云ふ事を不充分ながら、大雜ぱいに論じ去らんと欲す。是此問題の主眼なり。

然し「ナチユラリズム」卽ち自然主義。と許りにては一向説明にならざれば、本論に入るに先つて少しく其意義を確かめん。此熟字は申す迄もなく、「子ーチュアー」より來る。「子ーチュアー」之を翻譯して自然と云ひ、天然と云ひ、時に或は天地山川と訓ず。人工を藉らず有の儘に世界に存在する物か、さなくば其物の情況を指すの語なり。されば之を應用するの區域甚だ廣く、從つて此字より脫化し來りたる「ナチユラリズム」の範圍も餘程曖昧なり。先づ其限界より取り極めん。

自然主義の範圍如何に曖昧なればとて、固と是文學上の一現象なれば、文學其物よりも廣き事能はず。去らば其文學の範圍如何と云ふと、是も人々にて見解區々にて、現に其羅甸原語なる literatura (Posnett, Comparative Literature, Chap. I.) といふ文字すら、「タシタス」「クインチリアン」「シセロ」の諸家に因つて、各其用を異にする由なれば、方今所謂「リテラチュアー」なる語ばの定義判然たらざるも無理ならず。尤も當の問題に緣なき文學の解釋抔は、どうでもよ

き樣なれど、自然主義の範圍を定むるに當りて、文學てふ文字の限界を知るの必要ある故、あはれ其定義の一樣なれかしと思へど、かくの次第に已を得ず他の方法より文學の區域を定め、從つて其領内に生じたる自然主義の區域をも定めんと欲す。

文學上に出來する事件を極廣く見積れば、人間界の事か、非人間界の事に外ならず。(是は仔細らしく文學に就て申す迄もなく、凡て吾人思想の及ぶものは、皆此二者の内を出でざるは勿論ながら) 偖非人間界にあつて、尤も吾々の注意を惹くものは、日月なり星辰なり山河草木なり。去らば文學上に尤も重要なる材料を給するものは、人間と山川界なり。そこでかの自然と云ふ文字は、前に述べたる如く、一切萬物に適用すべき語ばながら、特に文學に於ては、其意義を縮めて人間の自然と山川の自然と限劃するも差し支へなからん。

斯く自然といふ字の範圍が粗定まる以上は、是より脫化し來る、自然主義なる語も其限界を定むる事容易にして、矢張り人間の天性に從ふものと、山川の自然に歸する者との二つと區別するを得べし。虛禮虛飾を棄て天賦の本性に從ふ、是自然主義なり。功利功名の念を抛つて丘壑の間に一生を送る、是亦自然主義なり。固より此兩者の間には密接の關係ありて、互に相待つて存在するの傾向なきにあらざれど、兎に角自然主義に兩樣の意義あるは、當時の作家を讀むものゝ疑を容れざるところなるべし。然し余が今日述べんと欲するは、此自然主義の兩面にあらず。單に

其一側より此詩人等の景物界に對する觀念如何を窺ひ、少しく杜撰の管見を陳じて高評を乞はんと欲す。日本人は山川崇拜と云ふべき國民故、此問題は多少吾々にとつて面白き筈なれど、校課多忙の際時に閑を偸んで稿を起したる者故、價値のなきは勿論、調べの行屆かざるより思はざる處に誤謬の存する事あらん。

自然主義の意味は大概前に述べたるが如し。又余の問題とする自然主義も大概說明したる積り故、是より如何にして此主義が文界に出現せるかを研究せんと欲す。之を說明するには先づ一歩を進て此主義の出現せる以前、英國の文壇は如何なる情況なりしかを察せざるべからず。(M. Pattison, Introductory Remarks on Pope's Poems (T. H. Ward, The English Poets, Vol. III, p. 58)) 千六百六十年王政古に復してより、千七百八十九年佛國改命の變あるに及んで、其間凡そ百餘年。當時の詩風を總稱して巧緻派といひ、其時期を呼んで古文時代といふ。凡て此間に行はれたる詩は、一種の性質を帶び、かの自然主義の詩風とは全然其趣を異にし、作家皆巧の一字を以て畢生の目的とせり、巧とは俗に所謂言ひ廻し方の上手なる意味にて、詩は只句を錬り字を鍛へ、經營刻苦して圓滑流暢に辭を遣へば、夫にて能事は畢る者と考へたる當時の詩人の了見にては、言語には調子あり、調子の善惡は文字の配合と順序より來る者なれば、百方苦心して音節の嚠喨なるを求めざる可らずと、遂には肝心の思想抔はそつち除けとなりて、別段深邃なる

にも及ばず、又斬新なるにも及ばず、其代り詩法はかく〳〵句法はかく〳〵と、命意の點を閑却すると同時に、遣辭の末に跼蹐として、捏造したる詩風如何と見てあれば、纖巧細膩の趣きあり て、典麗都雅の體を具へたりと雖ども、無限の感慨を有する者固よりなく、絕大の見識を表するもの亦固よりなく、天眞爛熳の氣象いつしか消滅して、殘れるものは彫蟲篆刻の餘技のみ。

かく當時の詩が、文句の上に拘泥して、煩屑なる詩法に束縛せられ、天然の趣味地を拂つて空しくなりたるは、全く當時の嗜好に因り、當時の嗜好は當時社會の風潮に本づく。當時社會の風潮は如何に。當時の文壇と共に繁文縟禮の府なり。例へば日本の封建時代の如く、何事によらず一定の儀式ありて、此儀式に通ぜざれば、社會の交際をなす能はざる如き風習なりしならん。此虛禮を以て充牣せる社會の中心は倫敦にて、當時文學の中心も亦倫敦なれば、詩文の俗界より一頭地を放出して、人性固有の情緒を發揮し、江山流水の美を咏出せん事、幾んど難し。加之當時は所謂文人庇保の時代にて、作者皆知己を有名なる政治家に求め、其助けを得て文事を碎礪するか、或は自ら政治家となりて、其下働きを爲す風なれば、文學は上流社會交際社會の專有物となりて、鉛槧に從事する者は、虛禮を重んずる風潮を迎へて、其嗜好に合する如き詩を作り、或は左程墮落せざるも、かゝる空氣を呼吸して、朝夕俗界中に沒了せらるゝ故、胸中一團の英氣は何時しか消えて、街頭の茶店は溪上の茅屋よりも貴く王侯の第宅は無限の江山よりも有り難き樣に

なるは、已を得ざる次第と云ふべし。(當時の文人が、甘んじて相門に拜趨し、王侯も亦喜んで墨客を優遇せるは、其例枚擧に遑まあらず。「ポープ」は「ボリンブローク」の朋友なり。「アヂソン」は「ゴドルフヒン」の知遇により、後に顯職に上り、「トムソン」は時の皇太子より百磅の年俸を受けし由。其他「ジョンソン」が「チエスターフヒールド」に與へたる書の如き、「クラツブ」が「シエルバーン」に上つて憐を乞へる文の如き、皆之を證明する者なり。尤も倫敦に住する文人は、皆王侯の殊遇を受けたるにあらず。「ジョンソン」の如き「ゴールドスミス」の如き、其他「グラツブ」街に籠城する一群の窮才士の如きに至つては、固より上等社會の交際ありしと云はず。然し貧乏すれば貧乏なりに俗氣を脱せず、酒肆一杯の飲遙かに江山千里の眺めに優る。彼徒の塵懷固より仙氣なきなり。)

當時「アン」后の朝にあつて、詩名一世を蔽ひ、永く文壇の牛耳を執つて、一世を代表せる者を「アレキサンダー、ポープ」とす。故に當時の操觚者が山川界に對して如何なる觀念を有せしかを觀るには、其頭梁たる「ポープ」の觀念を見るに若くなし。蓋し「ポープ」は山川を咏ぜざるに非ず。景物を敍せざるにあらず。然れども其尤も意を傾けたるは、交際界裏の光景なり。勃窣無味の議論なり。其傑作と云はるゝ人論、批評論及び竊鬢篇を見ても、其嗜好のあるところは大概察せらるべし。只其牧歌と「ウインドソー」林の二篇は、自然に關する作なれども、是とて

も天地の靈活なる景物に感觸して衷情を吐露したりとは思へず。且其思想に到つては固より斬新にして讀者を聳動するの點なし。「ポープ」自ら批評論中に宣言して曰く、

"True wit is nature to advantage dress'd;
What oft was thought, but ne'er so well express'd."

と。其意を詞藻の上に費やして、意匠の篤妙なるを願はざるや知るべきのみ。要するに其牧歌は郊外の牧歌にあらずして、舞臺の牧歌なり。篇中の牧童は淵花野草の間を徘徊せず。銀燭の下、繡屏の前、申し譯の爲め鬘を被りて羊飼の茶番をなすが如し。作者自ら牧歌論(Discourse on Pastoral)を草して篇首に掲ぐ。其窮屈なる、讀者をして妙に驚かしむ。其上日本人が讀んで一層面白くなきは、詩中に引き合に出さるゝ古名なり。例へば「ダフニス」とか「アレキシス」とか云ふ字を遠慮なく駢列し、東洋の讀者をして思はず欠伸せしむ。「ダフニス」は「マーキユリー」の子にして羊を牧する者なり。「アレキシス」は「ヴハージル」の「エクローグ」中にある人物なり。抔と合點の行く迄は、一通り古典字彙と相談せざるを得ず。相談して其故事來歴を胸中に疊み込んだ處で、如何程吾人の詩情を刺激するや。(かけまくもあやにかしこき)抔は、譯は分らずとも、何となく有り難き心地のせらるゝは、全く幼時よりの習慣に外ならず。咄「ダフニス」「アレキシス」何者ぞや。汝の素性を知るも、われ固より毫釐の愉快を感ぜざるなり。且つ

其風景を敍するに當つては、巧を求むる事愈急にして、巧に失する事愈甚し。

"Here waving groves a chequer'd scene display,
And part admit, and part exclude the day;
As some coy nymph her lover's warm address,
Nor quite indulges, nor can quite repress."

通讀一過すれば、人をして轉々比喩の輕妙なるを感ぜしむれど、二讀三讀の後は、興味自ら索然たり。朗誦數番の後に至つては、復一點の人を動かす者なし。詩品高からざればなり。

「ポープ」の儕輩「アヂソン」は、明かに山川の趣味を解したりと覺しく「スペクテートー」第四百十四號に、自然と人巧とを軒輊して曰く、後者には浩蕩の景なく、磅礴の氣なきが爲め、詩情を動かすの點に於て甚だ不足する所あり。人間の細工善しと雖ども、溫籍にして纖巧なるに過ぎず。雄峻博大の氣象、觀者をして絶叫せしむるに至つては、固より自然に待つなきを得ずと。實に適當の斷案と云ふべし。然るに僅か數行下に至れば、語勢急に一轉して、論旨忽ち逆戻りを爲す。其言に曰く。成程假山盆池は亂山野水に及ばざるべけれども、天然の眞景、人爲の小細工に似れば似る程、興味の加はるものなりと。蓋し「アヂソン」の了見にては、造化の所作が人間の意匠を含めば、所謂天人一致の景を生ずる故に其趣味益加はると考へしなるべし。去れど、其

言を論理的に吟味すれば、不都合の角なきにあらず。先づ「天然が人爲に似るときは、前者の價値益貴し」と云る命題を、仔細に思議すれば、其前半には、四個の異なる場合を含むを見るべし。第一造化人爲相似るは、兩者の間に相互の意識ありての事か。やさしく云はば、其似るは、御互に約束づくで、君の眞似がして見たい、よろしいやり玉へと云ふ樣な相談あるか。第二は相方とも無頓着にて、一向豫約の相談のと云ふ事なく、突然無意無識の裏に合したるか。或は相手の一方は眞似たいとの志願あれども、一方にては御かまひなく、所謂片思ひの間に成立したるものか。何にもせよ兩者が似る以上は、以上四種の中、いづれか其一に居らざるべからず。今解し易き爲、此四色の場合を表にて示せば左の如し。

第一　天無意、人無意。
第二　天無意、人有意。
第三　天有意、人無意。
第四　天有意、人有意。

右の內第三第四は採用しがたき者なり。天に意識あり自然に意匠ありとは、常識の許さゞる處、假令ひ常識以外に一隻眼を具へて、天に意志ありと說くも、其意志は人巧に似んと欲するの意志なるや否やは殆んど疑問外に超脫するの點と云ふべきなり。倪黃の筆意を慕ふて、巑岏の山突兀

として、地球上に現出せりとは、理を解する者の誰しも夢想せざる處なるべし。去れば右四條の中許容すべきは、第一と第二のみ。其許容すべき二條の第一は、理窟上不都合なきも、實際は萬に一つも起らざる場合なり。例へば畫師が想像を逞くして、牡丹の傍に、唐獅子とか云ふ一種異様な動物を描き、又は潑墨淋漓の裏に、龍とか稱ふる怪物を寫さんに、不思議にも腦裏一團の怪像世間に實在して、暗雲黑雨の際に隱約として蒼鱗鐵爪を認め、嫩江嬌綠の底に金毛霜牙を見る人續々あらば兎に角、實際斯様なものは餘りどころか、誰も拜見した人なければ、此場合を除去するも差支へなからん。斯く四條の中、三條は役にたゝぬとすれば、役に立つもの實際生ずる場合は、第二に外ならず。第二の場合とは天化人造に似るに意なく、人造天化に似るに意あつて、兩者の間に類似の生ずる場合なり。今少し平たく云へば、人が自然を摸擬し、摸擬したる結果遂に人巧と自然の間に髣髴たる點を見認め得るに至りしものなり。そこで通例修辭上の順序より云へば、摸倣したる者が摸倣さるゝ者に似ると云ふが適當にて、例へば山陽が蘇東坡を摸したりと云ふ事判然たる以上は、蘇東坡が山陽に似ると云はんより、山陽が蘇東坡に似たりと云はん方適當ならん。尤も親が子に似るも、子が親に似るも、似るは一なれば何處より云ふも、理窟上不都合なしと云はゞ夫迄なれども、自然が人巧に似る時は、前者の價益貴しと云ふに至つては、大に其意を得ざる者あり。眞似らるゝ者が眞似る者に類する故に、一段の光彩を添ふと論じ來る。眞

似らるゝ者は隨分迷惑の話しなり。落語家の假聲が役者に似たらば、其が爲めに價値の增すは、役者にあらずして落語家にあり。さるを假聲が旨き故、役者のねうちが上ると云ふに至つては、役者の不平察すべきなり。天地固と意なし。若し之れ有らば必ずまさに「アヂソン」に向つて其憤りを泄さん。深閨の處女擬して娼妓に扮す。卑賤の婦良家の女に矜式せらる、其榮思ふべし。眞似らるゝ者の價値が眞似る者の爲に生ずるは獨りかゝる場合にのみ限る。「アヂソン」自然に對する事娼婦の如く、人巧を遇する事良家の女の如し。其當否は偖置き其人巧を重んじたるは、復疑ふべからず。既に前段に於ては造化の雄渾瑰麗なる遠く人巧に駕すと說きながら、末段に至つて、人巧を重んずる事造化に過ぎたり。矛盾に非ずして何ぞや。論理的の筆鋒を用ひて定規づめに文人の所說を駁するは、慘酷の致し方なれど、誤ちある以上は是非なし、よし一歩を讓つて、此誤ちを等閑に付するも、「アヂソン」が重きを人爲の上に置くの分に過ぎたるは掩ふべからざるの事實なり。

「アヂソン」「ポープ」は當時の文豪なり。其天然界に對する感情を觀て、他の意志のある處は、大概察するに足らん。猶其他の例を知らんとならば、Thomas Sergeant Perry, Mountains in Literature, in Atlantic Monthly, Vol. XLIV, p. 302+ を參考すべし。

當時の文人は、概ね皆かくの如く、殆んど、一人も目を天然界に注ぐ者なく、俗氣塵氣の裏に

生息して得々たりしが、物極まれば反るの道理にて、漸くかゝる社會に不滿を抱き、人巧世界を解脱して、轉捩一番直ちに人情の源頭に歸着せんと欲する者輩出せるものから、偖こそ自然主義及び「ローマンチシズム」と稱する二つの新象を文壇に見はすに至りたるなれ。一は思索の結果にて、歌舞燕遊の樂をすて、置酒高會の小天地を撤脱して、廣く江湖に飄流し、青山白雲の趣きに俗腸を洗ひ清めんと欲し、一は歴史的の現象にて、遠く中世紀に溯り、普く遐方殊域の人間を捕へ來りて、世界共通の情緒を咏出せんと欲す。此歴史的研究は十八世紀の中頃、「マクフアーソン」及び「チヤタートン」抔が古文書を僞造して一世を瞞着せんと企てたるにても明かなるのみならず、千七百六十五年に「パーシー」が Reliques of Ancient English Poetry とて上代の謠歌を編纂して出版せるを見てもわからん。尤も「ローマンチシズム」の事は問題外なれば措て論ぜず。但し文學者によると此自然主義と「ローマンチシズム」を區別せず。且つ余が知る所を以てすれば、「自然主義」と別に標題を掲げて論じたるは、「ゴス」の十八世紀文學及び其他二三の書にすぎざれど、余は此主義を以て斷然「ローマンチシズム」と區別し、密接の關係あるにもかゝはらず、兩者を混合するなからん事を望むなり。兎に角此自然主義が如何にして發達し來りたるやと云ふに、前に述べたる如く「ローマンチシズム」の勃興と共に、山川を咏出する詩人漸く輩出するに至り、遂に「ポープ」一派の詩風を杜絶せんとするの勢を生ぜり。其人々を擧ぐれば、

「トムソン」「グレー」「コリンス」「ゴールドスミス」の諸家にて、或る歴史家(「コツペー」と覺ゆ)は是等の詩人を總稱して過度の詩人といへり。蓋し其詩巧緻派と自然派の中間に立つの謂なり。

然し是等の詩人を一々に評隲せんは、中々手數のかゝる仕事なるのみならず、調べも行き屆かざる故、其内より一二人を選んで、其大體を御話し申さん、先づ第一に來るものを「トムソン」とす。此人は時代より云へば、巧緻派の詩人に相違なきも、殆んど取り除けの姿にて、其詩思別に一機軸を出して、清曠時流を壓せり。されば「レスリー、スチーブン」も之を評して、(English Thought in the Eighteenth Century) "He was an outsider of that brilliant Society" と云へる位にて、其の自然を愛したるは The Seasons を讀んで明かに之を知るを得べし。其詩は春夏秋冬の四部より來り、毎部其期節に關する一切の風景を敍したる大文字なり。假令此大文字なきも、既に Of a Country Life の首に、

"I hate the clamours of the smoky towns,
But much admire the bliss of rural clowns."

と咏じたるにても、其嗜好の一斑は窺ひ得べし。且つ其風光を敍するに當つて、古來の文人が毫も意を留めざりし、山川を描して、斬新の元素を文界に輸入せるは、一見識あるの作家といふべ

し。去れば「カムブリヤ」の山を寫しては、

"To where the broken landscape, by degrees
Ascending, roughens into rigid hills;
O'er which the Cambrian mountains, like far clouds
That skirt the blue horizon, dusky rise."

といひ、又「トウイード」の水を引用して、

"You, on the banks of soft meandering Tweed,
May in your toils ensnare the watery breed,
And nicely lead the artificial flee,
Which when the nimble, watchful trout does see,
He at the bearded hook will briskly spring:
And, when he's hook'd, you with a constant hand
May draw him struggling to the fatal land."

と左も愉快らしく漁獵の様を述べたり。試みに之を「ポープ」の「ウインドソー」森中に云へる下の數句に比較せん。

"In genial spring, beneath the quivering shade,
Where cooling vapours breathe along the mead,
The patient fisher takes his silent stand,
Intent, his angle trembling in his hand:
With looks unmov'd, he hopes the scaly breed,
And eyes the dancing cork, and bending reed.
Our plenteous streams a various race supply,
The bright-ey'd perch with fins of Tyrian dye,
The silver eel, in shining volumes roll'd,
The yellow carp, in scales bedropp'd with gold,
Swift trouts, diversified with crimson stains,
And pikes, the tyrants of the wat'ry plains."

「トムソン」「ポープ」共に同様の事を、同様の詩風にて述べ立てたり。但し流麗の點より云へば、「ポープ」「トムソン」に優るが如しと雖ども、飾り氣なき處より觀れば、「トムソン」の方「ポープ」に駕せん。夫のみならず、「トムソン」の詩は、かゝる敍事にて充牣し、其田舍を愛す

るの情、油然として筆墨の上にあらはるゝなり。尤も一言せざる可らざるは、此男かく自然を愛したりと雖ども、申さば死したる現象の往來復刹する樣を外面より寫し來つて、毫も其內部の活動を會せず。只雪が降る。風が吹く。花が咲く。田舍は面白し。釣りも自由なれば、獵も勝手に出來る。去るが故に、……grant, ye powers, that it may be my lot,／To live in place from noisy towns remote といふなり。高尙なる詩想は、中々此位の事では濟まず。漸々自然主義が發達するに從ひ、景物界は活動力なり。天地間には鬱勃たる生氣あり。抔感ずるに至るなり。

「トムソン」の自然主義一轉すれば、「ゴールドスミス」の自然主義となる。蓋し泰西の文學史家、此好詩人を以て自然派の中に入れたるはなき樣なれど、こは其詩の當時に流行せる雄聯體（ヒロイックカプレット）を用ひて、「ポープ」の故型を踏襲せるに由るに過ぎず。其意志の向ふ所を觀れば、迥然として前輩と同じからず。之を自然派中の一詩人と呼ぶも、毫も不可なきが如し。然らば其山川に對する觀念は如何。夫の有名なる The Traveller 及び The Deserted Village の二篇、明かに其所思を表出して餘りあらん。蓋し「ゴールドスミス」の愛する景色は、龍從の山にあらず、洸洋の水にあらずして、溫籍平穩の樂境にあり。一壺の別天地 Where smiling spring its earliest visit paid,／And parting summer's lingering blooms delayed と云ふ樣な處にして、其仙鄕染みたる景物中には、人物が生息して、而も安樂無事に閑生涯を送らざるべからず。必ずや The

shelter'd cot, the cultivated farm,／The never-failing brook, the busy mill を具せざるべからず。必ずや軟草氈の如く、春草油の如く、老幼は相携へて其上に遊び、少長坐を分つて其傍らに坐せざるべからず。左らば其山川を愛するは、夫程山川其物を愛するにあらず。山川善く朴枘溫厚の民を撫育し、都會の紅塵桃源の仙鄕に到らざるが爲のみ。故に人は主にして、山川は客なり。只に客なるのみならず、深山大澤無人の境に至つては、歩を回らして卻走せんとす。元來「ゴールドスミス」は、農業主義を重んじて、商賣主義、工業主義下つては錙銖爭奪主義、毫厘懸引主義を痛く嘆きし人にて、Ill fares the land, to hastening ills a prey,／Where wealth accumulates, and men decay ともいひ、又は Laws grind the poor, and rich men rule the law とも、Hence, should one order disproportion'd grow,／Its double weight must ruin all below とも嘆じ、力を極めて經濟的の世界觀を排擊せり。是は恰も「ゴールドスミス」頃より、現今の政治經濟と云へる學問が漸く開けて、「ヂスレリー」の云へる如く、人間を視ること貨物の如く、有形的產出物の多寡にて、其價値を判ぜんとするの傾きを生じたる爲め、保守主義の詩人の事なれば、飽迄此風潮に逆らつたる次第ならん。果せるかな、「ゴールドスミス」死して漸く二年なるに、夫の有名なる富國論の著あり。（千七百七十六年）著者「アダムスミス」其中に記して曰く。That unprosperous race of men, called *men of letters*, must neces-

sarily occupy their present *forlorn state* in society much as formerly, when a scholar and a beggar seem to have been terms very nearly synonymous と。文人も乞食同様なりと斷言せらるれば夫迄なり。「ゴールドスミス」如何に閭巷に窮したりとて、乞食と罵られては餘り心持よくあるまじ。幸ひにして富國論に先つて死し、此悲むべき異名拜見の榮を免かれてさへ、其功利説に反すること斯の如し。若し富國論を見たら何とか云はん。兎に角「ゴールドスミス」は、田舍の生活を愛せし人なり。之を愛したるが故に、之に伴ふて離すべからざる、田園、村巷、小川、水車等、一に天然の景物を愛したり。然れども人を離れて山川を愛することなきなり。山川其物を戀ふことなきなり。「ポープ」の如く、宴席の小天地に踟躕せるに優ること遠しと雖ども、自然を愛する事食色に優る抔とは、申し難からん。

「トムソン」の The Seasons は無韻體なれど尙時調に拘束せらるゝを免かれず。「ゴールドスミス」の詩思、大に「ウオーヅウオース」に近づけりといへど、其風格未だ雄聯體を脫する能はず。此陋習を一洗して、詩法崇拜の迷夢を攪破せるものを「クーパー」となす。英詩「クーパー」に至つて、一革命を經たりといふも可なり。

「クーパー」嘗て「ホーマー」の詩を譯しけるとき、(千七百九十一年)、或人其草稿を覽て、一二行を改竄せんとしければ、大に怒つて直ちに書を裁して其人に寄せ、先づ當時の詩風は流麗を

尙び、「ポープ」を祖述するに過ぎざる由を述べ、且つ云ふ樣、「……去れど若し「ポープ」を摸して、其眞を得る事能はず。章句の整然たる、格調の圓滑なる、彼が如くなる能はずんば、全く之を眞似ざるの優れるに若かず。眞似たる詩には氣力なし。皆骨拔なり。たとひ一句なりとも、意味のある事を咏ぜば、それにてわが願は足らん。全篇流暢、聽者の耳を傾くるに足るも、其說く處、癡人の囈語に等しきは、わが望むところにあらず」と。斯る氣分故、夫の有名なる The Task 中には、Damon, Chloe, Strephon, Musidora 抔いふ、不都合なる古典的の苗字を用ふる事、極めて希なるのみならず、前人の曾て使ひし事なき、黃瓜とか、糞尿とかいふ、穢なき文字を、遠慮なく臚列して大に得意の色あり。且つ一篇の結構抔は、隨分亂暴にて、長椅子を咏ずると思へば、忽ち田園の景色となり。再轉すれば、宗教の議論となり。夫が濟めば、直ちに奴隷問題に移るといふ樣に、惡くいへば取留めのなき位なり。詩風旣に此の如くなれば、其詩想の程も大概は推察し得べし。今其自然に對する詩想を說くに當つて、聊か其出處を審かにせん。

人世に不平なれば、必ず之を厭ふ。世を厭ひて人間を辭職するものあり。小心慳呆の人これなり。世を厭ひて之を切り拔けるものあり。敢爲剛毅の人これなり。濁世と戰つて屈せざるものは、固より勇氣なくては叶はぬ事。五十年の生命を拋つて、自ら憤懣の肉を屠るもの、亦相應の勇氣を要すべし。かほどの勇氣なくして世に立つの才なく、又世を容るゝの量なくば、如何にして可